

特 500  
604



3

0038683-000

特 500-604

変態性的婦人犯罪考

石角春之助・著

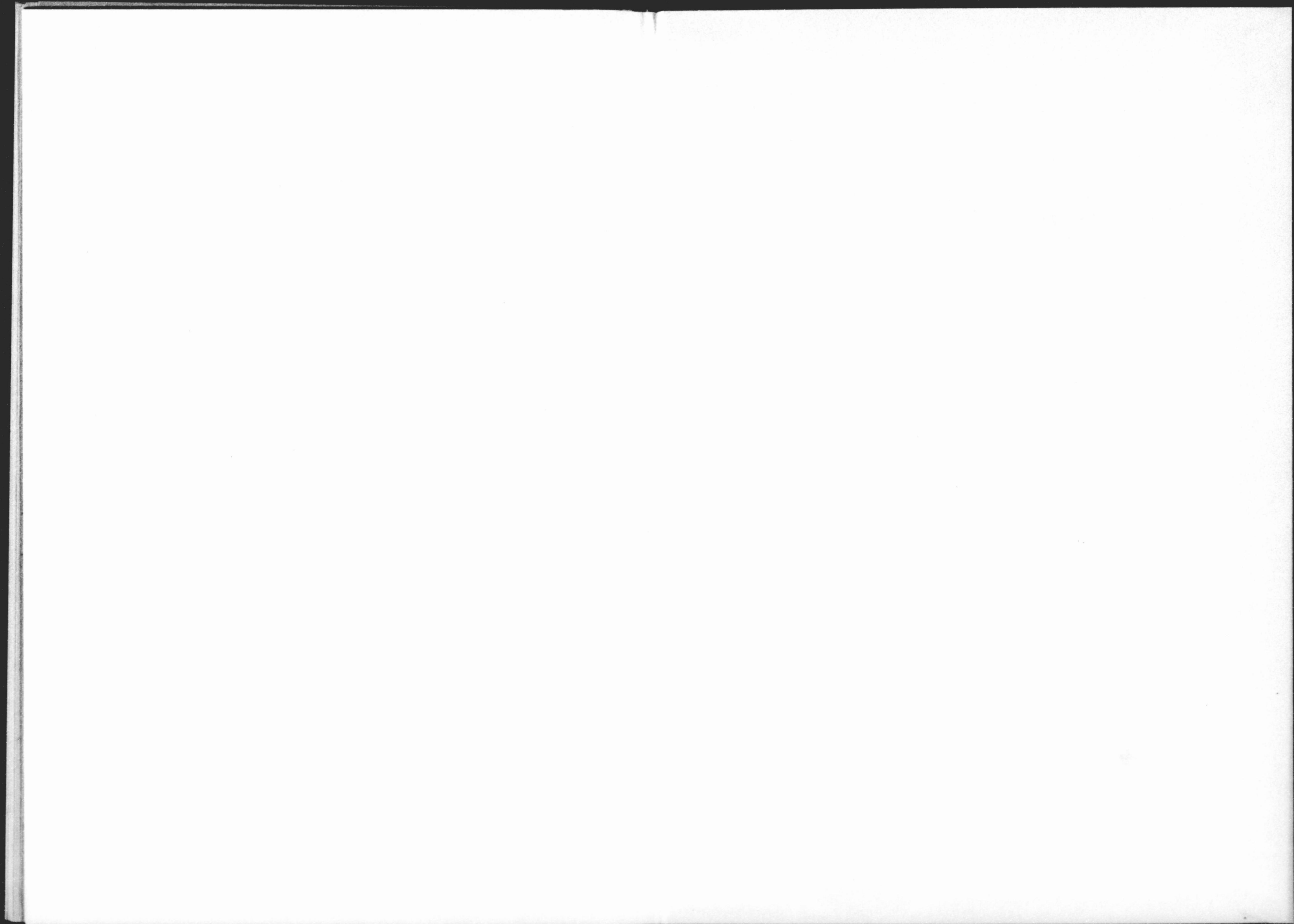
温故書屋

昭和2. 1 1

AGG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。







NI-36-99

特501

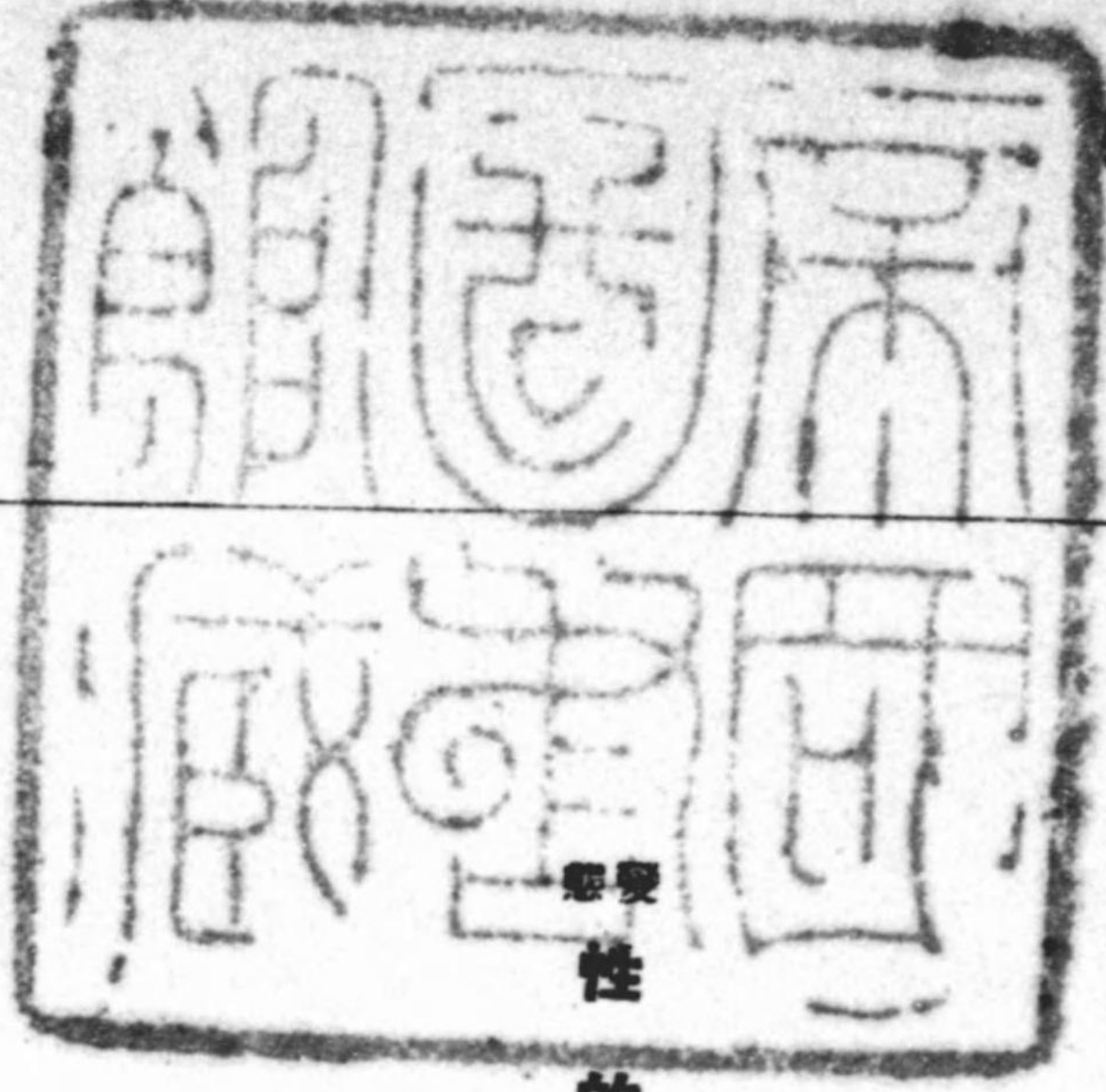
604





—禁風I—石

特500-604



性的  
的  
婦人  
犯罪者



石  
角  
香  
之  
助  
著

溫  
敦  
香  
屋  
版





函	鳳
號	12
永久保存	

自序

近來婦人に關する討究が、日を逐ふて旺になつて行くことは、婦人の爲め誠に結構な事と言はれなければならない。が、しかし、これ等は多く、積極的に其の地位の向上若くは、權利の獲得に關する事項であつて、これが消極的救済に付いての研究は、未だ充分と言ふことが出来ない。

殊に貧に苦しみ、性に煩え、戀に泣き、境遇に虐まれ、更らに生きるに活き伸びられず生きながらのミイラ同様な生活に悩んでゐる不憫な、婦人の犯罪に關する最も肝要な研究が、今日の處等閑に附せられてゐる傾きがある。少くとも今日の處、婦人の生理的方面が、其の科刑に關し重要な地位を占めず單なる參考資料に過ぎないものとされてゐることは、一般婦人の爲め惜むべきことと言はなければならない。と言ふのは、婦人の犯罪の大部分が、生理的犯罪であり、其の動機が悉く、これに關せざるものがないからである。とりわけ境遇に變化の多い私は、地獄のどん底で唸いてゐるような、憐れな婦人の多













六	賣春婦の生活………	二四四
七	賣春婦の心理………	二五二

第四 變態性慾犯罪

一	日本婦人の變態性慾………	二五七
二	變態性慾の犯罪………	二六八

— 目次終 —

# 變態性的婦人犯罪考

石角春之助著

## 第一 總 說

### 一 婦人犯罪と性の別

何故に婦人犯罪が變態であるかと言ふに、それを判斷する前に、先づ婦人犯罪が男子の犯罪に對し、どう違つてゐるかを知らる必要がある。最も此の差異は概念的のものであるから、これに對して例外があることは言ふまでもないが、兎に角、女性的犯罪は其の名が示すように、一般に女々しく陰險であり、小刀細工であり、感傷的であり、滅茶苦茶であり、而かも、其の多くが輕微な犯罪であることは事實に徴し明かである。



婦人犯罪が變態であると言ふのは、即ち殆ど其の總てが、正則な判断から出發せず感情昂奮の結果、滅茶苦茶に何等の思慮もなく、黒を黒と見ず一圖に白と信じこれを行ふのが例である。換言すれば罪を犯す意思が、正則な意思の決定でなく常に變則的な意思の發動である。

斯の如く婦人の犯罪が、男子のそれと異なるのは、言ふまでもなく智力の問題であるが、其の智力の差異は、又性の問題であるから、先づ性の決定に關する學說を擧げ兩者の差異の生ずる以謂を明かにし順次これ等の關係を述べることにする。

同じ作用で、同じ人間でありながら、どう言ふ譯けで、人が男たり、女たる原因に就ては、古來から頗る疑問とされ、問題にされつゝあつた。而かも、これに關してさまざまと論議され研究されて來たことは、諸子も知らるゝ通りである。即ち古來にあつては、多く統計上より論議し或は兩親の體質、或は其の年齢の差異、或は又遺傳等に因つて、性別の生ずるもの、如く心得、例へば父の年齢が母の年齢よりも多い時は、男子が多く生れ、これに反し母の年齢が父の年齢よりも多い時は、女子が多く生れるなどと主張し其の統計を示したものである。

處が又他の者は、これと全く正反對に、父の年齢が母の年齢よりも多い時は、女の子が多くこ

れに反する者は、男の子が多いことを統計によつて立證した者も少なくない。

尙父母の體質の差異によつて、性別の生ずることを信ずる者は、父の體質が母の體質よりも強健であり優壯であれば男子が多く、これに反する者は、女子が多く生れると言ふのである。

遺傳關係を以て性別の生ずる原因であることを信じて居た者は、父乃至母の血統によつて、遺傳的に男子又は女子が多く生れると言ふのであるが、此の說の採るに足りないことは言ふまでもないことである。

父母の年齢の差異並に、其の體質の差異を根據とする說は、生物學上の研究に基いたものではないが、實際に於てその傾向のあるのは、見遁がすことの出来ない事實である。けれども、これを以て性の判断に關する根本的の説明と見ることは、無論不可能なことである。何故なれば性を決定することは、統計上の判断でなく生物學上の斷定でなければならぬからである。

では生物學上如何なる研究が發表されてゐるかと言ふに、それに就いては、近來二方面に研究されつゝある。その一つは性染色體の數により決する說で、他の一つは性交に際し一方の快感の強弱に關する說である。が、其の何れにするも根本問題は、生殖細胞である精虫、卵子の種類に



よつて行はれることは動かすことの出来ない事實である。

そこで生殖細胞の核を形成してゐるクロモドローメンのことを一言して置く必要がある。クロモドローメンと言ふのは、細胞の核中に存在する染色體であつて、一定の色素に染まる糸のような線條である。此の線條は一般動物に共通するものではあるが、しかし、動物の種類によつて、其の數は必ずしも同一ではない。けれども、同種の動物にあつては、其の數が常に一定してゐるのを原則とするが、生殖細胞に限り其の例外を爲し時には、不同のあることがある。即ち同種の精虫の核に一個多きクロモドローメンを有する者と有せざるものがある。そして、其の一個だけ多くクロモドローメンを有する精虫が卵子に會合すると、女子となりこれに反し一個少なくクロモドローメンを有する精虫が卵子に會合すると男子が出来ると言ふのである。

要するに人間の精虫には、普通二十三個の染色體クロモドローメンを有する者と今一個餘計に有する者との二種であるが、これ等は其の數が各々殆ど同一に存してゐる。尙卵子は何れも普通二十三個の染色體のみを有する者と、一個の性染色體とを餘計に有する者があつて、常に男女の均等が保たれるように出来てゐるのである。

尙性交の際に於ける男女快感の強弱によつて、性を判断する説があるが、これ等のことは餘り必要もないので省略することにし、茲では斯る作用によつて、性別を生じた女性の犯罪が、如何にも女々しく小刀細工であり、陰險であり、こせ／＼した象かたちで現はれることの理由を一言して置かう。

全く自然程不可思議なものはない。些つとした差異から、一方は強者となり、他方は弱者となり、一方が能動的なれば他方は受動的となる。即ち男の強壯に對し女は、其の調節を圖る爲めに軟弱を常とする。これが自然の常道である。そして、男が強暴を以て向ふ時、女は陰險を以て對持する。これが人間界の一番大きな争闘である。

或學者が男だけでは、人間と言ふことが出来ないように、又女許りでも人間と言へない。此の異つた二個の存在があつて始めて完全に人間と言ふことが出来るのだと言つてゐるが、全くそれに相違ない。人間の存在は全世界を支配する力である。此の絶大な力こそさまざまの要件を備へてゐる。男の足りない力も女の足りない力も總てを具備したものでなければならぬ。そして、それは人間である。弱者と強者との結合である。



かう考へて來ると婦人の犯罪が、個性すつくりの小つほけな根性らしい、こせついたものであることに、何んの不思議も不可思議もなくなる。寧ろ當然な出來事である。

兎に角、人間の半分存在しか持たぬ女子と、他の異つた半分の存在を持つ男子と、同一視することが、そして、同じように同じ刑罪を科することが、果して正當なものであるか、どうかは甚だ疑はしい事實である。少くとも男と女が角力がとれないように、互角の勝負をさせることが、否、それ以上の責任を負はせることが、如何に残酷であり、無意味であり、更らに大きな誤りであるかを感じずには居られない。

以下これ等に就き順次述べることにする。

## 二 内分泌と婦人の能力

前段で性の別の生ずる所の大體を述べた譯けであるが、しかし、これだけは男性と女性と特異なる區別を知ることとは、無論出來ないことである。殊に其の成長と共に男は益々男らしく女は

愈々女らしく兩性の特徴がはつきりし全然區別されるに至る理由を解することが出來ない。そこで先づこれを説明する爲めに、スタイナーハ氏の内分泌に關する實驗報告を採用して順次述べることにする。

氏の實驗報告によると、動物は無論のこと、人間でも幼少の時、男性なれば兩側の睾丸をとつて置くと、發情期が來ても男性の特徴が現はれず例へば、喉頭が少しも發育しないで、全く小供そのものように、高調な聲を出し、而かも、聲變りなど少しもしないし、又口鬚が生へず異性に對する感情は起らず所謂中性の人間が出來あがる。

これが女性であれば、男子の睾丸に對する卵巢を矢張り幼少の時とり去つて置くと、發情期が來ても少しも變化しない。が、しかし、前にも言つたように、第一性的に於て全然其の組織が異つてゐるので、多少そこには女らしい處があるとしても、女性的要件の一つである月經が伴はない、乳房が擴大しない。男性に對する性的感情を持たない。

所が不思議なことには、かうした中性の者に對し男なれば、睾丸の一片、女なれば卵巢の一片を腹部の筋肉に植付けると、遅ればせに性の特徴が現はれ聲變りがしたり異性に對する感情を持



つようになつたりすると言ふのである。

以上の實驗報告の眞偽は兎に角として、少なくともかゝる偉大な力を齎す原因が、即ちどこからどう言ふ作用で起るか、先づそれを明かにする必要があるが、しかし、此のことは極めて専門的に渉る事項であるから、其の詳細なことは避けるが、兎に角、人が發情期になつて、著しい變化を期たし男女共に其の特徴が、判然して行くのは、生殖腺の内分泌の作用であつて、其の變化を掌る因は、所謂ホルモン（又はスベルミンとも言ふ）である。内分泌とは外分泌に對する言葉であつて、而かも、外分泌のように一定の臓器も道管も有せず例へば、咽喉の下の甲状腺の如く、腎臓の上の副腎と言ふ腺の如き又は腦中の松果腺の如き乃至は、腦下垂體と言ふ腺の如き何れも内分泌を掌る處であるが、一定の道管なく孤立してゐるのである。言ひ換ふれば、外分泌腺の如く各々獨立した自己獨特の道管を有しないのである。が、しかし、其の代りに自己の腺内に通つてゐる血管内の血液中へにぢみ出すことが出来るのである。何れにするもスベルミンと稱する化學的の物質が、血液内に滲み出て、其の血液と共に全身に循環し身體内の各臓器を刺戟し、覺醒することが旺盛であればある程努力も亦旺盛である。言ひ換ふれば、努力と内分泌とは密接な關係

を有し努力の旺なことは、内分泌の旺なことを裏書きすることになる。少くとも内分泌の盛衰は、犯罪を異にするものである。即ち老衰者の犯罪が、性を離れた貧慾心から起る窃盜の如きと明かに、區別すべきものである。

内分泌と犯罪との密接な關係を立證する爲めに、最近の統計を示し諸子の参考に供しよう。最も此の統計は私の力で作つたものであるから、無論、正確なものとは言へない。けれども總ての統計がこれに似通つてゐることは事實である。

- ▽十四年以上二十年まで(廿四人)
- ▽廿一年より三十年まで(十四人)
- ▽三十一年より四十年まで(七人半)
- ▽四十一年より五十年まで(六人半)
- ▽五十一年より六十八年まで(十一人)

これは六十二人中の比例である。が、其の約半數が十四歳から二十二歳までの間にあることは聊か意外である。更らに某氏の統計を見るに、



十七歳まで	九人	二十歳まで	六人
廿五歳まで	五人	三十一歳まで	四人
四十二歳まで	六人	五十三歳まで	六人
六十四歳まで	八人	七十歳まで	二人

これ又發情期に於ける多數を物語つてゐる。言ふまでもなく此の統計は、前者よりも細を穿ち而かも、其の正確なるものであるが、これによつて觀るも十四年より十七年に至る僅かに三ヶ年の間に、九人の多數を數へ年齢と共に順次、其の數を減じ或一定の年齢に達し更らに、其の數を増してゐることは、面白い現象である。

これは言ふまでもなく生理的變化に伴ふ現象で、局言すれば、生殖腺の内分泌に關する反映である。殊に婦人に於て、それが最も顯著で、婦人犯罪が特に變態であると言ふのも蓋し生理的影響の大なるが爲めである。即ち婦人には婦人特有の月經なる生理的變化があり、而かも、此の月經と犯罪とは、恰も鎖の兩端の如き關係を有し、婦人犯罪が多くが此の期に於て行はれるのである。

る。

殊に月經開始期に於ける生理的若くは精神上的の變化は、最も特異なるものがあるが、これ等に就ては、何れ後日詳細に述べる機会があるから、こゝでは婦人の犯罪能力と、發情期との關係を述べることに止めて置く。

要するに我が新刑法の主旨は、一刀兩斷を以て滿十四歳以上の者を犯罪能力者とし、其の智能の程度如何を論じないのである。だからそこに充分な智能を有する者と、未だ完全な智能を有しない者との別が生じ、而かも、發情期に達したる者と、然らざる者との別が生ずることは言ふまでもないことである。

果して此の主義が、正當なるものであるか、どうかは一朝にして論斷することは無論、出來ないことではあるが、少くとも性慾學の立場から考察する時は、甚だ迂遠なる立法例と言はねばならない。何故なれば、女が女たるの本質を發揮する時期は、言ふまでもなく春機發情期以後であり、而かも、これ以前は少女にして、心身俱に未だ完全な發達をなさず無論、能力者としての要件を具備する者ではない。



殊に人の勢力の源せんが、生殖腺の内分泌にあるとすれば、其の限界たる發情期を以て、能力の限界たることは言ふまでもないことだ。然るに機械的な人の年齢を以て、其の能力を判断せんとすることが、如何に大なる誤りであるかは、多言を要せずして明かである。

少くとも我が刑法が、男女の區別なく満十四歳を以て、一限界となし犯罪能力者としての身分を創設したことは、大なる誤りと言はねばならない。

猶これに就ては春機發情期の犯罪と對照し後日詳しく述べることにする。

### 三 婦人の性的犯罪

犯罪の原因を爲すものは、固より同一ではないが、これを大別すると、

- (一) 性的犯罪
- (二) 物的犯罪
- (三) 政治的犯罪

の三種である。か、猶性的犯罪の中には、廣義のものと、狹義のものとの二種がある。狹義の性的犯罪とは、直接性に關する犯罪で、例へば姦通の如き密淫賣の如き若くは、強姦の如きであるが、廣義の性的犯罪は、前者の如く直接性に關係しない犯罪であつて、而かも、性を根底に置き間接に犯す處の罪である。例へば性の満足を得んが爲めに、窃盜を爲すが如き若くは、性を失つた爲めに嫉妬罪を犯すが如き又は、性の亂用の結果墮胎罪を犯すが如き要するに性を間接にする犯罪である。今これを詳細に區別すると、

#### (一) 狹義の性的犯罪

- ▽姦通罪
  - ▽強姦罪
  - ▽重婚罪
  - ▽猥褻罪
- 密淫賣の罪

#### (二) 廣義の性的犯罪

- ▽性を満足する窃盜罪
- ▽失戀より生ずる傷害
- ▽性の亂用より生ずる墮胎其の他の罪
- ▽性を満足せんとする放火其の他の罪

先づ大體以上の如きであるが、要するに狹義と廣義との別は、其の直接と間接の區別で、性を



直接にする犯罪が狹義でそれに反するものが廣義であるから、直接性的犯罪並に間接性的犯罪の字句を用ひる學者もある。

何れにするも犯罪と稱するものゝ多くが、直接若くは間接に性に關してゐる。従つて「犯罪の裏に女あり」の格言が生ずるに至つたのであらう。全く犯罪と性とは、離るべからざる關係があり、一見性に關係を持つてゐない犯罪でも終局は、性を土臺として性の亂用が糸を引いてゐる。例へば單なる窃盜にしても煎じつめると、それが藝妓なりカフェー女なりに、つぎ込む手段であつたりすることは、實際に見て少くない。婦人の萬引にしても矢張りそうである。直接にこそ性に關係を持つて居ないが、其の萬引をする遠因を訪ねると、矢張り性を根據にしてゐる。即ち異性から美しく見られたい爲めに、乃至は異性に見棄てられない爲めに、より美しくより奇抜にしたいと言ふのが、萬引を爲すに至る道程である。最も競争心は、同性間に於ても用ひられることではあるが、其の競争心にしても結局は、異性に對する自家保存である。

これ等のことは、心理編で最も詳しく述べるとして、こゝでは婦人自身が、強姦罪を犯すことは出来ないが、法律上間接にこれを犯すことが出来るかどうか就て、少しく述べて置かう。

婦人は第一性的關係に於て、婦人自ら強姦罪の主體となることは、無論出来ない。が、男を利用して、これを犯させることは、固より可能な事實である。けれども、犯罪能力ある男を利用して、これを犯させる時は、教唆であつて正犯ではない。

處が犯罪能力のない刑事未成年者とか、白痴とかを利用して、強姦を犯さしめる時は、利用された男は、固より手足として働いたに過ぎないから、其の場合は法律上間接正犯として其の利用した女が正犯として責任を負ふことになつてゐる。だから結局、女は直接には強姦罪を犯すことが出来ないが、刑事無責任者を手足として、これを犯すといふは出来ることになつてゐる。

廣義の性的犯罪の例として、最も適當なのは、何人もよく知る處の彼の八百屋お七の犯罪である、世間知らずのお七は、前髪姿の美しい左門を一目見ただけで戀しさ懐かしさに悶える身となり、纏て其の戀を充さんが爲めに、直接性に關係のない放火をやつつけた譯けである。が、しかし、それが性に關する犯罪であることは、言を俟たない事實である。即ち彼女は放火をして、保険金を詐取しようの、それによつて物的慾望を充たさうのと言ふのではない。放火をして家がなくなれば、戀人の傍に行き甘い味が吸へると思つたのである。言ひ換ふれば、性の満足を得んが



爲めの手段として、放火を選んだに過ぎない。

これは少し餘談かも知れないが、當時の法律に依ると、「火附候者火罪」とあり、而かも但し書に「但燃立不申者引廻之上死罪」とあり、最も重刑を以て處罰したものである。殊にお七のような世間見ずの無智な小娘に對しても尙且つ「燃立候に就き火罪」の刑で處斷されたことは、諸子も知らるゝ處である。これを今日の法律なり、思想なりから觀る時、如何に當時の法律が、大衆の生活に無關心であり、無謀であり、殘酷であり、辛辣であつたかを知ることが出来る。少くとも十六の娘の心持ちなど、當時の裁判官には考へられないことであつた。否、當時の法律思想が裁判官をしてそうしたことを考へさせなかつたのである。最もお七を調べた土井大炊頭は、お七の心根の不惻さを思つたものか、それともお七の美貌に打たれたものか、其の邊の處ははつきりしないが、

「そちは十五であらうかの」と同情ある調べ方をしたそうだが、お七にはそれがどう言ふ意味か解らない處へ重ねて、

「偽りを申すとその方の爲めにならぬぞ、そちは十五であらう」と、語尾を強め厭でも十五にしようとかんだので、相役の中山解勘由も何時の間にか其の氣になり、急に猫撫で聲を出し、

「そうであらう、十五であらう」と相籠を打つて呉れたのに、肝心のお七はそれでもまだ譯けが解らず、

「いゝえ、十六で御座います」と折角の御同情も、御老體二人の心痛も知らず本當のことを言つて了つたので、遂に救ふべくもなく火罪の刑に處せられたのであるが、全く昔の法律は滅茶苦茶である。本人の自白を以て唯一の證據となし、自白があればどんなに有力な物的證據があつても其の自白を眞として處斷したものである。

今この事實を今日の法律思想に對比して見ると、そこには驚くべき進化がある。嘗つて本所にこれと同じ事實があつた。新聞では大正八百屋お七として報道してゐるが、全くお七が踏んだ事實と寸分違ひのない放火であつた。が、裁判官は十七歳の娘として、最も同情ある裁判をなし、何んでも一ヶ年かの刑を言ひ渡したが、但し其の刑は三年間の執行猶豫が附せられてあつたから結局は無罪同様である。

此の判決が今日の法律思想に照し、最もじぎに適したものであることは言ふまでもないが、天



和年間に於ける過酷極まる刑罰制度と對比すると面白いではないか。

次は物的犯罪、即ち性を離れた経済的犯罪であるが、此のことは本書の目的外であり、而かも婦人と言ふ身分によつて、男子のそれと異なる處がないから、こゝではそれを詳説することを見合せらるが、何れ貧困より生ずる婦人犯罪の處で其の大體を述べることにする。

#### 四 婦人の姦通罪

姦通罪が何年頃から認められたものか、不幸にして私は其の起源を知らない。が、兎に角、大古にあつては、本夫が姦婦姦夫の首をはねたことは事實である。豊臣時代に人妻である奥女中と若侍とが戀に落ち奥女中は、我が子を棄て若侍は城を棄て駆け落ちをしたので、其の筋の怒りに觸れあどけない奥女中の子供は親の罪の償ひとして、打首になつた例はあるが、しかし、それは姦通としての罪と言ふよりは寧ろ不義としての制裁である。

處が江戸時代になると、姦通罪が法律の上に現はれ、「姦通者男女共死罪」と言ふことになつて

る。而かも、主人の妻と姦した者は、罪一等を加へ引廻の上獄門に處すべきものとしてゐる。人妻と姦することが、本夫の感情を害し、名譽を傷つけ、一家の取締りを紊亂させることにはなるであらうが、それにしても男女共に死罪を科したことは、罪と制裁の不釣合を感じずにはゐられない。

殊に昔は妻敵と言つて、姦夫が遁走した場合には、その姦夫を斬り棄てることが本夫に許されて居たので、御愁傷にも親叔古舊達と、水盃までして姦夫の跡を追ひよたくと出かけたものである。處が今日では私の仇討が禁止され、私的な犯罪でも一切國家の法律で處罰され、それに對し不服を申立てることの出来るのは、特に法律に定められた場合に限られるようになってゐる。

そこで今日の姦通罪はと言ふのに、これは形式上の要件である婚姻の届出のある人妻と、第三者の男と姦淫することによつて、姦通罪は成立するのであるが、届出の有無を以て犯罪の成立不成立の要件としたことに就ては異論がある。何故なれば、日本古來の風習の跡として、今尙ほ結婚と同時に、届出をなさず新郎新婦の見習ひとでも言はうか、或一定の間、届出を爲さない習慣になつてゐるから、従つて事實上正式な手続きで結婚した者でも法律上では、野合私通となり、



法律の保護を受けることが出来ないことになつてゐる。殊に當事者の一人が、其の届出を欲し他の一人がそれを肯ぜない場合にも尙且つ法律の保護を受けることが出来ないと言ふ不合理が起つて来る。要するに我が法律は、餘りに形式に囚はれ社會の實狀に遠ざかり過ぎてゐる。

犯罪能力を定めるにも矢張り届出主義を採り満十四歳を以て、刑事責任者としてゐるが、そこに大なる間違ひのあることを知らねばならぬ。と言ふのは實社會には、往々にして出生の届出を一年も二年も殊に甚だしいものになると、三年四年の間放任してゐる者がある。現に私が知つてゐる者の子供など、既に四歳になつて居るが、今猶届出を怠つてゐる。最もこれには容易に届出が出来ない事情もあるが、それにしてもかうした違反者は、社會の實狀に徴し決して少なくない。何れにするも形式主義を飽くまで、徹底させることは、實際に於ては不便、不利、不合理なるさまぐな結果が惹き起されるのを先づ知らねばならぬ。少くとも今日の法律は、浮浪者や自由労働者の最下級などん底生活を考へてゐない。結局、不具な法律である。尙これ等のことは、後日項を改めて述べることにし、こゝでは姦通罪の既遂、未遂に就いて一言しよう。

姦通罪の成立要件としての實體方面は、有夫の婦が夫以外の男と姦淫することであるが、どこまでが既遂で、どこまでが未遂かと言ふことに就いて多少異説がある。即ち目的遂行説、全部没入説、一部没入説、接觸説などのさまぐな説があるが、要するに目的遂行説は、姦淫の目的を達したことを以て、既遂となし全部没入説は、陽物が陰物に全部没入した事實を以て、既遂となし一部没入説は一部の没入を以て既遂となし、更らに接觸説は、陽物が陰物に接觸した事實を以て、既に姦通罪は成立するものと解するのであるが、我が刑法の解釋としては、全部没入の事實を以て、姦通罪の既遂としそれ以前の行爲に終る時は、未遂と解するのが、最もおん當な解釋である。しかしながら姦通を以て、家系の紊亂のみを主としてこれを罰するものとすれば、目的遂行の結果を以て、既遂未遂を判断しなければならない。が、我が國の法律は、専ら血統の紊亂のみを以て、姦通を罰するのでなく夫の私的利益の毀損をも併せて處罰するものと言はねばならない。と言ふのは、我が國古來の習慣が、夫の私的利益をも保護する爲めに、姦通罪が認められ、妻敵が夫の利益の爲めに許されてゐたからである。

實際に於て姦通罪は、さまぐな形で、さまぐな結果を惹き起してゐる。殊に世間によくある例であるが、夜更けても夫の歸りがないので、一人淋しく床に入り眠むるともなく。うつら／＼



としてみると、そこへ意外の男が忍び込み、夫らしい態度でいどんで来るので、妻はすつかり夫と信じ男のなすが儘に、身を任せると、それが夫でなく第三者であつたと言ふ例は案外少くない。これが姦通でないことは、當事者の一方に犯意がないことによつて明かであるが、しかし、かうした事から女の心に、變動が生じ遂に合意の姦淫を續ける例は、社會の實際に徴して少くない。姦通の動機として考究すべき事柄は、婦人の魅力である。西洋の裁判官の多くは、婦人の魅力を以て、男子の積極的行爲に對するものと認め、婦人は男子のように、積極的に手を下さないが、その代り婦人は天賦的に與へられた魅力と言ふ大きな力を持つて、男を積極的に手を下さすべく導びくのが常である。従つて女が男に誘惑されたと言ふ場合でも、よく其の内情を調べて見ると矢張り女にも罪があると言ふのである。言ひ換ふれば、男が積極的に手を下さすべく、先づ女が魅力を以て男を誘惑してゐることになるのである。

此の筆法から言ふと、姦通の動機が大部分男の責任のように言はれてゐることが、皮膚の見解であり、大なる誤りであることを信ぜずには居られない。けれども、これは日本の婦人に付いての意見でなく、西洋婦人其のものゝ解釋であるから、これを以て直ちに日本婦人を論ずることは出来ないかも知れない。しかし、婦人てふ共通した性質に於ては、洋の東西によつて異なるべきものでないから、其の大體に於て以上の説を信すべきである。

兎に角、姦通の動機として、識者の多く列擧する處のものは、

- (一) 家庭の不和
- (二) 夫の不在
- (三) 婚姻制度の缺陷
- (四) 夫の放蕩
- (五) 婚姻前の野合私通

等であるが其の中でも最も恐るべきものは機會である。如何に放蕩な女と雖、男と接觸する機會がなかつたならば、決して姦通などは起らないであらう。

嘗つて私の恩師である(今は某控訴院長の職にある)某氏が、「私は貸間札を見ると身慄ひがします」と言はれたことが、今猶ほ私の耳の底に残つて居る。それは言ふまでもなく先生の言葉が、實社會の現状をよく穿ち、而かも、犯罪の遠因である急所を衝いてゐるからである。



これは私の友人Kの話で、嘗つてKが本郷邊りの下宿屋にごろついでる當時の小さな出来事の一つである。何んでも震災の年か、其の前の年かであつたらう。Kの下宿屋に一人の女が、而かも、Kの隣り座敷にやつて来て、そこから毎日病院通ひをするのであつた。女は左程美人と言ふ程ではなかつたが、小柄で女らしく、色が白く、肌ざはりの好きそうな、そして、どこかしら無邪気で處女らしいあどけなさが残つてゐた。だのに女は時々艶かしい丸髷などに結つて居ることがあつた。

「一體何物だらう」Kは隣り座敷で氣をもみ出した。そして、あれかこれかと想像して見たがどうにも判断がつかなかつた。

しかし、その中に東北の女であり、Nと言ふ名前であり、更らに人妻であることが解つた。がとても隙だらけの女で、あれが人妻かと誰れにも疑はれる程、開けつ放しの女であつた。だから男許りの世界では、二階でも階下でも今業平を極め込む連中が出来、小さな騒動がほつ發した。しかし、女には目ざす男があつた。彼女の欲してゐる男は、隣室のKであつた。

Kは決して好い男ではない。頬骨が高く、眼が鋭く、お負けにぶく／＼と見苦しく太つてゐるので、誰れが見ても彼を好男子とは見ないであらう。しかし、事實Kに白羽の矢が立つたのだから意外ではないか。最も彼はどう／＼たる態度で、如何にも男らしく見えるが、其の實女性的で猫のような従順さである。殊に女にかけると、意氣地のないこと恰も、蛇に見込まれた蛙のような惨めさである。

先づ前提はこれ位にして、此度は女がKを掌中に丸め込む手段であるが、昔から「女が仕懸ける戀に無駄がない」と言はれてゐるから、其の成立の可能なことは言ふまでもない、しかし何に分にも蛙と蛇の共鳴であるから、少し位ひなモーションでは到底きゝめがない。

日に幾度か顔を見合ふことがあつても、Kの方から口を利いたことがなかつた。殊に女がニツと笑つて横眼で物を言つても彼には、それさへも答へられなかつた。しかし、女の室へ同宿の男が入り込んで、何かひそ／＼話をしてゐると、彼は堪らなく口惜しかつた。だが彼には自分に關係のない女に言ひ寄るなど、とても出来ないことであつた。

處が或日のこと洗面場で行き合つたので、時の撻揆をした跡で、「どうぞお話しに来て下さいまし、淋しくてしょうがないんですから」と言ひ／＼妙な嬌態をしてKの心を惹いた。そして、其



の後二三度同じことを繰り返へし、彼を促したので、とう／＼彼女の部屋に出張することとなり而かも、其の翌日は手を携へ浅草行きと言ふ、全く急速度な変化を見せるに至つたのである。

夫婦氣どりで浅草へ舞ひ込んだのと、そして、薄暗い活動館の特等席に納つたことまでは、上出来であつたが、女の激しい誘惑の爲めに、すっかり昂奮したKは、先づ女の手を握つて見た。女がそれを拒むかと思へは、却つて彼よりもきつく握り返へした。其の事實を確めたKは愈々宇頂天になつた。そして、又ひどく大膽にもなつた。

全く此の邊で切りあけて置けば、何事も圓滿に納りがつく譯けだが、人間と言ふ奴は、一つの慾望を満たすと、又新たな慾望が頭を擡げどうにも納りがつかなくなる。彼も亦淺ましい人間の一人であつた。手を握つて確心を得たので、此度は新たな慾望の爲めに、女の腋下へ奥深く手をさし入れ丸々と、ふくよかに膨れて居る乳房を心持ち押へたが、女はそれでもされる儘にちつと身を任して居た。だからKの常識は、益々麻痺し群集の視線など顧る力なくびつたりと女に寄り添ひ今にもキッスをやり兼ねない醜態だつた。

そうした醜態の勃發することを期待して居る看守の眸は、面白さに輝いた。聽て係官の鋭い眼

も光つた。彼等二人は檢束されたのである。

かうした例は實際に少なくない。殊に童貞として友人仲間から手巖しくひやかされて居る私でさへこれに類似した體驗話がある。それは嘗つて文藝市場で梅原君によつて、すつば抜かれてゐる白足袋の一件である。が、これはKの話と殆ど同一であるし、又自分の秘密をこゝにさらけ出す必要もないが、兎に角、薄闇い公園の一個で、男と女が軽く抱ようしてゐる處を「こらッ」とやられ散々油を絞られた揚句、女が丸髻に結つてゐる急所を押へられ「ぎゆう／＼」と攻められたことであるが、丁度其の時女の足袋をインパネスのポケットへねぢ込んで置いたのが、後日發見され遂に文藝市場の紙面を汚すことになつたのである。

女が男に言ひ寄り、それが動機で、とてつもない大きな問題を惹き起した例は、歴史にも随分澤山現はれてゐる。近い例としては、主人殺しの罪科で、斷頭臺に上された時、

夜嵐の覺めて跡無し花の夢

と言ふ辭世を詠みニツコリ微笑み、それを最後に消えて行つた原田きぬ事夜嵐おきぬなどは、徹底した男思ひの女である。



おきぬは決して世人の言ふような妖婦ではなかつた。純日本式な氣の小さな、今の言葉で言へば、多血性の美人であつた。それなれば何故、恩人の旦那を殺したか、どうして又姦通する氣になつたかと言ふに、それは彼女の運命が、そうさせたのであつた。彼女自身の個性が、そうしたのではなかつた。と言ふのは、今日彼女の事跡を読んでも解ることだ、が全くおきぬは奇しき運命の持主であつた。物質の満足は十二分に得られたが、老い先き短かい小林某の圍ひ女としては餘りに年が若過ぎた。性慾の衝動が、戀愛の流れが、二十七八の女の體内に溺れてゐたことを知らねばならない。

それだのに森田座の役者の送迎ひをする伊之助と言ふ男が、旦那に金を借ることから、先づおきぬをとり入れおきぬの觀心を買ふ爲めに、大阪下りの役者である嵐璃鶴(後の市川權十郎)との仲をとり持つたので、性と愛に喝えてゐたおきぬの血汐は、璃鶴を知ると急速度な勢ひで醒めて行つた。身も心も璃鶴の爲めに溶け入つた。

これもおきぬのような情熱的な女としては、寧しろ當然なことであつた。しかし、世ち辛い浮世は、彼女のかうした戯らな戀の玩具化を許しては置かなかつた。旦那にはかん附かれる。嫉妬

は益々猛烈になる。世間は五月蠅くなつて行く。

だがおきぬの心は、それとは反對である。妬嫉が強烈になり、小語が五月蠅なればなる程、おきぬの心は、いやが上にも小林某から離れ、女のように當りのよい「さよでまつか」と言ふ璃鶴が、堪らなく戀しくなり、世が世でなければ彼と二人、そう思ふと、世の中が呪はしく、恩人の小林某が憎らしくなつた。折も折小林某は、病ひの床につき而かも、病的に嫉妬がましいことを連發する。

おきぬが決意したのは、丁度此の時であつた。(何れそれ等の詳細は「續淺草裏譚」に書くことにする)

要するに姦通の動機は、總ての場合に於て機會である。夜嵐おきぬにしても伊之助と言ふ者の橋渡しがなかつたならば、決してかうした問題を起さなかつたであらう。

嘗つて世間を騒がした鎌田某女の如き有島某と秋子夫人の如き近くは、知友小池夢坊と八百子の如き、總て適當なる機會が與へられてゐる。

姦通に於いて、婦人は姦夫の身分の低いものを好むと言ふことを立證する爲め、關天頼氏が「醫



學及び醫政」と言ふ雑誌に、殊に念の入つた統計を發表されてゐる。即ち男子は上淫を好むが、婦人はこれに反し下淫を好むと言ふことの證明である。

此の説に對する賛否は、因より容易に出来ることではないが、少くとも婦人は自分よりも年下の男を選ぶことは、或程度まで眞理を穿つてゐる。殊に物質に苦勞のない婦人で、相當年をとつた者の出來心の姦通は、自分よりも眼下であり、年下の男を選ぶことは事實である。が、これ等は多く女から言ひ寄つたもので、女が性慾的満足を得んが爲めに求むる姦通であるから、當然な結果である。

### 五 自殺と心中

法律上自殺を處罰すべきものか否かに付ては、古來から識者間に異論されて來たのであるが、今日の法政では、自己の利益を自己が毀損することは、自由であり、而かも、これを處罰するとしても、其の主體が現に消滅してゐる以上、完全に處罰することが出來ないので、今日では何れ

の法律でも自殺を不問に附してゐるのである。

しかしながらこれを國家と言ふ團體的立場から見ると、自殺そのものは、明かに團體員一部の毀損であるから、反社會的行爲である。だから或國では、自殺を犯罪と認め、これを遂げたる者は、國家の法律を以て、其の葬式を禁止し遺族の宗教的自由を抑制した國があつた。が、今日そうした所があるか否かを知らない。が、兎に角、自殺を罰することは不可能なことである。

そこで婦人と自殺のことであるが、全く婦人には自殺と言ふ大きな障害が付き纏つてゐる。二言目には「あたし死んで了ふわ」と口走る程、婦人にとつて自殺は鬼門である。

殊に今日では自殺病が流行し僅かなことに、あつたら生命を犠牲にする狼狽人足が、ひどく増へたことを先づがい歎せずには居られない。主人から叱られたから、養姉と言ひ争つたから、母親が男のつまみ食ひをするから、父親が大酒飲みであるからなどと言つてゐたら、とても最限がない。

最も其の中には、如何にもと首肯される自殺者もある。何時だつたか、もう十年も昔のことであらう。寒空に向つて、浴衣一枚の三十格好の女が、前と後ろに二人の子供を負ひ、而かも、其



の子供が二人とも病氣持ちで、ねんがら年中泣き通しである。最もそれ以外に泣く理由があつたと言ふのは、母親が三日も四日も食はず飲まずであるから、肝心のお乳が出ない。子供は正直だ。腹が空けば泣く。病ひで苦しければ泣く。しかし、其の泣き聲は普通の泣き聲ではなかつた。

二人の子供に泣き叫ばれても女は別に苦にもせず悄然と上野の山へあがつて行つた。しかし、其の足どりが慄えてゐた。時々よろめきもした。眸が飢の爲めに物凄く血走り、唇が衰れに戦いてゐた。

女は小暗い處のベンチに倒れるように身を寄せ、ぢつと考へ込んだ。何を考へたか、その邊の處は不明だが、大低世のあぢけなさを恨んだのであらう。無情な人の社會を。

それから間もなく女は、轉けるようにして、奥へくとは入つて行つた。死に場所を捜して居たのである。

處が幸にして警官に捕はれ、早速警察へ引渡されたので、一命は助かつたが、女の申立によると、夫は土工であり、而かも今は獄屋につながれて居るので、頼る處もなく彷徨歩いて居たと言ふのであるが、全くこれなどは同情すべきものがある。働きたくとも病ひに泣く二人の子供に泣

きつかれては、働きも出來ず、生きるに活き延びられないハメになつては、どうにも仕様がな  
ではないか。

處が同じ自殺者にしても自らまねいた者に對しては、同情すべき何ものもない。殊に此の種  
ものには、喜劇的な滑稽を演ずることがある。

これは何時か何かに書いたような氣がするが、兎に角、私の知人で宮澤と言ふ男がある。此の  
男が柳島の酪酒屋女里子と言ふものと、千葉縣下の稻毛へ心中をしに出かけたのであつた。そし  
て、二人が氣を合せて飛び込んだのはよいが、淺くてとても死に切れず「ビチャク」とかけあ  
がつたなどは悲劇中の喜劇である。

處で此度は「心中」のことであるが、此の心中と言ふ言葉は、其の始め情死のことを言ひ現は  
したものでなく、特に公娼私娼の間にのみ用ひられたものである。即ち二心なきことを言ひ現は  
す爲めに、心中立と言ふ言葉が生れ、而かも、それがだんくくと轉嫁して、情死の意味に用ひら  
れるようになったのである。

では何年頃から情死が始つたかと言ふに、それは遠く南北時代の里見主税の若者と内侍の女と



が、不義に落ち入り抜きさしならぬハメになり、遂に山中に入り情死を遂げた事實が、「吉野拾遺」の中に現はれてゐる。が、本當に情死として、多く現はれ出したのは、何んと言つても徳川時代で、而かも、心中物を巧みにとり入れた近松ものゝ流行後である。

近松の手に成つた心中物だけでも、彼の有名な「天の綱島」「生玉心中」「曾根崎心中」、「心中重井筒」「今宮心中」「心中宵庚申」「心中二枚繪草紙」「心中萬年草」それに心中に准するものとして、「お夏清十郎」がある。此の外にもまだ心中物を取扱つた作品があるかも知れない。が、兎に角、近松ものゝ影響を受けた結果が、他にも心中物を取り入れる作者が出来、而かも、實際に情死の體驗を爲す者さへひどく増へたのであつた。だから幕府は此の流行を防壓する爲めに、情死をとり入れた脚本を禁じ、而かも、其の上演をも嚴禁したと言ふことである。

江戸に於て實際に情死した者で有名なのは、三輪心中に白井權八小紫であるが、しかし、小紫は男の處刑後間もなく殉死したのであるから、嚴格に言ふと心中ではない。

兎に角情死がひどく流行した享保年間には、これを防ぐ爲めに、死を果さず生き残つた者に對し嚴刑を加へたものである。が、今日では無論さうした制裁はない。しかし、情死を教へると自

殺教唆になり、現に情死を決意してゐる者を殺すと自殺幫助になり、更らに情死を強ひると殺人罪になる。

そこで此度は何故に、我が國は情死者が多いかと言ふことであるが、これに付いては無論、さまざまの理由があるであらう。第一國情、風俗、氣候等の外界の事情も大いに預つて力あることであらう。が、しかし、其の重なるものは、矢張り個人的な事情である。今其の原因の二三を舉ると、

- (一) 性に對する無理解
- (二) 結婚制度の不備
- (三) 經濟的迫害
- (四) 家庭の不和
- (五) 厭世によるもの
- (六) 階級制度によるもの
- (七) 同性戀愛



(八) 病的によるもの

(九) 失戀によるもの

等であるが一般に通ずる原因は、感傷的な國民性によるものである。殊に日本婦人は、一般に感情的で、物事に熱し易く、一つの物を一圖に考へ、概括的な判断力に缺けてゐることが、何よりも大きな原因である。最も性に對する無理解や、結婚制度の不備も大きな打撃には違ひがないが、煎じつめると矢張り、國民性の欠陥となるのである。

殊にこゝで力説を要するのは、結婚制度の不備である。最もこれに付いては私が口を耐つばくするまでもなく、何人もよく其の不備なることは理解されてゐるであらう。そして又結婚制度の不備が、情死に對する大きな原因であり、而かも、原因結果の關係になることもよく知らるゝことであらう。

それは毎日報導されてゐる新聞の三面記事を見ても解ることであるが、親が定めた男と結婚することが、どうにも忍び得られず家出をする。自殺をする。好いた男と心中する。かうした例が世間に幾らあるか。心ある人は先づ統計でもとつて見るがよい。



木妻が妾  
の咽喉を  
食ひつゝ  
た圖

罪 犯 の 婚 婦



處が驚いたことには、近く改正になるべき民法親族編の草案には、親の判がなければ何時になつても結婚が出来ないことになつてゐるそうだが、若しそれが事實だつたら、益々自殺の原因を與へることになりはしないかと、出ない前から心痛してゐる向きもある。

それから近頃めつきり増へたのは、同性愛より生ずる情死である。本年に這入つてから既に十件も見出された位ひだから、年年此の種の自殺が惹き起されることは言ふまでもない。しかし、同性愛に起因する情死は、今日に始まつた譯けではない。が、これが裁判沙汰になつたのは、明治二十年頃前野某と言ふ女が、同性愛による嫉妬とから嘗つて奉公してゐた主人の娘を殺さんとして果さず捕縛された事件のあることを變態性慾と言ふ雜誌に發表してゐる。最もそれ以前にも情死をした例は少なくない。殊に同情の結果殉死的な抱合心中は、其の中でも最も多數を占めてゐる。

これは極く最近の例であるが、報知新聞の社會欄に『若い女二人が省線で抱合心中』と言ふ見出しで掲載されてあつた。其の内容は次の如くである。

四日夜十一時十分頃上澁谷七五番地下り省線路上に十七八歳の女と二十一二歳の女とが足や首を轢断さ



れてゐた。澁谷署で検視したところ、若い女の懐中には下澁谷六九一井上泰之介(假名)様、まさ子よりと記した遺書があり。其の文句には「私はワキガが激しくとても全治の見込みもないから死にます。お父さんは御酒を澤山のむが、ごうかやめて下さい。御両親様」とあつた。一人の女は同町七七九平川正耶娘みどり(假名)で政子に同情したものであると。

此の記事によると、別に二人が同性愛者であつたとも思はれないが、しかし、其の内面を立ち入つて、よく考へて見ると、單にワキガが全治しないから、自殺を圖り、而かも、それに同情して情死したものと、あつさり片附けて了ふことも出来ないであらう。最も血の頃の處女にとつてワキガの全治しないことは、惱ましい、そして、悲しいことには違ひがない。が、單にそれだけのことが、死の原因であり、情死の動機であると判断するのは、餘りに皮層な見解ではあるまいか。最も處女時代の氣持ちは、處女でなければ解らぬことではあるが、それにしても人が生の執着から離れて行くには、其の結果に對する原因が、餘程重大なものであらねばならぬ。

かう考へて來ると、此の記事の半面には、今少し深い意味が含まれて居るように思はれる。例へば同性愛とか、三角戀愛とか乃至は、二人に共通する精神若くは、物質上の迫害かの何れかの

一つが秘められてゐるのではあるまいか。

何れにするも情死の原因を與へる者は、多くの場合女であり、而かも、女は男よりも死の刹那に對する思ひ切りがよく、あつさりと死んで行くことは、多くの事實に徴して明である。が、これに就いては、他の方面から論すべき機會があるので、本項はこれで終りを告げて置く。

## 六 貧困と婦人犯罪

貧困が犯罪の原因であることは言ふまでもないが、貧困其のものにも階級があり、而かも、どこまでが貧困で、どこまでが貧困でないかと言ふことは、無論、事實問題で社會の通念により判断すべきものである。

殊に私は最下級などん底生活にある貧困者の多くを見てゐる。それは全く活きながらのミイラで、人間と名がつくのが不思議な位ひな人間である。家もなく衣もなく食もない全くあるものは恐るべき微毒と、其の他の病毒である。少くとも彼等の體は、蜂の巣をついたように、どこ



もかも穴だらけで、完全な部分の持ち合せがない。それ程彼等の體は、いたみ切つて居るのである。殊に淺草公園に巢食ふ乞食淫賣などは、其の最も甚だしいもので、梅毒、淋病、其の他あらゆる花柳病と言ふ花柳病の持主で、ベンチに腰を下ろしてゐても、手が怪しく慄え體がビクビクと動いて居る。恐ろしい中毒である。

乞食生活のことは、「淺草裏譚」に其の詳細を書いたから、こゝでは東京の最も貧民窟と言はれてゐる本所の富川町と、日暮里の貧民窟に就いて少しく書いて見よう。

去る八月十六日の報知新聞に、本所富川町の無料宿泊所に集まる失業者の生活状態の一部が書かれてあつたが、多少とも彼等の生活を知る私には、此の記事が如何に貴いものであるかを感じずには居られなかつた。と言ふのは、假令一部にしろ彼等の惨たる生活状態が、社會の無智な人達に知られることは、聽て彼等が恵まれることになるからである。

参考の爲めに記事の一部を轉載しよう。

富川町の無料宿泊所に集まる自由労働者二百四十一人に對しチアスの豫防注射を試みようとした處、三分の一の八十一人は人間の廢物で仕事が出来ないだけでなく第一番が結かく次が心臟、腎臓、動脈硬化

症と言ふ有様で注射をすれば立ち處に死ぬと言ふので注射の出来なかつたと言ふ例もある。

御厨社會局長は語る。「六疊の部屋に二十五六人のこゝもあつたと言ふから、どうして寝るのかと言ふと始めは皆アグラを掻いてゐるが、何時かはなしにお互ひ同士が尻や、足、手を枕にして寝る事になると訊いて、實際人道問題だと思つた。それに家はバラツクだし、トタン屋根で焼けつく様な暑熱に病人の續出、病院は滿員往診は出来ずこれは實に制度の缺陷であるから、是非とも往診制度をせりたいた折角研究中であると。

しかし、これなどはまだ無料宿泊所にゐるのだが、どうにか生きて居られるが、何もかも自費でやつて居る連中の中には、これ以上悲惨なものがある。亭主が病氣になる。子供が飢に泣く妻がお産をする。金はない。毎日常賃は請求される。それが永く續くと遂には立退きを命ぜられると言ふ全く何んと表示して好いか解らない程惨たる者も案外少くないことだ。最も社會局では、かうした惨めなものゝ爲めに、無料診療券を出しては居るが、それにしても往診制度がない以上、重病人などは野垂れ死にするより他に道がないではないか。

殊にかうした急迫な場合に、子供の飢をいやす道が充分に講じられてゐないのは、誠に遺憾な



ことである。それも後天的に自ら勝手にまねいて、かうした社會になりさがつた者は、自業自得と言ふこともあるが、生れながらにして、ミイラ同様の取扱ひを受けなければならぬことの悲惨を考へると、全く人ごとではない。

本所の富川町に對抗する貧民窟は、日暮里から三河島にかけて一廓であらう。即ち日暮里には大部屋と稱する大きな部屋のあるガランとした頗る殺風景な建物が所々にあつて、而かも、そこへ徹底した貧民達が集り、一棟の中に何十世帯かを構へてゐるのである。

が、しかし、一棟の中には芝居の樂屋のように、大部屋と合部屋との區別がある。最も合部屋とは言つてないが、兎に角、芝居で言へば合部屋に相當するものである。と言ふのは、疊にして一疊若くは二疊と、小刻みに幾つかに仕切つた處と、二十疊乃至四十疊の大廣間との二種があるからである。

大部屋は言ふまでもなく貧民達が、幾十人と雜居し寢食を共にする處で、蒲團付き疊一疊一人が、日に三錢乃至五錢の木賃料で宿泊することが出来る處である。が、所謂合部屋に相當する仕切りのある部屋には、上下の區別があり、上の方は二疊半乃至三疊に仕切られた部屋で、多く夫

婦者とか子供のある者が住ひ、一日二十錢内外の家賃を支拂つてゐるので、こゝでは大盡格である。下の方は一疊乃至一疊半づゝの疊を占領し隣家との境界が屏風で仕切られてゐる。此の種の家賃は、大抵十五六錢内外である。

以上の大部屋合部屋を通じ、家賃の支拂は毎日拂ひであるが、それでも時々滞納する者がある殊に一家の大黒柱である働き手が、病氣其の他の事故で、失業して居る時などは、十日近くも滞ることがあるが、案外正直な者が多く大抵は、遲滞の分をなし崩しにして了ふと言ふことであるかうして一棟の中に、何十世帯ともなく雜居してゐると、随分變つた出來事がほつ發したり、喃々喋々たる戀物語りが洩れたり、痴情喧嘩が天降りしたり、更らに又姦通のビク／＼ものが現はれたり、乃至は又、物質を絡らんだ口論が始つたり、それは／＼全く別世界の感がある。殊に世間でよく問題にされてゐる女房の貸借關係など、時折り締結されることだが、これは人の話であるから、保證の限りでない。しかし、彼等の生活を見てゐると、そう言ふことも決してなすとは言はれない。

それから又朝炊いた御飯をおはちごみ質入れすることもないとは限らないが、それも人の話で



實はそうした物は、質屋の方で眞つ平ら御免と来るそうだ。けれども、あの邊の質屋は一般に親切で、よく面倒を見てゐる。親切は又大家にも通用する。

要するに彼等細民には、一見何んの情も親切もないかのように見えるが、其の實一般社會よりも遙かに温か味があり、人情味がある。只だ彼等は言ふことが露骨であり、亂暴であり、そしてない手は振れないからである。

或る小部分の前科者を除けば、比較的善良な人間が多いのは意外である。殊に其の中でも女は、一般にあつざりと、氣前がよい。言ひ換ふれば、どこかしら江戸ッ兒らしい淡泊さがある。

兎に角、彼女等の犯罪は、一般婦人と異なり其の多くが、急迫な自家保存の爲めであるから十分同情すべきものがある。

特に其の中でも食ふ爲めの手段であり、生きる爲めの方法としての密淫賣などは、確かに同情すべきものがある。

貧困の爲めの墮胎にしても、戯らの爲めの墮胎と、同一に取り扱ふべきものでなく、そこには明かに區別すべき何物かがある。

嘗つて某會社の女工でSと言ふ女が、Nと言ふ同社の男に言ひ寄られ情を通じた處、それがどうしたものか、mと言ふ矢つ張り同社の職工に知れ、mからも亦言ひ寄られ、脅迫されたので、mとも又通じたのであつた。處がSはNの種か、又はmの種か何れかは知らぬが、懐妊した事だけは確かだつた。

そこでSは先づNに子供の出来た場合の處置を頼んで見たが、一言の下に斷はれたので、此度はmに相談すると、これ又あつけなく謝絶された。しかし、胎兒の成長はそうした經緯いきさつのあるにも拘らず益々健全に發育して行つた。

そうした男の知れぬ子供を宿したSは、とても耻しく極りが悪く七月近くになると、會社へ通ふことを思ひ切つたが、Sには病の床にある母親があつた。彼女が會社を止めれば、其の日から母に與ふべき薬は勿論、自分が食べるものさへも不自由しなければならなかつた。

更らにSは子供が生れた場合の光景を考へて見た。乳飲み兒を抱えて、どんな仕事が出来るか、子供がなくとも碌に薬さへも買へない現在を見出すと、一層のこと死んで行かうとも思つた。しかし、自分が死んだ跡の母親を考へると、それも出来ないことであつた。



彼女は先づ二人の男を恨んだ。そして、無情な世の中を呪つても見たが、歸する處は矢つ張り胎兒の處置だつた。

彼女はとう／＼一袋の藥品を手にした。そして、それでもまだ不安だつたので、危険を冒し高い處から飛び降りたりした。

そうしたことで彼女の目的は果されたが、此度は辛辣な國家の法律が、彼女の上へのしかゝつて行つたのである。

確かにこれなどは、衆人の同情を惹くに充分な犯罪である。少くともモダン、ガールや上流の家庭の未亡人などの氣紛れから起る墮胎などと、同一視すべき性質のものではない。

## 七 殺人罪と墮胎罪

人の生命を斷つことが、法の毀損の大なることは言ふまでもないが、我が刑法によると、死刑又は無期若くば三年以上の有期懲役と言ふと、つもない廣汎な範圍の刑罰を定めて居る。

處が最近になつて、死刑の廢止を唱へる學者が可なり多くなつて來た。即ち人道主義の立場から若くば、刑罰の目的からして、人の生命を斷つことは、決して當を得たるものでない。刑罰の目的は即ち制裁を意味し、善良なる社會の秩序を保つことにあるから、結果に對する責任を「人に負はせ、而かも、それによつて結果以上の苦痛を科せば、刑罰の目的は達しられる譯けである。そして、其の苦痛の最も大なるものは、死刑よりも却つて終身監獄に投じられることであるかも知れないから、死刑廢止論もあながち空論でもあるまい。

死刑の話の序に、其の執行のことを二三書いて置く。このことは私がまだ學生時代に或檢事の方から訊かされた話であるが、何んでも死刑執行に處し、男が息を引きとるのは、極く短くて五六分、長くて七八分から十分位ひで完全に絶命するそうだが、女になると短かくて七八分、極く長い時は十五分もピク／＼してゐることを話して呉れた。

何故に女が執念深く息を引きとらないかと言ふことの理由は、不幸にして私には解らないが、それは無論生理的理由と物理的理由によるものであらう。けれども、その説明が私には出來兼ねるのである。



要するに古來から女が蛇のように執念深いものとされてゐるのは、かうした處から割り出した言葉ではあるまいか。しかし、其の癖、死の刹那の度胸のすわつたことは、とても男など足元へも寄りつかれない、それは今日までの女囚人に付いて見るも明かに立證することが出来る。彼の夜嵐おきぬの如きいざ斷頭臺に向ふと言ふに平然として少しも平素と變ることなく、夜嵐の俳句を詠んで、斷頭臺の露と消えたことは、前にも言つた通りである。

高橋お傳にしても死の刹那は、實に立派であつたと言ふ話である。ニツタリ微笑んで消えて行くなどは、男の眞似の出来ない藝當である。

此の外にも毎年一人位ひは、死刑になる女があるそうだが、それ等の總てが、男のように女々しくないと言ふ話である。現に情死の場合でも男は、心中の片割れとして、世間に活き恥ぢを晒す者が少くない。が、女であつて活き残る者は殆ど稀れである。此の事實から押しても死に直面すると、女は男よりも度胸があることが解る。

そして又、此のことは急迫な、全く緊急な危険の到来した場合でも、女は男よりも膽玉が大きくなり、死を睹して危険を冒すものである。例へば火災の場合に、母は死を睹し猛火の中へ飛び

込むが、男にはそれが出来ないことがある。

兎に角、氣の小さな女が、一旦事あり死に直面すると男に優る度胸が出るものである。其の理由は何れ「心理扁」で詳説する。

餘談は兎に角として、法律上人が人たる資格を得る時期は、何時であるか、言ひ換ふれば、人は何時生れたものと見るか、此のことに就いては、二三異説がある。

其の一は陳痛説で、母體が陳痛を催した時、人が生れたものと見る説である。

其の二は一部露出説である。即ち胎兒が一部母體から現れた時に、人が生れたものと見る説である。

其の三は獨立呼吸説である。即ち胎兒が一部露出すると、全部露出するとを問はず獨立的に呼吸を始めた時に、胎兒が人となると言ふ説である。

其の四は全部露出説である。即ち獨立な呼吸をするか否かを問はず全部母體から離れなければ、人でないと言ふのである。が、我が刑法の解釋としては、獨立呼吸説を以て正當なる解釋とされてゐるのである。何故なれば人と言ふ獨立な存在を保護する以上、其の身體が母體から離



れると否とは、問題でないのである。即ち獨立的に呼吸したか否か、問題なのである。従つて母體から一部露出したゞけでも獨立的な呼吸をしておれば、それは人間であるから、それを殺害すれば殺人罪となる。所が獨立呼吸をしてゐないとするとそれは殺人罪でなく墮胎罪と言ふことになるのである。全くほんの些つとした異ひで、一は殺人罪となり、他は墮胎罪となるのである。

同じ殺人罪でも其の輕重の著しく異なるものがある。

これは數年前東京府下の某村にあつた十六娘の殺人罪であるが、これなどは確かに、同情すべき何ものかである。

事件を起すに至つた動機は、矢張り世間にありふれた性の亂用ではあるが、犯人が十六の小娘であり、無智な女であつたことが、先づ第二に同情に價ひする。更らに其の経緯が、小娘としては残酷であつた。と言ふのは、彼女が丁度十五の春、ちよつとした機會で、村の若者Aと通じたのが、そも／＼事の起りの始めであつた。Aは惚氣の積りで、彼の友人Bに其の話をしたのであつた。

Bは其の後間もなく彼女に言ひ寄つたのであつた。しかし、幾ら無智な女でもAと關係があ



婦人の殺人



る以上、Bの意に従ふことは無論出来ないことであつたので、一言の下に断つたのである。けれども彼女の急所を掴んで居るBは、そうした拒絶に遭つて、其の儘引き下がらなかつた。

「それぢや、Aと関係のあることを皆んなに言ふぞ、お前の親達にも」

と言つたように脅迫したのである。そう言はれて見ると、十五の小娘の心は亂れ始めた。Aとの関係が世間に知れ渡ることを思ふと、子供らしい彼女は、堪らなく恐ろしかつた。殊に両親の憤りを恐れた。世間の噂も怖かつた。

遂に彼女は決意した。淡雪のような操が、むざ／＼と蹂み躪られて行つたのである。

それから無智な彼女は、二人の男の玩弄物になつてゐたのであつたが、何時の間にか、誰れの子かいたいな彼女の体内に更らにいたいな胎兒が宿されて居たのであつた。最も性に無理解な彼女は、殆ど七ヶ月近くまで、それが懐妊であることを知らなかつた。何かの病氣にでもとりつかれたものゝように考へ、而かも、割合健全でまめやかに立ち働いて居たのであつたが、隠し切れないのは七月八月で、遂にそれが母によつて感づかれ手厳しく責められた結果、男はと訊かれたが、それは前にも言つたように、何れの種であるか、神ならぬ身の彼女には解らう筈がな



い。兩親の憤りは絶頂に達した。そして、遂に「男の解らぬ子は出産させることが出来ない」と宣告されたのであつた。しかし、自然の勢ひは、彼女によつてどうすることも出来なかつた。

纏て臨月が来た。醫師も産婆もなく夜中人知れずひどい苦しみと俱に、安らかに分娩したのであつた。その分娩の様子は、詳細に知ることが出来なかつたが、彼女の申立によると、何んでも深夜急に陳痛を感じひどく苦しんだことは、明瞭りと覺てゐるが、どうして分娩したか、其の點ははつきり覺えないと言ふのであつた。しかし、氣がついて見ると、子供の泣き聲がするので始めてそれと知り夢中で、ちつ息させ其の死體を腰巻にくるめ忍びやかに家を抜け出し附近の溝へほり込んだのであつた。

それから大阪に、こんな例があつた。何んでも十二三の女の子が、盗みをしてどうにも始末が悪いので、母親が折檻の意味で、手足を縛り押入の中へほり込み其の上へ幾枚かの蒲團を着せ、其の儘店で仕事を居たのであつた。そして幾時間かを経過してから、子供を出して見ると、何時の間にか息が吐絶え既に固くなつて居たのであつた。

最もこれは故意犯でなく過失致死であるが、それにしても母親の身としては、悲しいことであ

り、同情すべきものがある。

次に又かう言ふ例がある。此の出来事は、今から十四五年も昔のことで、何んでも二歳位の子供を負つた三十過ぎの女が、上野公園で負つて居た我が子を殺した事件である。が、しかし、我子を殺すまでの経緯は、とても涙なくては、訊かれない残酷さがある。と言ふのは、女が夫に見棄られ、而かも働きたくとも職はなし、若し職があつたとしても、身體中無惨な程に、たい毒が出来て居る子供を抱えては、働きも出来ず、それかと言つて頼る處も寄るべき家もなく、食ふや食はずで、轉々して居る中に、もうどうにも身動きが出来ないまでに、さし迫つて来たのであつた。それなのに罪の子は、たい毒の苦しさに、絶えず泣き叫んで居る。全く泣き叫ぶ苦し氣な、惱ましい聲を聞く母親は、とても堪らない苦痛であつたに違いない。

殊に長い間食つたり食はなかつたりの苦しい生活に、すっかり衰弱し今ではもう乳さへも出なかつた。それやこれやで彼女は逆上したのである。そして其の逆上の結果が、いたいけなと言ひたいが、烈しい毒素の爲めに、長い間、ミイラのような生活の爲めに、すっかり瘦せ衰へ見るさへいぢらしい、赤ん坊を無惨にも締め殺したのであつた。



兎に角、かうした殺人が、戯らな痴情關係や、物質的慾望の結界、人を殺した罪と同一視することの出来ないのは、言ふまでもないことである。否、私はかうした者に對し殺人罪として、最も軽い三年の刑を以て處斷することも尙且つ酷に失し公平を失するものであると言ひたいのである。少くとも前記の犯人に、惡意のないことは明かである。

最も殺人といふ結果から判斷する時は其の結果に對し責任を負ふべきは、無論のことである。けれども一步退いて結果を起す原因を與へた事情を考察する時は、彼女の意思のどこが反社會性を帯びて居るのだ。世の中に人間と生れ、子孫を愛しないものがあるであらうか。子供の堪えがたい苦痛を見て、超然として居られる者があるであらうか。彼女は子供の愛に引きづられて、恐ろしい罪を犯したのである。

墮胎罪にしても女の犯す處の罪には、誠に同情すべきものがある。

嘗てかう言ふ事件があつた。女は看護婦であつたが、何時しか某大學の學生且なる者と、戀に落ち一年近くも同棲して居たので、女は遂に懷妊したのである。

處が臨月近くになると、且は女にあいそをつかしたのか、又は最初から弄ぶ積りで居たもの

か、乃至は將來のことを考へたものが、其の邊の處は解らないが、兎に角、雲を霞と迷け出したのであつた。

そこで女は途方に暮れた結果、當てもなく東京市中を捜し廻つたが、どうしても解らないので、此度は自力で胎兒の始末をつけることを考へ出したのであつた。そして、その結果がとう／＼墮胎罪を構成することとなつたのであつた。

それからかう言ふ例もあつた。場所は淺草区内で、隅田川よりのと或る場所に、さゝやかな商賣を營んで居た獨身者があつた。其の家に雇はれて居たのが、およし(假名)と言ふ十九の女であつた。處が何時の間にか、二人の間には怪しげな關係が結ばれ遂におよしは、妊娠何ヶ月と言ふ身重になつたのであつた。

それだのにどうであらう。獨身者の主人は、およしに何んの挨拶もなく他の女と結婚すると言ふではないか。彼女がそれを聞いた時の苦しみは、とても問題ではなかつた。活きながら地獄の底へ突き落されたような、名狀しがたい苦惱と、悲哀とが全身の血潮を逆立たせたのであつた。そこでおよしは男に對する面當ての意味で、墮胎をする代りに、カツバのように水の底にむぐり



込んだのであつた。

これは墮胎罪の例ではないが、かうした順序で墮胎を爲すと言ふ経路を示すには適當な實例である。

五六

單に以上の例によつても解ることであるが、女の犯す墮胎罪は、總て男が重大なる原因を與へてゐる。即ち男が偽も、うせざれば、墮胎といふ結果が生じないと言ふ關係を有して居る。少くとも最初の契約を守らないことが、墮胎に對する重大なる原因と見ることが出来る。最もこれは法律上の原因結果の關係ではないが、それにしても男が此の場合何等の責任がないと言ふことは、不公平の甚だしいものである。

だから私は此のことに就いて、何時も疑問を抱いてゐる。と言ふのは、人を欺罔して財物を騙取すると、詐欺と言ふ罪名に觸れるが、人を欺罔して生命から二番目の節操を蹂躪つても尙且つ何んの犯名にも觸れず、而かも、其の欺罔されたことが、重大なる原因となつて、墮胎と言ふ結果が発生しても、男は超然と高見の見物をして居ると言ふことが、どうして不公平でないのか、とんちんかん譯けが解らない。

女を欺したがる男は言ふであらう。「女の提灯持ちもいゝ加減にしたらどうだ」と。しかし、眞理の前には、常に残酷に扱はれて居ても矢張り味方をせねばならない。

第一男許りで草案つた法律には、男らしい我が儘があり、男らしい缺點があることを先づ知らねばならない。とは女の言ふ言葉であるが兎に角、最初から女を弄ぶ意思で、處女を偽罔し目的を達した男子に對し、相當の制裁を加へることは、總ては婦人犯罪を未發に防ぐことになるから、何等かの名目を以て、これが保護を與へられんことをひたすら歎願に及んで置かう。

何故そんなことを歎願に及ぶかと問ふ前に、先づ哀れな女達を見、そして、そう言ふ惨めな婦人達の犯罪を調べて見ることである。

殊に賣春婦になつた動機を調べて見ると、如何にも肯首づける場合が少くない。

しかし、かう言へば公娼私娼に現を抜かし、まんまと欺まされ遂に反社會行爲に出でた男達は言ふであらう。それならば何故吾々を保護しないのだと。

昔から泥棒にも三分の理窟があると言ひ傳へられてゐるが、全く世の中は面白く出てゐる。

五七



## 八 婚姻制度の缺陷と犯罪

不完全な結婚制度が、多く犯罪の原因であることは、前にも一言した通りであるが、全く今日のように不徹底な結婚制度では、各人がこれによつて満足した結婚を爲すことが出来ない。

全く都會に於て、公設の結婚媒介所の設備が、完備してゐないと言ふことによつても、其の不備なることが明かに立證されるではないか。

第一人間の本能的慾望が、那邊にあるかを考へたゞけでも、結婚制度の完備の切なることが解るであらう。即ち吾々人間は、其の本能として、先づ食を求め、食に足りる時、衣類を欲する。更らにこれ等に満足した時、男女結合して一家を爲す慾望が起る。言ひ換ふれば吾々人間は、腹が空く飯を食ふ。これで一つの慾望が満たされる。眠むい寝る。これで又一つの慾望が満たされる。寒い着物を着る。又一つの慾望が満たされる。これ等に満足を生じた時、又新たな慾望が頭を掻ける。それは男女が結合して、一家を爲さんとする慾望と言ふと、少し誤幣があるかも知れないが、兎に角、性的慾望であるが、生じて來るのである。

こゝまでが先づ本能的慾望である。即ち本能的慾望は、人から教へられなくとも自から自然に感ずる慾望である。

かう考へて來ると、吾々人間にとつて、公設市場が必要なように、公設結婚媒介所が必要である。否、それ以上に必要である。何故なれば、公設市場で賣る日用品は、他の個人的商店にも同一性質のものが、同一値段で幾らも賣つて居る。一步を譲り一般商店より多少廉價であるとしても、それは吾々日常の生活に重大なる影響を與へない。

處が私立結婚媒介所の有様を見るがよい。極く少ない處で五圓、多い所になると、十圓乃至二十圓の申込金をぶつたくらねば、寫真一枚見せないと云ふ手厳しい有様。血の出るような金を算段して、申込金と稱する奴を出す。そこで漸くのこと四五枚の寫真を見せて呉れる、寫真によつて選定した男なり女なりと、見合ひをする段になると、見合ひ料と稱する新たな料金が徴發される。

幸にして一度で話が定まると、此度は成功報酬と稱する大いまいな謝禮金を強制的に徴收す



る。若し、一度で話が纏らぬと、又見合ひ料をぶつたくられる。つまり見合ひの度々に、私設結婚媒介所の憲法第何條かの但書によつて、其の都度金何圓也の見合ひ料を各當事者より徴收するものなりの規定が適用されるのである。だから悪く行くと、一つの結婚で何百圓の金額を消費しなければならぬことがある。

以上は主として物質方面のことであるが、物質以外にも往々打撃を受けることがある。特に婦人などは安心して一身を託することをお進めする譯けには行かない。

私は嘗つて此の種の體驗を得る爲めに、某結婚媒介所の門をくゞつたことがある。實を言ふと、まがよくば結婚しても好いと言ふ野心もあつたので、金何圓也かの申込金を工面し見合ひ料と共に、恭しく上納した譯けである。そして、先づ其の家の憲法の命するようになり、第一寫眞での選定を始めたが、どれもこれもダンゴの背比べと言ふ處で、一つとして氣に食つたものがなかつた。私が餘り興味がなさそうなので、主人は又一枚の寫眞を出して見せた。それは確かに美人であり、而かも、私の慾する性格の持主であることが、寫眞を通じて窺はれた。(こゝでちよつと断つて置くが、私は嘗つて寫眞觀破に興味を持ちよく觀破したものである。そして、其の都度的確

に當てると言ふので知人其の他人達に問題にされたものである)

だから私は餘り裝飾をして居ない寫眞があれば、其の女の性格なり嗜好なりを判断するに妙を得て居たので、最後に出された寫眞に就いて、其の女の性質並に嗜好等を先づ判断した處、主人は手を拍つて感服したのはよいが、「此の女は仕度金が一萬圓要るのです」と訊かされて二の句がつけず、矢鱈に頭許り掻いて居たように記憶して居る。

それから主人の命によつて、兎に角、前に見たダンゴの背比べから、一人を選定するのだつたが、もう私には興味も野心もなかつた。手の向く處の一枚をとつて主人に渡した。

丁度其の日から三日目かに、召換狀が郵便夫によつて配達されたので、素通し半分と體驗を得る爲めに、平常の身なりで、テク／＼やつて行つたのである。そして、小さな部屋で暫らく待つてゐると、先づ主人が這入つて来て、「若いんですから靜かに話して下さい。時間は十分間ですよ」と言ひ残して出て行く。

間もなく絹すれの音がした。「ハテ、愈々御降來だな」と思ふと、それでも妙に心が引きしまつて、先づ姿勢を正した。そして、入口を見た。そこには厭にデブ／＼太つた女が、金婚式にでも



出席する時のように、正装して淑かに一禮して居るのだつた。そして、入口近くに坐つた。私は女の一舉手一投足をも見遁がさなかつた。が、見れば見る程、何んとやらで、とても氣に食はない顔だつた。目と鼻と口とが、クチャ／＼と、經濟的に一つ處に片附けられ其の外の部分は、運動場にも使用するであらう。全くのんびりと廣かつた。

それだけ確かめると、現に女に對して意氣地のない私も流石に強くなつた。出鱈目を飛ばした揚句の端が、自分の貧乏を賣り物にし、其の徹底した貧乏の内情までさらけ出したのであつた。何故そんな弱い根を吹いたものか、全く想像が出来ないことである。が、兎に角、それだけのことが、申込金十圓也と見合ひ料二圓也の價ひに相當する藝當であつた。

これは單なる戯らに過ぎないとしても、私設の結婚媒介所の不完全なことは、多く言ふまでもないことである。私に往々善良なる風俗を破壊するような行爲の媒的を爲したり、惡辣な行爲に出でたりすることは、新聞の社會記事によつても明かである。

それなのに、文明を誇る我が國には、一つとして公の結婚媒介所の設置がない。これ程痛切に必要な機關の設置を何が故に躊躇して居るのであらう。

そこで先づ参考の爲めに、結婚制度の由來のことを一言して置かう。

識者の言をかりて言ふならば、古來水草を追つて轉々した時代は暫らく措くと言ふ書き出しと、人智未だ發達せず云々の書き出しとの二つがあり、而かも、其の二つの中何れかの一つによつて始めるのが先づ一般に通ずる原則であるが、そんなことはどうでも好いとして、凡そ婚姻制度の沿革は、掠奪婚、賣買婚、贈與婚の形式を経て今日の自由結婚制度にまで進んで來たのである。掠奪婚とは其の名の示すように、女を掠奪して妻としたもので、これが今日の結婚制度の起源とも見るべきものである。

賣買婚とは女を物品化し金錢其の他を以て、女と交換したものである。贈與婚は女を贈與の目的物となし、恰も物品を贈與するが如き考へで、娘を贈與したものである。

處が人智次第に發達し婚姻制度の完備の必要を感じ、而かも、人は一夫一婦を以て本則とし、これを獎勵し勵行するようになったのである。そして一方にはこれに反する者を處罰し、其の原則を強制して居ることは、諸子も知らるゝ通りである。即ち一夫一婦の本則を破り、重ねて婚姻



を爲す者に對しては、男女の區別なく重婚罪を以て處罰し、而かも婚姻中の女が夫以外の男子と通することを禁じ、これに反する場合は、姦通罪を以て處罰するなど、總て一夫一婦の本則を強制したものである。が、我が國では男子に對しては、これが違反を認めず男に限り貞操の責任なしと言ふ全く變んちくれんな、不徹底な、更らに又不公平な法制を採用して居るのである。

若し姦通罪を處罰することが、一夫一婦の本則を徹底させることにあるとすれば、言ふまでもなく、平同に罰すべきものである。性を異にするが故に、其の責任を異にすべき理由はない。只だ日本の法制が、家族制度に重きを置いた結果、血統の紊亂といふ事實に囚はれたことが、馳て女に其の責任を科すことになつたのである。

此の主義が公平なものでないことは、言ふまでもないが、参考の爲めに、其の實例の一二を紹介するとしよう。

嘗つて「五人の子供を棄てた姦婦」と言ふ見出しの下に、次の記事が報道されて居た。

廿四日午後二時頃人品のよい若い女が横濱署へ来て眞金町二の一二飲食店米川榮夫(假名)方の雇人となると届出に及んだが、舉動不審なので取調べると、右は三重縣一志郡山日村資産家長松長女東川波淺枝

(假名 二八)で夫との間に五人の子供があるが、夫は放蕩者で常に家を外にしてゐる間に昨年二月五人の子供を連れて雇人の片田安吉(假名)と大阪に墮落しガラス工場につとめて居たが生活困難なところから安吉と二歳になる子供を連れ、後の四人の子供をおき去りにして、本年四月十八日横濱に来て龜ヶ谷の山中に子供を捨て横濱前寶屋旅館に潜伏して居るものと解つたので嚴重取調べて居る。

此の記事を細かく分解して見ると、面白い人間の争闘が見られる。先づ夫が放蕩を始める。妻は嫉妬に燃える。夫は益々自暴に放蕩をする。そこで女は遣る瀬ない憤りの爲めに、氣も心も亂れて来る。遂に女らしい復讐を思ひ出す。そして、手近い處の雇人に言ひ寄る。女からしかけた戀は必ず成功する。殊に主人の奥方と來ては、番茶の出殻しでも事程左様にありがたいものであるし、又今日の御時世では主人の細君と通じた處で、首をちよん斬られる心配はなし、萬が一にも本夫の告訴があつても一年か、せいゝ二年の處だとかを括くる。

そうなるに殊に此の道は長びくもので、二度三度とあい曳きして居る中に、すっかり情が移り、三日置きが二日となり、二日が一日となり、一日一回が二回の密會となる。そうなつて來ると、自然に世間が五月蠅くなる、「喧々々々」の中を超然と、愛する二人が手を携へ自由な天地に



などと有りふれた考へを起す。

纏て二人は何かの道行きを思ひ出しながら、知らぬ他國に迷ひ込む。しかし、世の中は彼等が考へて居た程に甘いものではない。そこには生存競争と言ふ恐ろしいものが、もう／＼とうづを捲いてゐる。譯けもなく生活難だ。大阪は方角が悪いのだと、此度は横濱へ飛んで見たが、こゝにも矢張り生活難と言ふ奴が、先き廻りして網を張つてゐる。男が愈々小言と愚痴を言ひ出す、絶對絶命になる。

かうした順序で、又新たな犯罪を構成したものであることが、紙面を通じて窺はれる。

兎に角、此の事件に就いて、重大なる遠因を與へてゐるものは、言ふまでもなく夫の放蕩である。夫の放蕩といふ遠因さへ與へられなかつたなら、斯くまでも恐ろしい罪を二重にまで犯さなかつたであらう。と言ふ哲學上の因果關係を以て論ずることが出来る。

これも矢つ張り煎じつめると、結婚制度の缺陷である。少くとも今日の思想が、黄金萬能主義であり、而かも、それが結婚の上に多く亂用される反映と見ることが出来る。と言ふのは、社會一般の傾向が、相手の健康や、人格や、性質などは問題でなく、先づ第一が金で、第二が地位と

名譽であるから、其の相手方の放蕩や、少し位ひの西向きなど、一向に頓着しない。殊に大切な趣味の一致など考へても見ないのである。

次の事件は何れに罪があるか、其の邊のことは諸子の御判断に一任し、只だこれが結婚前に於ける調査の行き届かない缺陷であることの例として採用したまでであるが、面白い實例である。

事件を起すに至つた動機は、千葉縣下市川町松崎さん(假名)の、長男春吉(假名)は妻さだ(假名)が、病弱であるにも拘らず三日にあけず家を外に、放蕩をなしきさんが、數年間汗みどろで、蓄積した財産をちびり／＼持ち出し湯水の如く消費するので、きんは息子の放蕩を病弱な嫁が居る爲めであると信じ、先づあらゆる手段で、嫁を追ひ出そうとしたが、嫁はどうしても出て行かなかつた。そこで誠に淺果敢な考へではあるが、嫁が出て行かないのは、いたいけな孫があるからだ。孫さへ殺せば嫁は出て行く。嫁が出て行けば従つて息子の放蕩も自然治ると考へ、孫の毒殺を圖つたが目的を果さなかつた。けれども、國家の法律は、人道上許すべからざるものとして、先づ第一審で懲役二年を言ひ渡されたが、それに不服で上訴した處が、此度は前審よりも重く三年の懲役を言ひ渡されたのであつた。



要するに結婚制度の不備は、一方に於て犯罪の遠因となり、他方に於ては自殺若くば心中の動機となり、殊に婦人にあつては、自暴自棄の結果、賣春婦となり、人を呪ひ、世を呪ひ遂に一生を棒に振り、日蔭の者で終る女も少くない。

とりわけ世の中が進めば進む程、結婚制度の不備から起る自殺若くは、心中者の多くなることは免れない事實である。

最も此の種の犯罪若くば情死は、今日に始つたものでなく、結婚制度の最も不備な時代にあつては、寧ろ今日よりも多かつたかも知れない。殊に近松物の流行した享保前にあつては、確かに此の種の犯罪又は情死が、頻々として行はれたことであらう。

何れにするも情死と名のつくものゝ殆ど全部の動機が、結婚に關する事情より出發してゐる。其の例は今日に至るまでには、随分澤山なものであるであらう。お夏清十郎のような無慘なものが。例へばかうした例が、

以下二つの實例は、本年六月三日と同五日の兩日に報導されたものである。

三日午前二時頃山梨縣西山梨郡黒垣村酒折驛東方中央線鐵道線路に盛裝した抱合情死の男女あり取調べ

の結果、同村製糸業藤村嘉六方雇人梅田安(假名)(二十)及び同家の女工片山とし(假名)(十八)と判明昨年情交あり夫婦約束したが双方の両親が許さず心中したものであると。

僅かに二日を置いて、又こんな例が突發した。此の二つの實例が、結婚に關する事情の爲めであることは、言ふまでもないが、餘りに頻々として、同じような例が突發するので、新聞社の方では、巧妙に見出しを替へ「雇人と携へ娘の家出、母を諫める爲め」として報導して居る。

牛込區改代町一六酒商大井音吉(假名)長女龜子(假名)十九は雇人の鈴木某(二四)と情死する旨の遺書を置いて數日前家出した。同家は同町内での資産家であるが、龜子の母親清子(假名)は年甲斐もなく男狂ひをするのを苦にして母を諫めるために道行きをしたものであると。

ちよと讀んだだけでは、娘の心が誠に美しく身を以て、母に仕へる孝行娘のように見へるが、一般社會の實狀から、此の記事を細かに判斷すると、さまざまなおくそくが出来る。

先づ第一番に、單に母を諫める爲めならば、單獨でも家出は出来る。殊に處女の身として年頃の男を道づれにするか、否かを考へても解ることである。まして母親がそうした浮氣な女であるとすれば、娘が其の感化を受けるのは、見安い道理である。少くとも雇人と醜關係のあることは



否めない。更らに其の男と、夫婦になれない爲めの家出に相違ない。これが普通の解釋である。本項の終るに鑑み一言し附け加へて置きたいのは、これまでは無論のこと、これからもよくあることであるが、多く引用する實例に現はれて來る實在若くは、死亡した者に對しても、必ず本名を避け總て假名を用ひることを豫め承知して載きたいのである。何故かと言ふに、私は自分の秘密を自分でさらけ出すことは、別に苦しいことではないが、人の自分に關係のないことで、多少でも不快を與へることを慾しないので、或場合には地名すら變字を用ひ、うの毛程も人の名譽に涉らないように、最大善意を以て書きつゝあるから、其の邊の處を豫め御諒解願つて置きたいのである。こんな實例はないなどと言はないように。

### 九 犯罪の研究と刑法の原則

言ふまでもなく本書の目的が、専ら研究を主とするものでなく、一般的讀物としての存在であるから、しかつめらしい學說や其の研究方法のことなどは、どうでも好い譯けであるが、しかし

それも萬更ら必要のないことでもなし、順序として簡単に述べて置くことも無益でないと思ふから、極めて簡単に一言することにする。

兎に角犯罪の研究方法としては、歴史的研究と、統計的研究と、科學的研究との三つがある。が、科學的研究には、更らに自然學派と、精神科學との二方面があり、而かも、これ等の中には刑事人類學、刑事社會學、刑事性慾學、(又は犯罪性慾學とも言ふ)、刑事心理學(又は犯罪心理學とも言ふ)に分つことが出来るのである。

が、其の中でも特に有名な研究方法は、刑事人類學である。何故有名かと言ふと、ロムプロゾーと言ふ世界的の學者が、世界的な學說を立てたからである。今其の世界的大學說のほんの少しでも紹介することが出来るなら、紹介したのであるが、そんな六ヶ敷い理窟を比べて居ると、本書の目的が那邊にあるかを疑はれることになるが、兎に角、ロムプロゾー氏の說によると、犯罪は犯人固有の性格から必然的に行はれるものであつて、而かも、それは先天的に備つた運命である、先づ斷定し次に、犯罪人定型説を編み出したのである。即ち犯人は普通人よりも何所かしら異つた處があり、殊に婦人を母性と、娼性とに區別し、而かも、其の中の娼性は、一が賣春



婦で、他が犯人であると言ふのである。

そして、母性は正式に結婚することが出来、適當に家庭を造ることが出来る婦人であるが、母性はこれに反し正式な結婚が出来ないのみならず適當に家庭を造ることが出来ず、しかも、これは後天的のものでなく先天的に、生れながらにして備つてゐることであるから、假令結婚しても何時かは、其の家庭を必ず破ることになる。けれども、母性になると假令獨身生活を永らく持續して居ても、娼婦のように犯罪を犯したり賣淫をしたりすることは絶対にないと言ふのである。

局言すれば、娼性に生れた者は、先天的に運命が定められて居るのであるから、後天的に圓滿な家庭の女となつても亦、如何に教育を以てしても、いつか其の性格が現はれ、遂には賣春婦となり、犯人となると主張するのである。

そして、此の主張する處の犯罪定型説によると、所謂先天的に定つてゐる娼婦型の女は、普通人と其の肉體を異にし、例へば頭が尖がつて居るとか、後頭部が突出して居るとか、と言つたように、必ず何所かに變質的な處があると言ふのである。

けれども、一切後天的な事情、殊に周圍の關係、習慣等の影響を不問に附することが、果して

正當なものであるであらうか、少くとも習慣は第二の天性であると言ふことの金言を全然葬り去ることが、そして、生は善なりの諺言を嘲けることが出来るものであらうか。

私は不幸にして、この世界的大學説に屈伏することが出来ない。第一氏の説に従ふ時は、後天的な影響、例へば教育の如きは、全く無價値に終るではないか。最も犯罪人にして遺傳性を帯びて居る者は、事實少くないが、それにしても犯罪定型説の如く後天的の影響が、全然無價値であることは、どうしても信することが出来ない。

先づ犯罪定型説のことは、これ位にして、此度は刑法のことを少し許り述べよう。

兎に角、我が刑法の原則は、一般的、客觀的の標準によつて作爲された法律である。言ひ換ふれば、各個人の意味如何に拘らず刑法に、豫め定めてゐる條項に反した行爲に出ずると、其の者が殊に甚だしい惡辣な人間であらうと、乃至は又平素非常に善良な者であつたとしても、犯人と言ふ資格に於ては、同一であり、結果に對する責任も亦同一であると言ふのが、我が刑法の本則である。

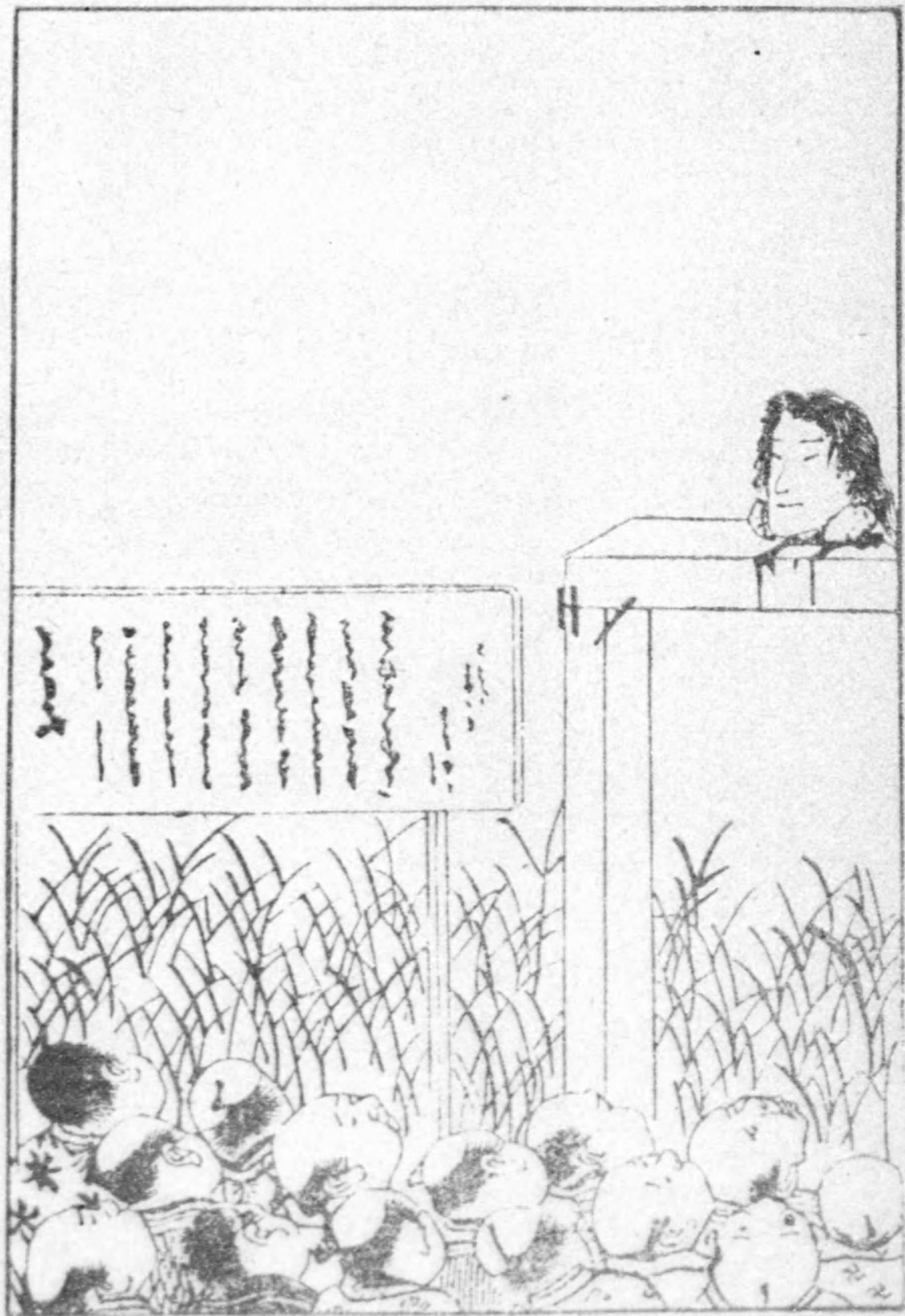
最も犯人に全然罪を犯す意思がない時は、それが例外を爲すことは言ふまでもないが、苟しく



も罪を犯す意思ありと見られる場合は、其の間に甲乙の區別なく處罰されるのが、一般的の原則である。

處が此の本則に對し例外と見るべきものがある。それは裁判官に自由裁量の餘地を與へたことで、例へば同じく人を死に致した場合に、一方に於ては死刑と言ふ恐ろしい苦痛を科することが出来ると共に、他方に於ては、僅かに三年の懲役を宣告することが出来ることである。言ひ換ふれば、犯罪の性質若くは、犯人の善惡又は、周圍の事情等あらゆる事實の認定の權を裁判官に與へ、出来る限り事實の眞想を穿ち社會の實狀に適する裁判を爲さしめんが爲めの例外である。

言ふまでもなくこれは、客觀主義の欠點を捕はんが爲めの一方法であるが、しかし、其の裁量の範圍は、矢張り法の許す處に限局され、それ以上事實の認定を許さないのである。即ち裁判官の事實の認定は、法の許す範圍に限られて居るので、どんなに哀れな者に對してもそれが殺人犯であれば、三年以下に下すことが出来ないのである。最も酌量減刑の規定の適用をなす時は、二年まで以下に下すことが出来るが、二年の刑を以てしても猶且つ苛酷に失する場合が往々にしてある殊に婦人の殺人罪に對して、それが最も多いことは、以下數項に涉り述べる處によつて明かであ



晒首の例 (夜嵐お編)



る。

結局、今日の法律制度では、昔の名裁判官例へば、大岡越前守のように、奇抜な、事實の認定のみによる。そして、事實の真相を穿つた何ん等<sup>くだわりのない</sup>自由な裁判は出来ないことになつて居る。

だが若し今日、越前守のような昔で言ふ名裁判官が存在してゐるとしても、それは多くの場合通用しないことになる。何故なれば、如何に名判官でも法律に定めた條項に反し、個人を主に、實際の實狀のみに囚はれた奇抜な裁判をすることが出来ないからである。即ち今日の處では、結局、名判官も法律の前には、平凡な判官に過ぎなくなるのである。

が、しかし、若し今日越前守のような人物が、幾千人とあり、而かも、其の人達が同じような思想なり、感情なり、考へなりを以てゐる者があつたとしたら、客觀的標準による法律の存在など必要を感じないであらう。重箱に物を押入れたように、窮窟な、全く融通の利かない法律は、確かに無用を感じるようになるであらう。

何故かと言ふに、同じ事件であり、同じような経緯<sup>いきさつ</sup>であり、よく似た出來事であり、更らに同



じような人間であつても、其の事件なり、其の出来事は、どこかしら必ず違つてゐる。即ちまん丸い事實、三角な事實、四角な事實と言つたように、そこには、何等かを異にして居る。それは丁度人間の顔が異なるように、其の事件の内容も異つてゐるのである。それなのに定められた一つの型に、丸いのも、四角なものも、更に三角も一切平等の待遇をなし平等の取扱ひで無理矢理に押し込むことは決して眞理を穿つたものではあるまい。殊に女と男は、第一性的に於て、そして又春機發情期後に於て、甚だしく其の特徴を異にしてゐるように、其の間には現に甚だしい差異がある。

兎に角、犯人に刑罰を科する目的は、善良なる社會の秩序維持にあるから、犯人個有の性格に應じ、其の責任を負担せしめると同時に、各犯人の犯罪的快感を防壓することにある。だから本當の目的は、各犯人の個有の性格にふさはしい刑罰の制裁を加へねばならないのである。此の意味に於て、一般人を標準とした客觀主義の刑罰制度は、最も適當なるものと言ふことが出來ないのである。

だが然し、主觀主義でも大なる欠點がある。如何に越前守のような非凡人が、幾千人あるとし

ても、總てそれ等の人が、思想なり、感情なり、考へなりが、總て同一であると言ふことは、無論言へないことである。それは前にも言つたように、面が異つて居るように、其の心も考へも異つてゐる。だから従つて同一犯罪に對する見方を異にし、平等公平なる裁判を爲すことは最も困難なことである。

矢張り絶對主觀主義にも大なる欠點がある。そこで我が刑法は、以上二主義の中比較的危險の少ないつめ込み主義を採用し、これを以て刑法の大原則となしたものである。



## 第二 性慾的婦人犯罪

### 一 婦人の性慾と戀愛

これから述べようとする處は、前にも一言したように、性慾を土臺として、婦人犯罪を考究する最も簡易なる通俗刑事性慾學である。が、本書の目的が研究を主とするものでない限り、困難な學說などの討究を爲すことは、無論避けねばならないが、どうしても述べねばならぬことだけは、極く簡単に片付けて行く。

一體性慾本能とは、如何なるものであるかと言ふに、これに於ては、古來から識者間に、さまざまと論議し考究されて來たものであるが、其の重なる説は次の如くである。

其の一はモーア氏等の稱ふる處の説であつて、此の説によると性慾本能とは、其の名の示すように、單に排泄本能に過ぎないと言ふのである。

其の二は自然科学派のヘルマ氏の説であるが、此の説によると性慾本能とは、充滿せる胚腺から出する壓迫反射であると主張してゐるのである。

が、しかし、其の研究の結果を見るに、これ等は共に其の半面のみを解釋であつて、無論、其一般の消息を明かにしたのではない。と言ふのは、第一生殖作用と言ふ大切なことを少しも見てゐない。言ひ換ふれば、性慾本能は、それが本能には違ひがないが、單に排泄的快感のみでなく他に重要なあることを怠つて居るからである。そこで今日の學者は、性慾とは生殖を目的とする排泄本能であると言ふことに略ほ一定して居る。

では婦人の性慾と、男子のそれと何れが、強烈であるかと言ふに、これに就ても多少の異説はあるが、婦人の性慾は男子のそれよりも薄弱であると言ふことに、大體一致してゐるようである。無論私も此の説に左擔するものである。

其の理由の一つとしては、獄にある囚人に就ての事由である。即ち男の囚人は、獄に投じられると、自然に何時の間にか、瘦せおとろへるのが常であるが、女の囚人は、これに反し却つて、益々太つて行くと言ふ、此の事由からしても、男子の性慾が、女子のそれよりも強烈であると言



ふことが出来るであらう。最も他の生理的な理由もないとは言はないが、それにしても此の事實が、人間の勢力の源泉である性慾と無關係であると言ふことは、無論出来ないことである。

其の理由の二は、大抵の女が小供が出来ると、小供の爲めに自然夫の愛から離れて行く。少くとも小供のない時代より、夫に對する愛が薄らんで行く。それは夫に捧ぐべき愛を小供の爲めに分割される結果である。そして、其の愛の分割は、とりも直さず性慾本能の薄らいだことを意味するのである。

處が男子は小供が出来ても決して、性慾の衝動に變更を來たさない。これも矢張り男子の性慾が女子よりも強烈であることを意味するものであらう。

其の理由の三は、女は殆ど平氣で、獨身生活を續けて行くが、男にはそれが容易に出来ない。最も男には我が儘を許す機關があることも絶対性慾生活が出来ない理由の一つではあらうが、矢張りその性慾の強烈なことも見遁がす理由には行かない。

其理由の四は、男から積極的に戀を仕かけられなければ、多くの場合女は、其の男を戀することが出来ないのも、矢張り性慾の薄弱を意味するものであらう。

其の理由の五は、人間外の下等動物に付て見るも其の雄が、性慾絶りんなることを見るであらう。例へば鶏の雄の如きは、數羽の雌を完全に統御してゐることなどによつて。

これを要するに、女は其の性的關係に於て、受動的なるが爲めに、男子よりも性慾の衝動が薄弱であると言ふことが出来るのである。

そこで此度は、性慾と戀愛との關係であるが、これ又識者間に多少異議されて居る問題であるが、要するに或一派の學者は、性慾と戀愛とを全然同一に解し性慾エコール戀愛なりと主張し、他の一派の學者は、これを區別せんとするものである。

言ひ換ふれば一方では、性慾と戀愛は、全く同一のものであるから、これを分離して考へることとは出来ないと言ひ、他方では性慾と戀愛とは、これに反し分離して觀察することが出来ると言ふのであるが、しかし、其の兩者を詳細に考究して見ると、以上は何れも極端な説と言はねばならない。と言ふのは、極く下等な動物の中には、全然戀愛關係を認めることが出来ない。が、性慾生活だけは、完全に行はれてゐるから、これによつて見るも、兩者が全然同一なものではないことが明かである。更らに戀愛が性を離れた同性愛に存することを説明することが出来なくなる。即



ち性を離れた處に戀愛がある。

それかと言つて、此の兩者を分離することも亦出来ないことである。結局、全然同一であるとも言へず又、總ての場合にこれを分離することも出来ない關係にあるのだ。こゝに注意すべきことは、性慾が先きで戀愛が導びかれることがあり、又これに反し戀愛から性慾が導びかれることがある。例へば結婚するまでは、死ぬ程厭であつたものが、結婚して見ると案外にも相手方が好きになり、自然戀愛を感じて來ると言ふ場合は、實際に於て少くないことである。

處が多くの場合には、これと反對に、まだ春期發情期が到來しないのに、戀しさ懐かしさを感じそれがかうじて遂に關係を結ぶが如きものである。

兎に角、以上の何れかの一によつて導びかれ助長されて居る證明は、實際に於て證明が出来るが、しかし、この二つは判然と區別の出来ないものであるから、これ位ひにして置く。

## 二 發情期に於ける婦人犯罪

獨逸の金言に「性慾は身を燃き盡す」と言ふのがあるが、全く性慾と犯罪とは、離るべからざる密接な關係を持つてゐる。殊にそれが婦人の發情期に於て、最も多く行はれることは、何れの國の統計を見ても明かな事實である。即ち男子は、發情期よりも其の後に於て、多く犯すことになつてゐるが、婦人は總ての年齢を通じ、此の時代が最も危険である。

では何故に婦人に限り發情期に於ける犯罪が多いかと言ふことになると、それは言ふまでもなく、生理的影響による精神障礙の結果である。が、しかし、其の詳細を説明になると、學者の説く處も一ようでない。

例へばネツケ氏の説によると、初めは強い情慾に制せられ、何んとはなしに物を欲する念が強くなるが、後には性慾の爲めの競争を始めるようになる。だから最初は先づ物盜に始まり、後には自然と對人的な犯罪に進んで行くと言ふのである。

これは外國人が、外國婦人に就いての研究に過ぎないが、しかし、日本に於てもかうした順序をとる場合は決して少なくない。現に發情期前後に於ける萬引の多いのは、其の一面の消息を物語るものである。



嘗つてかう言ふ例があつた。女は十六歳で相當資産家の娘であり、而かも、何一も不自由のない身でありながら、友人の物を失敬したり、外出の際は時々萬引と酒落込んだりするので、遂に官憲の手に捕へられたが、何に分にも十六と言ふ小娘でもあり、相當な資産家の娘でもあるので説諭の上放免にはなつたが、世間では未恐ろしい娘と、一時は噂されたものであつた。

それから又こんな事件があつた。

大分縣下豊崎村雜貨商、高木利八(四〇)方の兩戸をこぢあげ、右手に一尺八寸左手に六寸位ひの短刀を振りかざして押し入つた覆面の女強盗があり、主人利八が驚いて上るや、いきなり凶器を突きつけ四十圓を出せとすこ文句を並べ、利八は妻や娘を起しアトウ酒一本をとり出して、これで許してくれと哀願したが聞入れず、ついに三圓餘を奪つて逃走した、急報により所轄署で捜査の結果、犯人はさきに朝鮮から歸つた同村川田吉藏(假名)の二女初江(假名)十七と言ふ不貞少女と判明自宅で捕縛された。

これなどは固より不良少女の所爲であるから、此の場合の例としては、ふさはしいものではないかも知れない。しかし、物を欲する情熱と、發情期前後に於ける冒險を好む心理とは、これによつて明かである。それから又或學者の説によると、婦人の發情期にあつたは、主として感情的

犯罪、例へば放火の如き偽證の如き脅迫の如きが最も多數を占めてゐると言つてゐる。

處女の脅迫の例として、最近のものは次の記事である。

先月上旬來千葉縣下市川町某畫伯一家へ十數通の脅迫狀を送つた同町川田眞(假名)妹きく子(假名)十四は先月二十六日市川署の手に捕へられ一先づ放還されたところ先月二十八日來今度はきく子に對し「おれ達は來年四月までに〇ちゃん(某畫伯の息のこと)に對する恨みをばらすのだ。それまでお前は學校へ行つてはいかぬ、それを守られればお前の一家を焼き殺すぞ」其他六通の物すこい脅迫狀が白骨圓の名で送られたので以來市川署で八方捜査中のところきく子の態度に不審をいだき四日同署に引致嚴重取調べた處、彼女が自己にあてた脅迫狀を書き自宅になげ込み背後に不良團が差金をしての犯行の如く見せんための旨遂一自白した。

それなどは確かに、不良少女らしい虚構があり、而かも、そこには十四の娘としては、餘りに巧妙な巧みがある。けれども、發情期前後の處女には、恐ろしい冒險的な、餘りに空想的な考へが、往々にして巧まれるものである。現にこれなどは、大人もちよつと考へ及ばない程の空想的な、空構である。



これは單に想像に過ぎないが、前記のきく子は、發情期間ぎはの娘であり、而かも、ひどく猜忌心の強い女であるに相違ない。少くとも將來ヒステリックになる女である。

偽言若くは偽證の例として十數年前にかう言ふ例があつた。

何んでも十四五の娘だつたと記憶してゐるが、何に分にも一と昔以上の小さな出來事であるから、確かなことは言へないが、兎に角、お使ひに出かけたのである。處が道草を食つてゐた爲めに、ひどく歸りが遅くなり、其の言ひ譯けとして、事もあらうに「途中で凌辱された」と告げたので、家内の者はひどく心配し直ちに其の由を届出た。處が取り調べて見ると、それは眞赤な偽りで、單に口術に過ぎなかつたと言つたような虚言であつた。

今一つの例は、某家の女中きみ(假名)が、主人の不在中に主人の物品を盗み出し、其の犯行を陰ひせんが爲めに、強盜が押し入り物品を強奪した上、凌辱されたと届出た事件であつた。

これなどは確かに、處女らしい虚構であり、恐ろしい空想の結果である。

兎に角、婦人の破爪期は、殆ど病的に近いものがある。殊に婦人の家出の大多數が、破爪前後にあることは言ふまでもないことだが、参考の爲めに、極く最近のものを例示して置かう。

これは報知新聞の七月九日の社會記事の一つであつて、其の見出しには「小娘の夢、女優になりたく東京に迷ひ出る」とあつた。

八日午後十一時半頃十二三歳位ひの少女が東京驛一二等婦人待合室にうろついて居るので警戒中の日比谷署員が取調べると現金百七十圓を所持し、名古屋市中區古澤町一の四久太郎(假名)二女川田梅(假名)

十三で女優になりたく七日正午自分の貯金を拂下げて旅費をこしらへ無斷家出した事がわかつたので本所押上町の親戚を呼び出して引渡した。

女の十三乃至十七八と言ふ處は、何かしら新らしいものを求めよう。新奇なことを求めようとする、強い熱情に冒され易い時であるから、稍もすると女優のような、華かな魅惑的な商賣に憧れを持ち飛んでもない、取り返しへのつかぬことを演ずるものである。

これは私が知つてゐる女優の話であるが、始めは矢張り前記の娘のように、無斷で家を飛び出し、或小つほけな劇團に身を寄せたのが、病みつきで今でも矢張り足が洗へず田舎廻りの全く、にわか、等しい劇團に、とてもひどい苦しみを續けてゐるが、更らに過去を顧みると、涙ぐましい幾多の事件が横はつてゐる。今こゝで其の経緯を書いてゐる譯けには行かないが、兎に角、第



一步を誤ると當初豫期だもしない、とてつもない悲惨事がやつて来る。

要するに十三四から十七八に至る所謂、破爪期にある者は、往々にして、何んの意味ともなく冒険を好み、而かも、ふらくと家出を思ひ立つものである。更らにそれが昂じて来ると、一種の反社會行爲に出で、自殺、心中、放火、傷害、偽證、誣告、窃盜、若くは滑稽な強盜等の罪を犯すようになる。少くとも不良少女、淫賣婦なる動機は、家出に始まり、だんく辛練になつて行くものである。

尙これに就て以下、項を追つて少し述べることにする。

### 三 破爪期の放火と窃盜

破爪期の犯罪の中、可なり多數を占めてゐるものは放火犯である。處女の放火として、何人もよく知るものは、八百屋お七であるが、これ以前に處女の性的犯罪として、放火を犯したものであるか、どうかは詳かでないが、兎に角、八百屋お七の犯罪は、破爪期に於ける放火の例として

適當なものである。

最も彼女が放火を爲した動機は、今日よくある處女の放火と、趣きを大分異にしてゐるが、それにしても發情期前後の處女が、かうした感傷的な罪を犯すことは、獨り八百屋お七に限らない何時だつたか、妻の親戚の娘十六が、女中格で其の家に同居してゐる中、主人某が手をつけ足をつけてゐた處、遂に妻によつて、其の事實を發見され、大騒動が持ちあがつた結果どよつまりが娘を追ひ出すことになつた。

處が淡雪のような初戀の兆とでも言はうか、小つほけな彼女の胸には、遣る瀬ない憤りと、食ひ蹴られるような腹立たしさと、更らに戀しさ懐かしさで、身も世もなく悲しかつたのであらう。遂に彼女は古綿に、石油を泌ませ親のような戀人の家に、火を點じたのであつた。

これなどは確かに、處女の性的犯罪であるが、性に關しないことで、例へば主人から、ひどく叱責されたのを恨み、放火を企てるなどの例は、決して少なくない。

古い新聞の切抜帳には、かうした少女の犯罪を證明する例は、可なり多數に昂つてゐるが、餘りあり振れた例であるから引用することを見合せて置く。



兎に角、婦人の發情期前後に放火の多いと言ふのは、婦人一般が感情的であり、何事も感情の向くが儘に、泣き、笑ひ、喜び、悲しみ、怒り、憤りと言つたように、氣分心持ちに支配され易いこと、而かも、それが破爪期に於ける生理的影響、即ち月經の來潮てふ事實によつて、一層過敏に、一層鋭く導びかれて行くが爲めに、自然放火のような感傷的な犯罪を選ぶことになるのである。そして、又此の期にあつては、對人的犯罪を爲すに適して居ないこと。例へば殺人の如き傷害の如き罪を犯すに、ふさはしくないことである。更らに今一つの理由は、女子本來の性質として、公然罪を犯すことを喜ばず陰に、人知れず恨みを果すと言つたように、物かに犯すことの出來る罪を選ぶのも亦、見逃がす譯けには行かない。

次は發情期に於ける婦人の窃盜であるが、殊に萬引に至つては、婦人犯罪中最も上位に位するもので、ネツケ氏の言ふが如く、破爪期の初め頃から、そろ／＼行はれる犯罪である。

では何故に窃盜が、破爪期前後に於て、多く行はれるかの理由に於ては、矢張りネツケ氏の言ふが如く、強い情熱に制せられ、物を欲する念が強くなるには違ひないが、何故に物を欲する念が強くなるかの答に對する疑問が、更らに起きて來る。即ち發情期になれば、男女共に身心發達

し、急速度に性慾が醒めて來ることは明かだが、それが爲めに何故物を欲する念が強くなるかに付いては、更らに説明の要がある。が、しかし、それは次の事由に過ぎない。

此のことは別に婦人に限つたことではないが、特に婦人は發情期と共に、恐ろしく好奇心が發達し、競争心が生じ、同性間は勿論異性に對しても競争意識を持つものである。従つてこれと競争する爲めに、先づ物を欲するようになるのである。

斯くの如く婦人が男子よりも物に對する切なる慾望を持ち、烈しい競争意識が生じて來るのは女が受動的であり、神が女に美を示し、能動的な男によつて、積極的に性慾生活に導びかれねばならないからである。言ひ換ふれば、女がより美しくありたいと願ふのは、積極的な男から見放されまいとする本能的慾望である。

これに就ての詳細なことは、心理篇に譲り。處女時代の窃盜の實例を二三示して置く。

何時だつたか、づつと昔のことであるから、正確な記憶はないが、兎に角、可なり富豪の娘だつたことは明かである。其の娘のことを假に峯子と稱ほう。峯子は十七歳で、某女學校に通つてゐた。頗る美人であつたが、別に男との疚しい關係もなく、而かも、總てに従順な娘であつた。



それに實家は中流以上の資産家であるから、何一つ不自由なことはなく、殊に服装は群に優れたものであつた。それなのに、外出の時は勿論、學校の歸りにも時々、何かしら詰らないものを盗んでは持ち歸へり、自分の室として與へられた室の押入れへ底深く秘めて置いたと言ふのであつた。

これなどは讀んだだけでは、何んのこともないが、よく内情を穿さくして見ると、其の半面には破爪期の處女らしいこと、何んとはなしに物を欲することなどが、遺憾なく物語られてゐる。つまり極端であるが、發情期に於ける女の心理をよく物語つてゐるのである。

私が見た例としての今一つは、私がまだ大阪にゐる時分のことであるから、かれこれ二十二年にもならう。

今はないが當時松山館と言ふ下宿屋が、上福島にあつた。私はそこに下宿してゐたのである。處が或日私の隣室に居たKと言ふ宿泊人のガマロが紛失されたのであつた。そこで私も當然或嫌疑を受けねばならぬことになつた。と言ふのは、丁度其の前夜Kの室へ遊びに行つて居たのが私と今一人Bと言ふ商業學校へ通つてゐる男と二人だつたからである。

私は少年のことでもあるし、又可なり潔癖でもあつたので、ひどく迷惑した。金は僅か十圓足らずのものであつたから、ひどく面倒となれば、Bと二人で分擔して辨償しようとする約束はしたものの、將來の希望に輝いてゐた中學時代の私達には、可なりの打撃だつた。殊に自負心の強い私は悲しくもあつた。それが表向きにならないまでも、そうしたことの嫌疑を受けることは、中學時代の私達には腹立たしいことであつた。

そこで私達二人は、先づKに向つて絶交の宣告をした。それは假令どうあらうとも友人に嫌疑をかけるような薄情な人間と、實際の要がないと言ふのであつた。そして、今後五日間に、犯人があがらなかつたら、吾々で盗まれた金は必ず辨償することを附け加へた。

處がKは狼狽つゝ、「まあ、待つて呉れ、君達を疑つたのは悪るかつたが、今になつて見ると他に變んなことがあるんだ」と口早に言つて、染がすりの浴衣をとり出した。そして、二た處程もよんほりと黒ずんだ點を指して言つた。

「君達はこれを何んと思ふ。血ぢやないか」問ひと答へを一緒にして私達を見た。

三人の視線が或一點に集つた時、私は意外な事實に、意外なことを考へて見た。しかし、それ



は少年の空想らしい考へだつた。

「實は僕先刻がた着ようと思つて見るとこれぢやないか、全く驚いたよ。だから僕届けようと思つて内將さんに相談したんだが、内將さんがそりや届けない方が好い、今日の中に必ず犯人を出すから、届けなくて呉れつて言ふんだ」

其の時私は淫ほんな田舎のことを思ひ出した。そして、何時だつたか、不始末なだらしのない女の噂をしてゐる青年達の話に耳にしたことが考へ出されて來たのであつた。

「全く意外だね、僕はまさかそんなことはないと思つて居たが、」と、Kは何故か顔を赤らめたその翌朝Kは、ニコ／＼微笑みながら、ガマ口が机の抽出しに入れてあつたこと、金に少しも手が附けてなかつたこと、犯人が意外にも従順な、全く馬鹿な程質朴な十七になる女中お松の所爲であつたこと、そして、其の女中が夜明け近くKの室に忍び込んだこと、忍び込む際にかけてあつた浴衣に觸れた爲め、自然にづらかり落ちたこと、それを逃げ出す際に踏んで出たことなど内將から訊かされた通りのことを細々と話したのであつた。

それから又、こんな例もあつた。

或商店の娘で十五になる俊子と言ふ少女が、月經の來潮毎に、店の品を床下へ隠す、僻がありそれが殆ど規則的に行はれるので、両親がひどく心痛してゐると言ふのを聞いたことがある。

これ等は特に變つた例であるが、月經の初潮にあつて、萬引を爲すが如き例は、決して少なくない。殊に甚だしいものになると、活動寫眞で見たことを實地に行ふと言ふ恐ろしい例もある。

何時だつたか洲崎辨天町の貸席業の妻同様になつてゐた十六か十七の娘が、深川黒江町某家へ斧を携へ忍び込み凄惨な文句を並べ金品を強奪した例があるが、これなどは、物欲さの爲め危険を忘れての無謀な行爲には違ひがないが、其の半面には又彼女をかうした殘酷な世界に引つり込んだものがある。

それは言ふまでもなく彼女が踏んで來た悲惨な境遇である。姉は承知の上で某の妾になつたのであるが、彼女は其の姉の爲めに、姉の仕事を手傳ふ爲めに、女中として世話になつて居たのである。それなのに何時の間にか、某は彼女の純な處女の誇りをムザ／＼と蹂躪し、而かも、それに對する價ひもされず相變らず物質の上に苦しめられてゐたのである。

殊に彼女の母親が非常な物質主義者なので、會ふ度毎に金々と、金の威力を解き遂には彼女等



の不甲斐なさを罵倒するのであつた。

そこで無智な女は、先づあぢけない浮世を呪ひ、更らに處女らしい慾望に燃え、そして恐ろしい好奇心の爲めに、譯けもなく決意するに至つたものである。(澤田撫松氏著「生きの悩み戀の悩み」参照)

兎に角、かうした處女の犯罪は、此の外にも随分變つたものが少くない。殊に物質に恵まれぬ女優見習時代には、よくある奴で、最初は幻のような空想の爲めに、あらゆる苦痛と、あらゆる屈辱を堪え忍ぶが、三月四月となつても目鼻がつかず何時になれば、獨立が出来ることやらそれさへも解らない。

そうしたことに意識され出すと、そして、女優と言ふ華かな虚榮心を満足させることに、心が動き出すと破爪期前後の娘など、往々にして心にもない盗みをやる。けれども、芝居道では不思議にそれを公にしなくとも自然に發見されるので、大抵の財物は元戻りする。しかし、女優は事の結末がついても其場合そこに居堪らず逃げ出して丁ふのが常である。それだけ女は虚榮心が強く、而かも、善良なものと見なければならぬ。

殊に女の破爪期病なるものは、それ自身が既に變態であり、そして、そこから起る犯罪は、變態的犯罪であるから、これを正則なるものとして、判斷し刑罰制裁を加へることは、無論出来ぬことである。少くともかうした犯罪は、生理的影響に基づくものでなく病理的影響によるものと見るのが正當である。最も月經そのものの來潮は、生理的であつて、無論、病理的のものではない。しかし、それは絶對のものでなく程度の問題である。

即ち生理的に變調を來たせば、無論病理的のものと云はねばならぬ。そして、これは事實の認定でなく法律問題である。言ひ換ふれば、犯人に正則な意思あや否やの問題である。

これを要するに、女の破爪期に於ける犯罪は、少くとも左の事柄を究めねばならない。

- (一) 生理的によるもの(刑法上減輕すべきもの)
- (二) 病理的に移及せるもの(意思なきと見るべきもの)
- (三) 周囲の事情によるもの(刑の執行の猶豫あるべきもの)

我が刑法の解釋として、生理的影響による者を心神耗弱者と見ることは、多少曲解のおそれがあるが、しかし、これを以て正則なる意思あるものとして、正則者と同じ刑罰を加へることは、



無論許されないことである。少くも破瓜期前後に於ける處女の精神障害を考へるとき、これが減輕の事由たることは疑ふことが出来ない。

#### 四 月經と婦人犯罪

婦人犯罪中最も變則的なるものは、月經時に於ける犯罪である。最もこれはかうした生理的に變化のない男子から觀てのことではあるが、それにしても婦人の犯罪の大部分が、月經時若くは其の前後に於て行はれると言ふに至つては、更らに變態犯罪と言はねばならない。

そこで婦人の月經と犯罪とが、極めて密接な關係にあることを最初に證明し、其の理由を摘示したものは、一體誰れかと言ふに、それも矢つ張り伊太利のロムプロゾー氏であつた。即ち氏の實驗報告によると、婦人犯罪と稱するものゝ多くは、月經の異常者であり、而かも、これが影響より生ずるものであると、先づ斷定し、そして又、假令異常がなくとも、多く月經時であるとか、若くは其の前後であると主張し、而かも、事實によつて、これが證明をなし、其の理由を開陳し

たのであつた。そして、其後多くの學者により、實驗され、研究された結果、婦人犯罪の多くが月經の影響を受け、而かも、そこには精神障害を來たしてゐることが、明かになつたのである。

全く月經と婦人犯罪は、恰も鎖の兩端のように、一方を調べると、それが月經時若くは、其の前後であり、他方を調べると、それが恐ろしい犯罪であつたと言ふように、常に密接な關係を持つてゐるものである。

現に女優の殺人未遂として、世の中を騒がせた横濱の中根俊子(假名)は、犯行當時月經時であつたと言ふ話だ。殊に彼女は時々月經に異狀があつたり、猶且つ多少狂的な遺傳關係を有つてゐたと言ふから、確かに變則的な犯罪であつたに違ひない。

今こゝにその經緯を詳細に書いてゐる譯けには行かないが、もう一と昔以上にもなることであるから、大抵の人は忘れてゐる時分である。だから其の大體の筋を書いて、諸子の御参考にしよう。

俊子は大阪市北區の中産階級の家に生れた。そして、其の土地にある女學校を卒業すると、間もなく工學士某の家に嫁ついたのであつたが、不幸にして姑の氣持ちに添ふことが出來ず時には



重大なる侮辱と、堪えがたい虐待を受けることがあつた。しかし、そうした不幸の中にも彼女には、何よりも力強い嬉しいことがあつた。それは言ふまでなく、夫にひどく愛されてゐたことであつた。全く彼等二人は、他所の見る目も羨ましい程、相思相愛の仲だつた。

それに今一つ彼女が喜んだのは、夫が横濱に轉勤を命ぜられたことであつた。「今までは傍に居たので絶えず來ては苦めたが、百里も離れた横濱に行けば、そう／＼來る氣づかいはない、來た處でせい／＼一週間か十日の辛抱だ」と信じたからである。

處がそれは大きな間違ひであつた、横濱に來ると一年も経つか、經たぬ中に、のこ／＼やつて來て以前よりも遙かに、腕によりをかけて責める、苦める、それは丁度、何かの芝居に出る婆さんそつくりだつた。殊に彼女が夫の許可を経た上のことではあつたが、或劇團に通つてゐたことが、一層婆さんの癪に觸り「此の嫁を出さねばわしが死ぬ」と言つたように、あらゆる手段とあらゆる方法で、息子との縁を切らうとしたのだつたが、それは兎に角、犯行當日も何かのことから、小語が始り、遂に烈しい言ひ争ひとなり、姑が腕力で來たのが、逆上の原因となり、とう／＼我慢が仕切れず剃刀で、姑の肩先きを斬りつけたのであつた。しかし、氣丈夫な養母は、可なり深手

にも屈せず俊子から、剃刀をとると表へ遁け出したのであつた。

これはほんの梗概に過ぎないが、しかし、これによつても此の事件が新舊思想の争闘であり、而かも、お互ひの人間らしい弱點を發き合つてゐたことは明かである。少くとも新らしい思想を持つ者は、新しい思想の爲めに倒れ、舊い思想の者は、其の弱點の爲めに傷いてゐる。

それは兎に角、俊子は殺人未遂としては、可なり重罰に處せられたが、獄に投じられると、間もなく鐵窓の傍で、人知れず盜死を遂げ獄中の露と消えたが、彼女の魂は死んでも死に切れなかつたことであらう。しかし、犯行當日彼女が月經時であつたこと、多少狂的な遺傳を受けてゐたこと、更らに彼女の境遇に、同情する者が多いことなどの事實を彼女の靈前に捧げたら、定めし満足するであらう。

これは全く想像に過ぎないが、彼の妖婦として知られた高橋お傳にしても、犯行當夜月經時であつたように思はれる。何故なれば、當時の新聞によると被害者がひどくいどんだが、彼女は其の都度男の要求を拒んだものゝように書かれてある。若しこれが事實であるとすれば、彼女は確かに月經時であつたに違ひない。これと反對に若し月經時でなかつたとしたら、これを拒む譯けが



ない。相手を殺害しても尙且つ金を欲する彼女に、節操の犠牲など決して苦痛ではない筈だ。殊にお傳は淫ほんな女であり、他にもかうした例は澤山あるではないか。假に彼女に貞操の觀念が、少しでも残つて居たとしても、相手の生命を斷つ程重大なものとも思へない。最もこれは或一面の解釋に過ぎないが、どうも月經時であつたと見るのが、正しい解釋のようである。

これは少し餘談であるが、序に明治初年頃の死刑執行のことを一言して置かう。

お傳が死刑執行になつたのは明治十二年であるからまだ首をちよん斬る悪習が残つてゐた時である、即ち死刑は打首によつて執行されるのであるから、先づ白の晒木綿で目隠しを爲し、斬首者によつて手を引かれ斬首臺に昂ると、例によつて「言ひ残すことはないか」の定り文句が最後まで續く。愈々言ひ残すことがなくなると、首斬淺右衛門なる者が、バサリと何んの躊躇もなくちよん斬つたものである。そして、その斬口へ水をかけて、出血を止めるのであるが、今日の絞首制度から見ると、随分慘酷極るものがあつた。

それは兎に角として、月經と犯罪とが極く密接な關係を有するようになり、自殺とも亦離るべからざる關係がある。即ち自殺の原因は、一がヒステリー、二が月經時、三が月經異常と言つたように

必ず生理的若くは、病理的の何れかの影響を受けてゐる。

新聞の社會記事には、多く月經の有無を明かにしてゐないが、婦人の自殺は必ず月經時若くは其の前後である。

嘗つて私の古郷に、かう言ふ事件があつた。それはNと言ふ三十前後の女が、自分の家の柿樹に、自分の俵が柿をとつてゐると信じ、ひどく叱りつけたのであつた。處がそれは自分の子でなく、Nが世話になつてゐる本家の一人息子であつたので、飛んでもない騒動を惹き起したのであつた。そして、Nは夫からも親戚からも叱責を受けた爲め遂に逆上し、其の晩附近の池に身を投じ果敢なく消えて了つたのであつた。

事件は極く簡單だが、此の簡單な事件の内容を形成する本人の個性、意思、錯誤、外界の刺戟、月經の有無等を考究すると、とても面白いものが出来る。殊にNは事件のほつ發若くは、自殺當時月經時であつたと言ふから、従つてそこに錯誤が生じ、他人の子供を我が子と誤信したものであり、而かも、錯誤に基づく行爲の責任を強られる腹立しさ、辯解しても解らぬ忌々しい人達、遂にNは逆上して了つたものである。



此の例によく似た事件が、本年六月五日の報知新聞に出てゐた。それは「失火の自責で娘投身す」と言ふ見出しで次のことが書かれてあつた。

四日午後九時頃千葉署から龜戸署へ十七歳位ひの娘が投身自殺したと引取方を照合して来た、右は府下龜戸町六丁目一七八笹野はつ(假名)の二女こと(假名)十七歳で同女は去る三月一日午前十一時頃府下龜戸町六の一〇八セルロイド工場熊澤廣吉方で作業中過失で火を出し全半焼十八戸を出した責任者として悶々として日を送つて来たが、三日午後ふらりと家を飛び出し千葉海岸から投身した處救はれたものであると。

最も此の事件は、前記の事件とは、其の行き方を多少異にしてゐるが、自責と言ふことゝ、故意がなかつたことゝは、稍々共通した點がある。即ち自責の爲めに、立つても居ても居られないこと、別に故意があつた譯けではないが、世間の噂や手厳しく、周囲の事情が猛烈であつたことなどが、共通した死の原因である。

が、しかし、其の半面には、破爪期前後に於ける生理的影響を見遁がすことは出来ない。少くとも自殺を決意し家出をした當時、異常がないまでも月経時若くは、その前後であつたことは想

像にがたくはない。

次は家庭の不和から来る自殺若くは犯罪のことであるが、これにしても亦、生理的影響を忘れてはならない。假に次のような最も簡単な記事に就ても必ず考へられることである。

九日午後三時頃府下中野町自働車運転手加藤一郎(假名)内縁の妻吉井きぬ(假名)二十二は自宅でカミソリで咽喉を斬り自殺を遂げた。原因は家庭の不和。

右の如く死の原因が、單に家庭の不和とのみ書かれてあるが、しかし家庭の不和は多くの場合死に對する單なる動機に過ぎない。言ひ換ふれば、死を決意させる動機は家庭の不和には違ひないが、其の動機を促進させるものは、内部より生ずる生理的若くは病的影響である。

そこでこれを我が刑法上に觀るに、新刑法は舊刑法の是非辨別力、即ち是非かを判斷する能力があるや否を以て決定する方法を改め、決意が正則なのや否や、即ち決意能力の如何を以て、犯罪能力を決定するのであるから、従つて婦人の月經異常の如き精神障害の結果、正則に決意を爲すことが出来ないものにあつては、そこに完全なる故意ありと言ふことが出来ない。少くともそれが病理的に、移及された場合は、故意を阻却すべきものと言はねばならない。



假令月經に異常がなくとも、往々にして病的に輸行する者もあり、又恐ろしく精神作用の障碍を來たす者もあるから、かうした場合には、故意を阻却すべきものとして取扱ふべきものである。

少し話が難かしく、多少法律的になるが、月經と心神喪失の状態にある者との關係を少し述べねばならぬ順序になつた。要するに我が刑法では、心神喪失の状態にある者の行爲を不問にしてゐる。それは言ふまでもなく精神の正則を欲き健全を欲いてゐるからである。では精神の健全を缺いた者とは、一體どんな者かと言ふに、これを理論的に説明すると、とても難かしいことになるが、兎に角、文字が示すように、心も精神も失つた者と言ふ意味である。今少し明瞭に言へば強度に精神作用の障碍を受けた者のことで、而かも、此の中には純然なる精神病者と、其他の精神障碍者との三つがある。

精神病者のことは、此の場合必要のないことであるから、其他の精神障碍者の説明に移る。が、しかし、此の種の精神障碍者には、更らに病的のものと、生理的のものとがあり、而かも其の障碍が一時的のものと、永續的のものとがある。例へば月經の如きは、生理的障碍の一時的



月經時中の婦人の嫉妬



なもので、或一定の日時の経過と共に、平常に復するものであるが、妊娠の如きは可なり永続的のものである。しかし、それが心神喪失の状態にあるか否かを判断するには、其の病理的であると、生理的であると、更らに一時的若くは、永続的であるかを區別する必要がないのである。苟しくもそれが、精神障害者として、心も精神も喪失した者であれば、其の者の罪は問はれないことになるのである。

けれども、それか精神作用の一部の障害であつた場合、色情狂の如き、放火狂の如きは一少部分の障害である時は、無論、それは心も精神も共に失つたものと言ふことが出来ない。

處が月經の如きは、無論、生理的のものには違いが無いが、精神作用の障害は、一部のなものではなく、精神全般を冒す處の一時的生理的のものであるから、其の月經中の犯罪に對し故意を阻却すべきものであることを主張するのである。

猶、これを證明する爲めに、何時だつたか正確な記憶はないが、何んでも大正十三年九月頃だつたと記憶してゐる。事件の梗概は、新婚間もなく富豪の憲法とも見るべく、新郎新婦が手を携へ關西方面へ新婚旅行と洒落込んだのは、稍か羨しいが、其の歸途、而かも、一等列車の真中で



(傘枕でしてやつた)は少し脱線だが、兎に角、筆者がこゝで脱線するまでもなく、美しい金びかの正装した、そして、多分に羞恥を含んだ花嫁が、「わがつま様には先づ〜」と言ひそうな程淑かな、静けさで——と言ひたいが、事實はそれと反對に、恰で猫が人眼を盗み着をくわえ出す時のように、勇ましく、全くすばらしく忍びやかに、他人の財物を我が懐中へねぢ込んだと言ふのだから、驚かざるを得ないではないか。而かも、其の花嫁が、東京でも有名な〇〇高等女學校を優等で、卒業した才媛だと言ふではない。

これも單なる出來心だと言ふなら、それまでのことだが。少くとも新婚當時の耻さを以て、かうした大膽なことが出來ようか。如何に物欲しさの餘りとは言へ、窃盜と言ふ忌はしい、破廉耻罪が犯せるものであらうか。更らに此の場合、正則な意思があつたであらうか。

私はかう問ひたくなる。何故かと言ふに、世間ではかうした場合にも尙且單なる出來心として譯けもなく片付けて了ふ。全く出來心とは、何かと更らに問ひたくなる。しかし、かう言ふ私も花嫁が、果して生理的變化があつたか、どうかに付いては、何んの證明も持つてゐないことを残念に思つてゐるのである。

## 五 月經の異常と心神喪失

月經の異常と云ふのは、月經に變調を來たしたものである。そして、其の種類は、月經過多、無月經、月經困難、月經失小等である。が、これ等は總て、精神を甚だしく障碍するものであるから、従つて刑罰との交渉を究める必要がある。言ひ換ふれば、心神喪失者として、刑事無能力者とすべきや否やの問題を解決しなければならないからである。

そこで先づ第一に月經過多のことである。が、これには子宮の炎症から來るものと、腫瘍から來るものと、數ヶ月閉止し、一時に來潮するものがある。何れにしても、急に激しく一時に來る時は、貧血を起す者がある。そして、其の原因は固より同一ではないが、犯罪との關係上考へなければならぬことは、激烈な精神の感動から發する場合である。即ち犯罪の遠因となるべき事項に付いて、精神を過激に勞した爲めに、月經過多を起し、遂に病的となつて、犯罪を爲すが如き場合である。例へば夫が賣春婦の如き女を家に引き入れた爲めに、非常に精神を勞した結果



月經過多を起し、全く病的となつて、人を傷害するが如き場合は、無論、刑事無能力者として、取扱ふべきものである。

次は無月經のことである。即ち無月經とは、月經のあるべき時期に來潮しないものことである。而かも、それには一時性のものと、持続性のものがある。そして、又一時性のものには、生理的のものと、病的のものとがある。其の生理的のものは、妊娠中とか、授乳期中とかに存するものであるが、共に一定の時期を経過すると、再び來潮し得るものである。けれども、病的の無月經になると、不妊の原因となり、諸病を起す因となる許りでなく、精神上に於ても亦、障礙を來たすものである。だから無月經の者にして、犯罪を爲すが如きは、實際に於て少ない。そして、無月經になる原因は、多種多様であるが、法律上注意すべきものは、激烈なる精神の感動に因つて、これを透發する場合である。それは月經過多の場合と同じであるから省略する。

尙持続的無月經は、其の異常最も甚だしいもので、而かも、これには二つの場合がある。其の一つは發情期が過ぎてても、月經の來潮しない。所謂、純粹の無月經である。其の二は一度來潮することはしたが、其の後になつて、再び來潮しないものである。何れの場合でも、無月經の原因

は、多く生殖器の異常から來るのである。最も體質から來るものもないとは云へないが、それは極めて稀れに見るもので、多くの場合は、腔孔の閉鎖とか、狹窄とか、卵巢の缺損とか、乃至は委縮に其の原因を有するものである。

體質から來る場合は、兎に角として、生殖器の異常から來る場合は、ともすると、嘔吐、腰痛、胃病、頭痛、眩暈、悪心等を起し易いのである。だからかかる場合には、病的犯罪として、故意を阻却すべきものである。云ひ換ふれば、病的なるが爲めに、正則な決定能力を持つて居ないから、心神喪失者として、其の責任を免除すべきものである。

それから又、月經困難も一種の病的症狀を發するものであるから、これ又完全な意思ありと云ふことが出来ない。だから心神喪失者として、刑事責任能力を阻却すべきものである。最もこれが軽度のものは、心神喪失の状態にありと見ることが出来ないから、全然その刑を免除する理由にはいかないとしても、殊に子宮病より發する月經困難に至つては、其の經過と共に、却つて疼痛が増したり、下腹部の處が烈しく痛み出したりするので、それが爲めに、全く心神を喪失する場合は、事實に見ても明かである。



これを要するに、以上月經の異常は、生理的の重いもので、而かも、病的に進行した場合が、最も多いのである。これを實際の實状に見るも、婦人犯罪の多くが、月經の異常者であるに因つて其の精神障碍の程度を知ることが出来るであらう。

だのに我が國では、かうした病理的な事情にある者でも、正則な決意を爲し得るものとして、一般的責任を負担せしめて來たのである。が、しかし。これが正當な解釋でないことは言ふまでもない。即ち月經に異常がありや否やの決定は、醫學上の問題でなく法律上の問題であり、而かも、その實質は心神喪失の状態であるか否かを決定することにあるのだ。

## 六 月經の順調と心神耗弱

月經の順調のことを述べる前に、先づ順序として、我が刑法の主義を一言して置かねばならない。即ち我が刑法は、精神病學者の説に従ひ、人の精神状態を正則、耗弱、喪失の三階段に區別し正則とは常人の意味で、普通の状態になる人を言ひ、喪失とは前にも言つたように、精神作用の

健全を全然欠陥せる者、例へば精神病者の如き、又は睡眠中の人の如きを言ひ、耗弱とは正則な普通人と、心神喪失の状態にある者との中間に位ひする精神障碍者を言ふのである。

これを最も解り易く言ふと、心神喪失者とは狂人の如きを言ひ、心神耗弱とは先づ薄馬鹿と言ふ程度の精神障碍者を言ふのである。即ち素馬鹿、薄馬鹿、普通人と言つたような區別である。が、しかし、これは普通一般につかわれてゐる意味でなく、又醫學上の斷定とも一致するものではない。と言ふのは、前にも屢々言つたように、人の精神状態を斷定することが、醫學上の問題でなく、法律上の問題であるから、假令それが精神學者の説を採用したものであつても、法律として公布された以上、法律を以て斷定すべきものである。

では法律上此の三つをどう區別するかと言ふに、無論、普通人のことは解つてゐるが、他の二つに付いては、可なり面倒な問題になる。しかし、これを明かにして置かなければ、月經時の婦人の能力を判斷することが出来ない。殊に月經が順調な場合は、精神上の障碍も少なく、普通人と相ざること遠らずと言つた處であるから、猶更ら確然と區別して置かねばならない。

が、しかし、心神喪失と耗弱との區別が、性質の違いでもなく、又原因の違いでもなく、其の程



度の違ひであるから、何を標準として、これを區別するかと問はれると、誰れでも困つて了ふ問題である。けれども、普通人を標準とし、普通人の精神状態が、假りに十のものとし、而かも、精神作用の全體を障碍してゐる心神喪失者を〇として考へるときは、其の中間にある者が、五であることは言ふまでもない。

かう考へて來ると、以上の區別が自然に出来る譯けである。即ち十の物を五つしか持たない者は、耗弱であり、十の物を全部持つておれば、言ふまでもなく普通人である。

そこで此度は、月經の順調が婦人に及ぼす効果であるが、如何なる場合を以て、月經が順調であると言ひ得るかを先づ明かにして、かゝらねばならない。

兎に角、月經なるものは、一定の日時を經過し定期的に、巡廻されるものであつて、普通は大抵毎月二十八日目に開始さるべきものであるが、しかし、時によると二日も三日も遅れたり、早くなつたりするのは、決して珍らしいことではない。

が、識者の統計を見るに、其の平均日数は、二十七日目乃至二十九日目であつて、其の中で最も多いのが、二十八日目と言ふことになつてゐる。

處がかうして順調に、月經が來潮してゐても尙且つ人によつて、其の疼痛や苦惱する程度が、甚だしく異つてゐる。此のことに就いて、澤田順二郎氏は、次のように三段に區別して説明してゐる。

其の一は極めて軽度なもので、殆ど苦惱を感ずることがないと言ふ程度のもので、此の種のものは、百分の中七七、五を占めてゐる。

其の二は前よりも稍々強度なもので、多少は疼痛を感ずるが、左程大なる苦痛を感じないと言ふ程度のもので、此の種のものは、同じく百分中一二、二を占めてゐる。

其の三は最も疼痛の強烈なもので、殆ど病的の如く苦惱を感ずると言ふ程度のもので、此の種に屬する者は、矢張り百分中一〇、二であると言つてゐる。

此の話は私がまだ大阪にゐた時分のことで、前記松山館の女中で、お勝と云ふ二十七八の俗に狐つきと言はれる間囁的に、時々精神に異常を來たす女のことであるが、當時其の道にかけて、何んの知識も持たない私は、ひどく恐れたものである。と言ふのは、月に一度位必ず發作的に狂人となり、全く狐のように、「コン／＼」と叫びながら、飛び歩くのであつた。最も私が恐れて



るた故でもあらうが、目尻が釣りあがり、口がさげ、狐と寸分間違いのない面に變つて行くのであつた。臆病な私が、其の事實を見てからと言ふものは、平素何んの變化もない時でも、氣味悪く、朝晩膳部を運んで來ることさへ、堪えがたい不安と、不快を感じたものである。

だから私は女將に笑はれながら、そして、彼女には氣の毒ではあつたが、不安と不快の苦痛には替へがたく、遂に彼女の出入を嚴禁したものであつた。

今から當時を顧みると、如何にも小供らしい考へであり、如何にも臆病者であつたかを嘲け笑はずには居られないが、當時の私には耻も外聞もなかつた。突蹉の間に出刃鉈刀でも振り廻しはせぬかと言ふ不安の念で充たされてゐたのである。

處が其の家の主人なり女將なりは、極めて平易なものであつた。氣が狂ひとり止めのないことを口走ると、面白がつてそれを相手にしたものである。

「わしはどこそこの狐だ、一日に六千里驅ける古狐だ」、などと怒鳴り出すのが常だつた。

「六千里も驅けてどこへ行くのだ」と聞くと「天へ昇つて來るのだ」と出鱈目を言ひ出したものだ。

最も大本教で鎮魂歸神の法をかけられると、どんな者でも大抵は、「己れは狐だ己れは狸だ」と言ひ出すが、別に狐の眞似などはしない。處がお勝と言ふ女は、狐の眞似をして飛び歩くと、顔が狐に似て來るのが、全く不思議に思へた。そして、恐ろしくもあつた。しかし、幾ら臆病な男でも、彼女が別に暴行を加へないことを知ると、遂には仲好しになつたのである。

そして、私は氣さくな女將から、意外なことを聞いたのである。それはかうだつた。彼女がかうして發作的狂人になると、定つたように月經があると言ふことだつた。それは私が「どうも面白い病氣ですね」と言つた時、「ほんまんな、けつたいな病氣や」と答へると、速く亭主の方に向き「それに且那はん、お怪しなことがあるんや、あのこが狂人になると、其のあしたは屹度月のもんがおますさかえ、あてほんまにけつたいに思つとるんや」と言つたような順序で話したのだつた。

今日彼女が無事であるかどうかは、無論解らないが、兎に角彼女は和歌山縣下の或山間僻地の貧しい家に生れ、十六七の時前記の病氣にとりつかれた爲め、結婚も出來ず羞かしさの餘り大阪へ下り、松山館に流れ込んだものであつた。それに今一つ不幸なことは彼女がひどく醜い女であ



つたことだ。目が糸を引いたように細く、それに色が黒く痩せてゐるので、氣が狂はない時でも決して、好い感じを與へなかつた。要するに彼女は、どこまでも不幸に生れてゐたのである。

それから又かう言ふ例もあつた。Bと言ふ母親が、月經時になると、何時でも急に精神が一變し愛する我が子を虐待し、ちよつとしたことで、打つ。蹴る。踏む。と言ふ亂暴をする。それを誰れかが止めでもすると、此度は其の者に喰つてかゝる、と言ふ始末だつた。しかし、かう言ふ例は決して少くない。現に私が十年前に、素人下宿をしてゐた家の女將も、矢つ張り此の種の女であつた。

始めの中は別に氣にもかけなかつたが、毎月或一定の時期が來ると、定まつたように夫婦喧嘩が始まる。そして、そう言ふ時には、必ず御馳走がない。と言ふことが、何時の間にか、私の頭に意識され出した。殊更らそう言ふ頭で見るとそれが全く、際立つて酷いのがあり／＼と見えた。これなどはほんのちよつとしたことではあるが、月經の精神作用に及ぼすことの證明には、ふさわしい例であらうと思ふ。最もこんな例は、世間にあり振れてゐるであらう。殊に私のように生活に變化が多かつたものには、これに類似した例を幾つも體驗してゐる。

が、それは一先づ惜くとして、月經の順調に於ける婦人の能力のことを一言して置かねばならない。しかし、此の問題は非常に困難な問題であるから、便宜上前記澤田氏の説に従ひ、軽度、中間、強度の三段階に區別し、各精神障害の程度を明にし、刑法上の犯罪能力との關係に論及することにする。

そこで先づ月經は順調だが、極めて強度の疼痛と、苦惱とを感ずる婦人のことであるが、此の種の者は前にも言つたように、月經時若くは其の前後になると、殆ど病人の如く昂奮し苦惱を感ずるものであるから、従つて其の精神の障害も可なり強烈なものがある。少くとも此の場合、我が刑法上から見て減弱者と言はねばならない。

殊に月經が知覺及び運動神経を冒す處の生理的作用であるとすれば、これが減弱者であることは、多言を要しない事實である。言ひ換ふれば、月經の順調者であつて、而かも、其の極度な苦痛を感じ、神経系統の障害を醸す場合は、心神耗弱者と見なければならぬ。そして、其の刑は常に減輕すべきものである。

處が其の苦痛が軽度であり、精神障害の程度が輕微である場合は、これを以て直ちに、減輕の



事由とすることは、無論出来ないことである。

が、しかし、苟しくも神経系統を冒してゐる以上、それが心神耗弱者であり、常に減輕の事由たることは言ふまでもない。

尙強度と軽度の間位に位するものにあつても、これが總て心神耗弱者であり、常に減輕すべきものであるとは言へないが、少くとも其の大部分が、精神の障害者であり、心神耗弱者であることは、多くの學者の實驗報告によつても明かなことである。

終りに臨み月經を齎らす原因のことを簡単に一言して置かう。

即ち月經を齎らす處の生理作用は、胚種腺の内分泌であるが、此のことは前にも述べた處であるが、何れにしても極く最近の發見であるが、今日では充分に研究も行き届いてゐる。即ち専門家の言ふ處によると、一種の刺激性を有する化學的色素とも言ひ(又はホルモンとも言ふ)を直接に、血液内に移送し、脊髓や、腦に於ける神経細胞を刺激し、そして、身體の新陳代謝を迅速ならしめ、猶且つ其の反射作用として、性慾の衝動を起させることになるのである。そして、そこに月經と言ふものが、生ずることになるのである。言ひ換ふれば、身體の各部例へば甲状腺に存するスベ

ルミン(ホルモンのこと)なる化學的要素が、或一定の年齢に達すると急速度に増加し、而かも、それが自己専用の道腺の代りに、血液内に泌み出し、その血液の遁かへと共に、身體全部に遁かへし、勃起中枢や、射精中枢を刺激して廻るので、殊に婦人は其の生殖器能の成熟と共に、月經が來潮するに至るのである。そして、其の結果が精神作用の障礙を來たすことになるので、殊に月經初潮期の處女の如きは、往々にして錯亂し恐るべき犯罪を行ふことになるのである。

## 七 月經前後の犯罪

婦人の犯罪の多くが、月經時若くは其の前後であることは、前項で詳説した處であるが、殊に不思議なことには、月經時よりも其の前後が、最も多く、而かも、其の種類としては、竊盜、詐欺、放火、傷害、嬰兒殺し等である。

以上の中で最も多いのが、矢張り竊盜の中の萬引である。全く竊盜と月經とは、極めて密接な關係にあり、而かも、生理的犯罪として、最も顯著なものである。



我が國の婦人犯罪には、全く奇抜なものが少ないが、西洋婦人の犯罪には、可なり變態的な、奇抜なものがある。殊に窃盜として、面白いと思つたのは、月經後三日目の婦人が、殆ど軒を比べ家毎に、男の猿股を盗んで通つた事件である。即ち男の猿股と云ふ處に、そして、それが犯人の寢室の押入れに、無量何百枚と言ふ恐ろしい數が、無雜作に積み重ねてあつたと言ふことが、如何にも珍らしいことである。が、しかし、男のかうした犯罪は、決して少なくない。

これは私の友人某警部補の話であるが、彼が實際體驗した婦人犯罪の多くが、月經前後であつたこと、殊に其の中の萬引に就いて、参考になることを細々と話して呉れたことがあつた。其の話の中で特に不思議に思つたのは、極く細民の婦人犯罪が少ないこと、嫁入り前後の婦人が多いこと、(例へば嫁入り仕度をする爲めの犯罪とか、嫁入後虚榮心を満足させる爲めの犯罪とか最も多いことであつた) 更らに意外に思つたのは、無智な女よりも却つて、多少教育のある婦人に多いこと、勞働する者よりも、勞働しない中産階級以上の婦人が多いこと等であつた。これを年齢階級並に職業別にすると、

(一) 十七歳乃至二十五歳までの婦人(十八人)

▽其の中夫人(五人)

▽其の中娘(二十人)

(二) 以上娘二十人を階級並に職業別にすると

▽中産階級以上のもの(八人)

▽中産階級以下のもの(五人)

▽看護婦見習(一人)

▽カフェエーの女給(二人)

▽女工(三人)

▽女中(商店の雇人)(一人)

最もこれは正確な統計ではない。と言ふのは或一定の期間を限つて作つたものでなく、彼が長い月日の間、取扱つたと言ふ婦人犯罪の覺書きに過ぎないからである。しかし、彼は此の二十人の婦人に就いて、月經並に産標等の生理的方面を詳細に調べてゐる。これによると、

▽月經時であつたと言ふ婦人(四人)



▽月経前後五日間までの婦人(五人)

▽産後一ヶ月と言ふ婦人(二人)

▽病後であつたと言ふ婦人(一人)

▽何等關係のない婦人(六人)

▽不詳二人であつた。

以上によつて見るも如何に、月経前後が危険であるかを知ることが出来る。殊に某氏の統計を見るに、五十六人中四十人までが月経に關したものであり、而かも、其の前後の者が、十一人であることを統計によつて示してゐる。

尙婦人の萬引に就いて、其の犯人が無産階級の者に少なく、却つて中産階級以上の生活の、不自由のない婦人が多いことも大いに、考究すべきことである。殊に無智な女よりも教育ある女が、多いと言ふに至つては、全く意外な現象である。最もこれは土地が山の手であり、而かも、二十五歳までの婦人に就いての調べであるから、これを以て一般を推斷することは、無論出来ぬことではあるが、それにしても月経等は、健康と甚だしく關係し、不健康なものに、其の異状

が多く、健康な者は従つて、精神に及ぼす障碍も少いことになるから、若し犯罪が月経時其の他に於て、多く犯されるものとすれば、其の當然の結果、中産階級以上の不健康な女に多いと言ふ事も出来るであらう。

これは少し餘談に涉るが、私が生れた國は丹波の山奥で、殊に烈しい山間僻地である關係上、私が小供時代には、月経時の婦人を汚れた者とし神詣は無論のこと、神の祀つてゐる室へも這入ることが禁ぜられ、而かも、家族と一緒に、一緒に飯を食ふことが、固く禁じられてゐたので、月経時の女は、庭の隅つこで別に飯を炊いて、一人でもまづ食つたものであつた。

かうして別に炊いた飯を一人で、別に食つてゐても、尙且つ其の家族は、月経中神詣りが出来なかつたものである。

かうしたことが、今日になれば、滑稽に過ぎなくなるが、當時の婦人がこれによつて、どんなに不快を感じたことであらう。如何に性に對し無智とは言へ、餘りと言へば餘りな暴舉である。

これは特に甚だしい例であるが、しかし、まだ地方に行くと、月経時に於ける衛生が、餘りにも無視されてゐる。就中月経時だと言ふに、水仕事をしたり、産後間もないに、田植えしたりす



る例は、決して珍らしいことではない。

それは兎に角として、新聞で報導されてゐる婦人犯罪中、月経時若くは其の前後であると思はれるものは、決して少なくないが、生憎其の事柄を明かにしてゐないので、確にかうだとは、無論、言ひ切れないが、假にそれらしいものを掲げると。

十三日午後九時深川扇橋署に四十歳位ひの女が飛び込んで来て自分の子供を半殺しにされたと訴へ出た。右は同區富川町三一木賃宿第五朝日館止宿竹川時(假名)と言ひ、去る十二日午後五時半頃同人子供さみ(假名)四歳が同宿女土工鈴木さる(假名)四十六歳の握り飯を造つてゐるのを見てほしがつたのを鈴木が母親に言ひつけたことから女同志のけんかとなり女土工の鈴木がとみを引抱へ道路に投げつけ人事不省に陥らせたので兩人引致取調へ中。

これは全く女土工らしい犯罪で、よく女の個性が出てゐるのと、そして、彼等の生活の半面もよく窺はれる。全く美しい聲でエンヤラヤンの調子を合せ、荒くれ男も及ばぬ程の力で、綱引きをやつてゐる女としては、かうした暴舉をやり兼ねない。今一つの例も矢張り、荒くれ男を事程にも思はずえ、一の魅力で、自由自在にする娼婦の暴舉である。

大阪西區新町南通り三丁目、貸座敷米倉とら方の抱へ娼妓熊本熊生れ甲斐まさ(假名)二十四歳は二十八日午前九時頃中河内郡布施町東足代鈴木春雄(假名)三十五歳方へ出刃ぼうちようを持つて乗り込み、就寢中の春雄の喉に斬りつけ重傷を負はせ、止めんとした田中某外二名の手足數ヶ所に重軽傷を負はせ逃走せんとした處を所轄署員に捕はれた、原因は春雄とまさは本年五月頃より夫婦約束までしたのに最近春雄が別れ話を持ち出したので無理心中を企てたものである。

これなども確かに、生理的犯罪と見ることが出来る。少なくとも此の犯罪が月経と没交渉であると言ふことは、無論、出来ないことである。

殊に此の犯罪が境遇を背景にしてゐることは、言ふまでもないが、此の境遇が犯罪に對し、如何なる影響を與へてゐるかの問題は、「心理扁」で詳説することとし、こゝでは只だ性の自由を奪れた女の氣持ちを一言し、犯罪との關係を少しく述べて置かう。

一體性の自由とは何かと言ふに、今日の社會から言へば一定の男と一定の女との正則な交接をなし得る自由と言はねばならない。即ち好いた同志の男女の結合が、性の自由を達したものであることは、言ふまでもないが、それ以外のものは、總て自由を奪はれた者であるか否かに對して



は、見方により多少差異するであらうが、少くとも法律上では、正則な一定の男女の結合であれば、性の自由を得たものと言はねばならない。

處が性の自由を剝奪された者には、積極的のものと、消極的のものと二種がある。積極的のものは、公娼、私娼の如きで、消極的のものは、獨身を強ひられた婦人の如きであるが、これ等は共に、變態的のもので、而かも、かうした變態が多く犯罪の原因となることがある。

以上積極消極を問はず、性の自由を奪はれた者の犯罪の最も多いのは、何んと言つても失戀より生ずる傷害、殺人、放火、誣告、偽證と言ふ順序である。が、しかし、それよりも一番多いのが失戀の結果淫賣婦となる者である。

次は月經前後に於ける自殺のことであるが、これに就いて、スタイナツハ氏は、極めて詳細な研究を遂げ、其の結果婦人の自殺と月經とは、殆ど同一のものゝように、自殺即ち月經と言つた如く、兩者は離るべからざる關係を有してゐると主張し、百人の自殺者の中、月經に直接、間接關係を得持たないものは、只だの一人としてなかつたと言つてゐる。

今私がこゝで多くを言ふまでもなく、婦人の自殺が、月經に起因してゐることは、スタイナツ

ハ氏の實驗報告によつて、總てが言ひ盡されてゐる筈であるから、こゝでは其の前後に於ける自殺者のことを一言して置かう。

即ち月經に異状のある者は、勿論、假令異常がなくとも月經に就いて、ひどく疼痛を覺へる者は、月經中よりも却つて、其の前後が激烈に精神作用の障礙を受けるものである。殊に月經前は神経中最も大切な知覺神経と、運動神経を冒されるので、初潮期の少女などは、往々にして狂的の如くなるものである。初潮期の者でなくとも、來潮前はひどく神経が過敏になり、昂奮状態に這入るのが常である。だから若し此の時、重大なる外界の刺激があると、殆ど無意識の中に自殺を企てることになるのである。

尙それらしい新聞記事の一二を示すと、

十二日午後七時半頃府下戸越魚商川村三吉(假名)長女たけ(假名)十七歳は自宅で猫イラスを服用して自殺を企てたのを家人が発見、附近の病院で手當中であるが生命危篤、原因失戀の結果らしい。

これなどは言ふまでもなく生理的影響の結果である。最も新聞には失戀らしいことがほのめかしてあるが、假に失戀としても、これが生理的影響を受けてゐることは、斷言しても決してはゞ



からない。

十五日午後三時頃本所向島須崎町二二九建具職日野清吉(假名)内縁の妻井上しげ(假名)二十二歳は自宅二階六疊の間で猫イラズを飲んで自殺を企て生命危篤、原因は姑の虐待を恨らんで。

この例などは世間にあり振れたもので、女らしい復讐であるが、それにしても此の種の自殺は必ず生理的な影響を受けてゐるものである。と言ふのは、感情的自殺であるからだ。

二十一日午後四時二十分山手線新大久保高田馬場間を上野行電車三二九が進行中、左側から女が飛び込み右脚轢断されて重傷を負ひ生命危篤、身元は戸塚町魚商野口春吉(假名)妻こゝ(假名)三十歳で前夜小児の病氣のこゝから夫婦喧嘩をして自殺を計つたものであつた。

これが感情的自殺であり、生理的影響の結果であることは、多く疑ひを要しない事實である。何故感情的自殺が、月經其の他の生理的作用と、密接な關係を持つかと言ふに、それは月經其の他の生理作用が、感情を興奮させるべく、餘りに可能なるが爲めである。言ひ換ふれば、感情的婦人をして、益々興奮させるべく大自然が造つてゐるからである。

## 八 月經閉止期の犯罪

スタイナーハ氏其の他多くの性慾學者の説によると、一般動物が若さを維持し勢力を保存し得る源は、一つに生殖線の内分泌であると言つてゐるが、若しそうであつたとすれば、婦人の月經閉鎖期は、其の限界の別るゝ處であつて、所謂若さと勢力とを失ふことになるのである。

それは何故かと言ふに、婦人は男子と異ひ生殖期に、嚴然たる限界があり、而かも、其の限界である月經閉止後は、全く生殖能力を失ふからである。そして、其の月經閉止期は、人によつて年齢を異にするが、大抵は四十歳乃至五十歳の範圍である。最も極く早い者は、三十七八歳で閉止する者もあれば、又稀れには五十四五歳まで閉止しない者もある。が、要するにこれ等は、人種氣候、又は生活状態若くは、其の人の體質、健康等によるものである。しかし、我が國に於ては平均年齢が四十七歳弱となつてゐる。

兎に角、月經閉止期のことを更年期と言つてゐる位ひであるから、これによつて見るも、如何

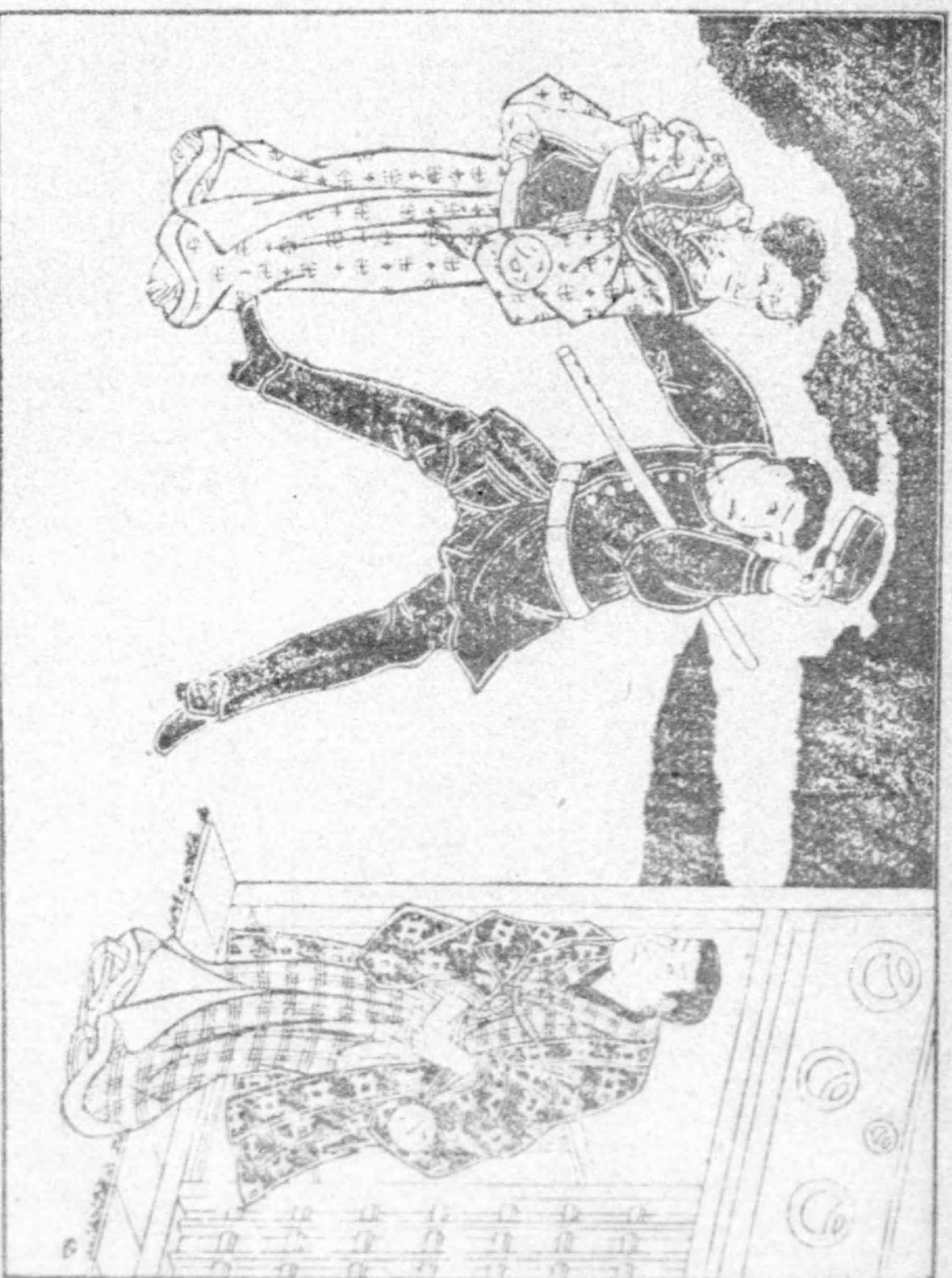


に身體並に精神に變化を來たすかを知ることが出来る。

結局、女は發情期と月經閉止期との二回更年期が廻つてくる譯である。發情期に於ける月經の生ずる理由は、既に述べた處であるが、閉止期に於ける更年期は、それと全く反對に、生殖腺たる卵巢が、著しく萎縮し退化して行くのである。が、しかし、其の閉止期に於ける病狀は、人によつて異つてゐるのが一般である。けれども、其の多くは、突然急激に閉止するものではない。時に缺けて見たり、又數ヶ月引續いて無かつたり、乃至は又數ヶ月後にあつて見たりするのが原則である。そして、其の症狀は月經變調の場合と、同じような症狀を呈し、遂に閉止するのであるが、其の期に這入ると、大抵な者が時々腰痛を起したり、頭痛を感じたり、更らに精神方面には非常に憂鬱になつたり、極度に過敏になつたりする。

つまり初潮期にあつて、生理的に、乃至は又心理的にさまざまな變化を齎らすのと同じように閉止期も亦これに伴ふ變化が生ずるのである。

そして、其の結果、此の時期に於て、罪を犯すが如き例は決して少なくない。それは生理的の變化に伴ふ精神障礙の結果であつて、犯罪の種類は、名譽毀損、侮辱、虐待、竊盜等である。



月經閉止後の鬼塚連捕

明治初年に於ける島田十郎一落し事件



これは今から三十年も昔、私の故郷にあつた事件の一つで、Kと言ふ五十四歳の女が、或晩親叔の家に忍び入り、五十餘圓を窃取したのであつた。

處が何ん等の物的證據がないので、それと解つてはゐるものゝ、はつきりそれだと言ふことも出来ないで、親叔の者が集つて評議した結果、村の評議にかけることにしたのであつた。

そこで村の者が全部一定の場所に集合し、色々と談じた後、村の者の中には犯人と親叔もあることだから、これは須らく無記名投票で、犯人を指名するに駈ると言ふことに協議が一決し、直ちに投票を行つたのであつた。

處が不思議なことは、Kと言ふ女が、大多数で當選したのであつた。最もKが當選する理由があつた。それはKが年若い時分、ちよい／＼窃盜をやつたことがあつたからだ。しかしそれは既に二十年近くも経過してゐることでもあるし、又親叔のことでもあるから、全くそんな管はなかつた。しかし、物固い田舎の人は、一度あつたことは、假令二十年が三十年になつても感心に記憶してゐる。そして、其の記憶が村の人達によつて、總て呼び起され目指す者は、Kなりと言ふ結論に到着したのであつた。

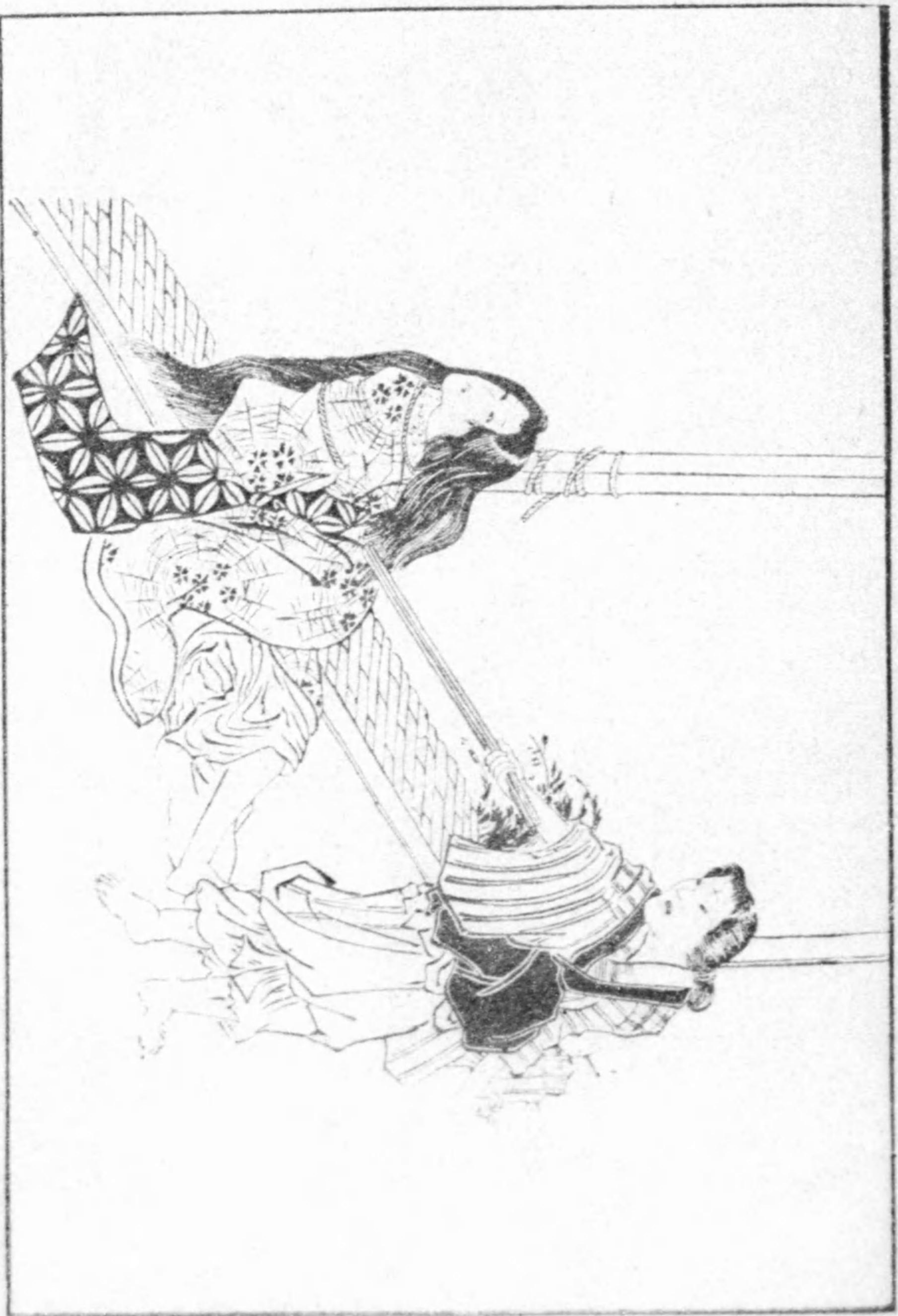


そこで先づKを呼び出し村の重立つた人によつて、座談的に質問を始めたが、女はどうしても事實を白状しなかつた。其の代り次のようなことを言つた。

「私はそんな所ぢやない、此の間から腰痛こしけがして頭が痛くて、お負けにいら／＼して困つてるんです。全く病人のようになつてゐるたんですもの、そんなことがどうしてあるもんですか」と辯々と言ひ切つた。そして、村の人がかわる／＼色々なことを訊いても其の都度きつぱりと答へた心ある者が婦人道徳論や、刑罰論などを説いて聞かせても矢つ張り、女はけろんとして、何物も無關心のようだつた。だから其の集りは、結局、お流がれとなつたが、しかし、其の翌日になると、被害者の門前に、被害金額すつくり落ちてゐると言ふことであつたが、何に分にも三十年の昔のことでもあり、私の生地から多少離れた部落でもありするので、詳細なことは解らないが、兎に角、以上のような筋であつた。

かうした例は幾らもあるであらうが、生憎今の處適當な例の持ち合せがないので、これだけにして置くが、月経閉止期は性的慾望から離れる時であるから、従つて性的犯罪を起すようなことは、先づないとして、其の代り羞耻心に缺け、頑固になり、一酷になり、貪慾になる結果、當然物

月経閉止期に於ける物的犯罪の例





質犯罪が多くなり、人を侮辱するようなことになるのである。

### 九 妊娠中の犯罪

妊娠中の犯罪も亦、生理的犯罪の一つで、月経時の犯罪と共に、婦人犯罪中、最多数を占むるものである。これに對する某氏の統計を見るに、百人中六十人強が妊娠中の犯罪であることを證明してゐる。

斯くの如く妊娠中の犯罪が多いと言ふのは、其の婦人の生理的並に心理的に多大なる障害を受けるからである。即ち婦人が妊娠すると、先づ生理的に消化器、呼吸器、血行器、泌尿器などに障害を起し、心理的には、精神系統に障害を起す結果に外ならない。そして、その結果が齎す處は、婦人をして非常な不快と不安を感じじめ、又時としては恐ろしく陰鬱に落ち入らしめることになるのである。

單に精神系統の障害と言つても萬人必ずしも同一症状を期たすものとは限らないが、しかし、大



體に於て一致する處のものは、著しく神経が過敏になること、嗜好に變化を來たすこと、時として嘔吐を催すことなどである。

處が其の症状の殊に甚だしい者になると、嗜好に變化を來たす結果、青梅を欲し、生米を嚼み糸を丸めて食するなど、殆ど狂的の如くなる者もあり、又時としては、神経病を起すことがあり、其の症状は、頭痛、腰痛、齒痛、關節痛、胸痛などさまざまの苦痛を起すことがある。が、これ等は要するに、血液の循環に關係を有するものであるから、一定の期間を経過すると、元に復するものである。

鬼に角、フィツシャー氏は、此のことに就いて、次のような斷定を下だしてゐる。

可なり健康な婦人でも、妊娠すると必ず多少なり精神に障礙を來たし、所謂妊娠的異常を呈するものであつて、殊に感情は著しく變化し、而かも、これと同時に感覺、知覺、判斷等の障礙を受けるものであると。

では妊娠中の婦人が犯す罪は、多くの種類のものかと言ふに、これに關しても亦、其の説く處必ずしも同一ではないが、假に澤田氏の説によると、

即ち妊娠中、精神障礙の發作は、通常妊娠五ヶ月、又は六ヶ月内であつて、其の最も多いのは、發情期に於ける犯罪と同じように、偽證、誣告、窃盜等、で殊に著しいのが萬引であると言ひ、又殺人等の如き犯罪も少くないと附け加へてゐる。——  
私は嘗つて次のような事件を見た。

それは私が學生時代、私の下宿から程遠くない或中産階級の而かも、夫は所謂インテルゲンチヤであつた。其の夫某氏を私の友人がよく知つてゐたので、私も其の人は二三度見たことがあつた。同時に妻君且子も知るに至つた。且子はまだ二二歳であつたが、決して美人ではなかつた。肉感的にブク／＼太り、而かも、妊娠六七ヶ月であつたらう。可なり大きな腹を重た氣に抱えながら、よち／＼とお湯などへ行くのをちよい／＼見受けることがあつた。

それから間もないことであつた。私は友人から意外なことを聞いた。それは且子がすぐ附近の小つほけな呉服店で、碌でもない反物を萬引したと言ふことであつた。

處がそれは事實であつたと見え、其の話を聞いてから間もなく且子等は、郡部の方へ引越して丁つた。



かうした例は、決して少なくない。が、其の中でも回春堂病院長、今は故人であるが、山尾清實氏の話の中には可なり奇抜なものがあった。

例へば臨月に近い腹をして、他の患者の所持品を掻つ拂つたとか妊娠六ヶ月の身重でありながら、男に捨てられた忌々しさの爲め鋭利な鋏で、男に斬りつけたが、力が及ばず却つて、男の爲めに傷を負はされたと言ふような、皮肉な事件を幾つも聞かされた、が、何に分にも古い話であるから、詳細なことの記憶が残つてゐない。

此の種の犯罪で、外國には随分變つたものがあるが、我が國では何んと言つても、まだ婦人の智能が、殊に幼稚であるから、従つて其の個性の現はれとも見るべき犯罪も亦幼稚で、簡単な感情的犯罪に過ぎない。

それは新聞の三面記事によつても明かなことで、嘗つて朝日新聞で報導されてゐた貴婦人の萬引の如きも亦、此の種の犯罪を證明するものであつた。

そこで此度は妊娠中の犯罪能力のことであるが、要するに此の問題は、妊娠中の婦人が生理的並に精神的に、病狀を呈してゐるか否かの問題によつて、それが心神喪失の状態にあるか、又は

心神耗弱の状態にあるか、若しくは、正則な決定をなし得る者かの區別が生ずることになるのである。

處が或一派の學者は、此の場合の精神障碍の程度を明かにする爲め、一を生理的變化による病的異嗜とし、二を精神病の一症狀としての異嗜とに區別し、而かも、此の何れかの異嗜にある者は、病的行爲の原因となるものであるから、法律上所謂、心神喪失の状態にある者と言はねばならない。言ひ換ふれば、生理的若くは精神的病狀の何れかに存する者であるから、これ等の者は、法律上無責任であると主張するものである。

處が以上の異嗜が證明されなくとも尙且つこれを以て、犯罪性惡意による行爲ありと斷言することが出来ないと言ふのであるが、これ等のことは、餘りに専門的になるので暫らく措くとしても、要するに生理的にしろ、精神的にしろ、苟しくもそれが病的に、移行された事實が證明される以上はこれを以て刑事無責任と言はねばならない。

例へば普通人が三十九度の熱病を以て、それを直ちに心神喪失の状態にある者と言ふことは、無論、出来なことが、しかし、それが病的であつて、而かも、猶ほ外界の刺戟があり、正に、四十



度の熱病に進行すると言ふ程度にあれば、それは刑事無責任者と言はねばならぬ。と言ふのは、四十度の熱病は、醫學上若くは法律上から見て、心神喪失と言ふことが明かであるからだ。少くとも妊娠中の犯罪は、これを生理的犯罪として、其の刑を常に減輕すべきものである。何故なれば妊娠中の婦女は、生理的並に精神上の障害者であり、而かも、精神病學上其の決定が正則なものでなく、犯罪悪意を有するものでないからだ。そして、それは法律上當然心神耗弱としての條件を具備するものである。

尙妊娠と自殺とは、極めて關係深きもので、それは丁度犯罪と妊娠との關係のようなものである。これに就いての實例の持ち合せは、可なり少なくないが、餘りにありふれたことであり、而かも、新聞の切抜であるから、例示することを止め直ちに次項に移ることにする。

## 一〇 産褥の犯罪

生理的の犯罪として、産褥の犯罪も亦、其の顯著なものがある。これに就いて某氏の統計を見

るに、百人中三十九人までが産褥の犯罪である。

斯くの如く産褥の犯罪が多いのは、言ふまでもなく生理的に、心理的に障害を齎らすことが多いからである。即ち生理的の障害としては、多量の出血の爲めに、營養不良となり、而かも、時に發熱を起し遂には、新陳代謝の機能を障碍することになるのである。言ひ換ふれば、多量の出血の結果は、内分泌の機能障碍となり、睡眠不足を助長し、而かも烈しい身體の疲勞を感じるようになるのである。

殊に初産のものにあつては、一層それが烈しく、一層疲勞の度を感じるのが常である。が、しかし、經産の者でも殊に遺傳性の者になると、其の苦痛、其の疲勞が決して。初産の者に劣らないものがある。

心理的には感情が恐ろしく興奮しちよつとしたことにもひどく驚き、且つ悲しむものである。だから専門家は、産褥精神病なる名を附け其の病的精神なることを明かにしてゐる。

これに關し澤田氏は、次のような例を揚げ精神障碍の強烈なることを證明してゐる。  
事件の大體はかうである。



夫は商人であつて、所謂、中産階級に属する身分と財産を有し、生活に就いては、言ふまでもなく、何んの不自由もなく、而かも、家庭は極めて圓滿で、夫婦の愛情も睦まじく、子供の生れるのを指折り數へて持つてゐたのであつた。

聽て月滿ち産の紐を解くに及んで、遂に嬰兒は産婆が來ない以前に、生れて了つたのであつた。が、どうしたものか、其の嬰兒は生れると間もなく死んで了つたのである、それから間もなく産婆がやつて來たが、どうも嬰兒の様子が變つてゐるので、先づ産婆はこれを怪しんだ。そして、其のことを専門醫に話し、診斷を求めたものであつた。

處がそれは産婆が怪んだように、他殺であることが明瞭になつたので、主治醫は早速その由を届出でたのであつた。そこで嬰兒の死體は解剖に附せられることになつたのである。

そして、その解剖の結果は意外にも他殺と言ふことが、確實に證明されたので、先づ最初の發見者としての産婆が調べられた。次に夫が、しかし、それ等の取調べでは、何等手がかりを得ることが出来なかつた。と言ふのは、夫も産婆も事件終了後の結果を見たに過ぎなかつたからである。そこで此度は、取り調べを他に向け、外部との關係を調べて見たが、一向に手がかりがなかつた。

つた。

處が不思議なことは、其の犯人が子供の出来るのを指折り數へてゐた産婦の所爲と言ふことが解つたのである。そして、其の産婦の申立によると、

「妾はどうして又、そんな恐ろしいことをしたのでせうか。子供が欲しくて堪らないのに、本當に妾、何が何んだか譯けが解りません。何んでも最初烈しい陣痛を覺えましたので、分娩が近づいたのだと思ひました。そして、其の苦痛を忍んで産婆の來るのを待つてゐました。が、却々産婆は參りませんでした。そして、苦んで居る中に、間もなく子供が出來たように思ひます。

でも其の瞬間、妾は全く夢中でしたので何をしたらか、何が何んだかさっぱり解りませんでした。が、産婆が來て子供が死んでゐることを申しましたので始めて知つたような譯で御座います。本當に妾何を訊かれても其の時のことは解りません」と申立てたのであつた。

これが無意識狀態の所爲であることは、多く言ふまでもないことだ、が、それにしても此の事件は、餘りに憐れつほい事件ではないか。

それから今一つかう言ふ事件があつた。



Aと言ふ看護婦が、Bと言ふ學生と知り合つたのが、そも／＼の始りであつた。清い交際をと男に言はれる儘に、AはBと交際を続け、時には男の下宿を訪ねることがあつた。丁度三回目のことだつた男を下宿に訪ねると、『獨身者へのこのお守で泣き面』と言ふ處であつたらう。まだ床の中で新聞を見てゐたので遁がにAも躊躇した。そして、耳朶がカツトほてるのを意識した。

男はむつくり起きあがり、蒲團の上に、大あぐらを掻いて、厭にニヤ／＼笑つて居た。Aは其の突躍の間に、サツト厭氣がさし歸らうかとも思つたが、惚れてゐると言ふ弱味が、彼女を躊躇させた。そんな失禮なことは出来ないなどと、如何にも愁傷らしい心が、善良な處女の上に結びつけられた。と言ふよりは、其の次に來る男のそうしただらしない姿が、聽て烈しい情慾をそよることゝなつたのである。

が、しかし、『寝た振りて手を落とすへのこの上』とまで度胸がないので、入口の處で小さくなつてゐた。

男は幾度も傍へ寄れと言つたが、彼女は身動きもせず伏眼で、男のあだつほい寝衣き姿を睨んでゐた。それは全く何かの慾望に燃えてゐる微かな燈に近いものだつた。

聽て男の顔は、或る表示しがたい緊張味に變つた。と思ふとそれが忽ちの中に、『御馳走させろとへのこを見せる奴』すつくり變つて行つた。そして、其の結果が太々しい腕で、すんなりとした彼女の撫で肩が、憐れな程ぎこちなく握られた。彼女はひどく慄えたが、しかし、聲も立て得ず又反抗もし得えずされる儘に、好きな男の暴舉に任かせて置いた。要するに彼女の血潮の高鳴りが、そうさせろと言つたのであらう。

全く『獨身者へのこの始末で際見する』ことも『一人で二人分寝る獨身者』

が右にも左にも障子二重を置いた向ふ側にもうぢやく／＼居ることも、全く無關心なように男は女に、きつく迫つて行つた。そうだ、彼女は遂に男の暴力によつて、處女の持つ生理的要素を蹂み躪られたのであつた。

それから間もなくAは、恥かしい下宿屋から遁れ出たが、もう其の時は、『女房の水あけ御亭主出來ず』と言ふ處女の不具者になつてゐることをはつきりと意識してゐた。

それから病みつきで、幾度か密會したのであつた。が、しかし、神はかうした不自然な男女關係を何時までも許しては呉れなかつた。最も二人の間には、假令それが民法の言ふ虚偽の意思表示



示であつたにしろ、末は共々白毛が生へるまでもと、お互ひが想つたことは、事實だが「させろ  
うな奴で看護婦好きになり」は、餘りに悲しい出来事だつた。

と言ふのは、彼女が男に會つた時恥かしい思ひをして、漸くのこと妊娠何ヶ月かになつてゐる  
ことを告知したのであつた。

處が男の顔は、急に曇り、それと同時に、手の平らでも返へすように、全くすけなくなつたの  
であつた。しかし、彼女はそれでも男を信用してゐたが、間もなく信用するにも信じ切れない一  
つの事件が突如としてやつて來た。

それは彼女が臨月眞際のことと、而かも、せつなそうな大きな腹を抱へて、男の下宿を訪ふた  
處、男は四五日前に何れにか轉居したと言ふことだつた。

そこで彼女は、羞かしさも恐ろしさも忘れ、男の學校や友人達に聞いて見たが、一向に手が、  
りがつかず、まご／＼してゐる中に、とう／＼太鼓腹が破裂して了つたのであつた。が、しかし、  
それは丁度「玉の井と言ふは何かを呉れる處」と言つたように、男から貰つたものは、全く始  
末に困つた。

彼女は泣いた。憤つても見た。更らに恨んでも見たが、幾ら泣いても、憤つても恨らみ切れな  
いのは「獨身者女郎買ひに間男に」と言つたような、男の薄情さをどうすることも出来なかつた。  
殊に安々と生れた嬰兒を見ると、胸がワク／＼と唸り出した。そして、づきん／＼と、微かな音  
を立てながら逆上する血潮の爲めすつかり動亂して了つた。

最も東京には多少知り合ひもあるし、殊に姉が相當な生活をしてゐるので、それ等を頼つて行  
くことは出来ない相談ではなかつたが、十九の若さで罪の子を抱え姉や知り合ひに泣きつくこと  
は、餘りにも悲しい残酷さであつた。

それかと言つて彼女には、生活資力がすつかり盡き明日のことは、言ふまでもなく現在の口腔  
さへもぬらして行くことが出来ないまでに、差し迫つて居たのであつた。

全く彼女は男と言ふ男が呪はしく、人の社會が憎らしかつた。殊に此の先き罪の子を抱え、ど  
う活らして行かうかなど考へると、胸が心臟が今にもはち切れはせぬかと疑はれた。そして、男  
の解らない子供と共に活き永らへて行くことが、無情な世の中の人達は、どんなに罵り嘲けるこ  
とだらう。いや、生きて行きたくも活きて居られない現在の爲めに、すつかり病的症狀を呈する



に至つたのである。

それなのに嬰兒は、時ならず泣き下の家主から、五月蠅がられるのだつた。「えッ、此の兒が」  
と思つた時は、全くの精神病者だつた。だからどうして、どう言ふ方法で嬰兒を殺したのか、  
更らに記憶がなかつたと言ふのである。

ちよつとで断つて置きたいのは、以上川柳らしいものを時々援用したが、これは筆者の戯らで、さて  
も川柳などの名の附くものではない。と言ふのは其の道にかけては全くの素人で、川柳がどんなものか  
も辨へない者の戯らであるから、(川柳の成立要件たる滑稽と、諷刺との何れをも缺いてゐることであらう)  
どうか其の邊の所、前以て御諒解上御笑覧を願いたいものである。けれども、これなどは多少穿つては  
やしないかと、嘗つて川柳らしい本さへ見たことのない者としては。

▽運動好きで娘が痛がらず。

▽傾城買ひに袋持つモダンガール。

▽部屋を飾る娘夜道怖れず。

▽張形は見るも厭だと感び見る。

▽十六娘におむつの御用心。

と先づ自惚れて見るのだが、皆目川柳らしい感じがしないのには、聊か落膽せざるを得ない。

(大膽不敵の一節)

これなどはほんの一例に過ぎないが、かうした女性の犯罪に對し、尙且つ男が無關心と言ふの  
は、餘りにも不公平と言はねばならない。假令女に重大な過失があつたとしても、其の罪の一部  
は慥かに男にある。少くとも結果に對する遠因が、男にあることは言ふまでもない。

兎に角、我が刑法との關係並に私生子とすることを、尙一項を設け詳説することにする。

## 一一 産褥の私生子と嬰兒殺

産褥に於ける嬰兒殺しと、刑罰との關係を見るに先きだち先づ我が刑法の規定に就いて、一言  
する必要がある。

そこで我が刑法の規定であるが、一般普通の殺人罪が、極く重い處で死刑、最も軽い處が三年



の懲役であることは、既に述べた處である。そして、三年の懲役も尙且つ酷に失する場合があることも一言して置いた筈である。

處が實際の實例を擧げて、説明して來ると今一度これを繰り返さねば、どうも承知が出来なくなつたのである。と言ふのは、前記某看護婦の私生子殺しの如き悲惨極まる者を見ると、私はとても黙視が出来なくなつたのである。

何故なれば、無智な、憐れな、そして、食ふべきことも出来ない弱々しい女に對し、どんなに裁判官が同情して呉れても、殺人といふ結果に對する刑罰は、絶対に二年以下に下すことが出来ないのである。(即ち殺人罪としての最も軽いものが、三年の刑であるが、しかし、裁判官はこれに對し酌量減輕をなすことが出来るが、それは科刑の三分の一に止めてあるから、それ以下には假令どうあらうとも下すことが出来ないのである。)

處が最初から女を弄ぶ意思で、出鱈目な虚言を言ひ、まんまと欺き散々弄んだ結果が、雲を掻き消すような卑怯さを臆面もなくやつてゐる、全く恐るべき惡辣な男は、無關心に、高見の見物をしてゐるのだ。これが不公平でないと言ふならそれまでだが、私はそうはどうしても思へない。

何時も女から嫌はれてゐながらも、そして、生氣地なしと笑はれてゐながらも、猶且つ女の味方をする。馬鹿な男だお目出度い野郎だ。阿呆な奴だと罵る男があるかも知れない。しかし、そう言ふ男は、女の方で先づ近寄らないようにするがよい。——などと體裁の好いことを言ふと、此度はお膝元の方が、却つて甘言が上手なように思はれ其の結果は、遂に色魔狂の如く疑はれそうだから、須らく同類項の惡口は控へるべしだ。

冗談はさて置き又しても理窟らしい理窟を言ふことになるが、鬼に角、かうした女性の犯す嬰兒殺しには、随分同情すべき者が少くない。これがどうして反社會的な行爲だ。どこが悪いんだ。人間が生きようとするのが、どうして悪いのだなどと、厭に力コブを入れなければならぬ程の哀れな婦人が往々にしてある。

そうした者に對し猶三年の刑を以て、處罰することが、公平の觀念に反することは言ふまでもないことだが、日本の法律は鬼に角、そう言ふことになつてゐるのである。

それから又我が法制では、戸籍上實子を三階段に區別し、法律上正式な婚姻をした父母の子を嫡出子と言ひ。野合私通より生じた子を私生子と言ひ。而かも、其の私生子は父母が正式に婚姻



すると、嫡出子なる身分を得ることになるが、父母が婚姻せず單に父が、私生子を認知するだけであれば、庶子たる身分を獲得することになるのである。尙これを明瞭に書き替へると、

▽嫡出子（父母が正式に婚姻した子）

▽庶子（私生子を父が認知した子）

▽私生子（母のみが認知した子）

以上の如くであるが、かうして區別することが、果して適を得た立法であるか否かに付ては、無論、異論がある。そして、それは一利一害ではあるが、私は寧ろ實際の立場から考へて、かかる區別の全廢に賛成するものである。

何故なれば、かうした區別がある爲めに、それが犯罪に對する遠因となる例が、社會の實狀に徴して少なくないからである。そして、それは獨り私生子たる身分を得た者の犯罪許りでなく、其の親、其の子も亦、これが犯罪に對する遠因となるが如き例も少なくない。

例へば私生子を生むのが、辛らさに墮胎をなすが如き或は又生れてから、それが私生子であることを悲しみ、これを殺害するが如き不心得者も案外少なくない。

私生子より生れた子が、遺傳性によつて、罪を犯すが如きは、事實に見るも又學者の統計を見るも、決して其の數は甚少でない。

斯くの如く私生子と言ふ戸籍上の身分が、其の者を過らしめ、而かも、これに絡らむ多くの者を失望させ、過らしめてゐることからして、これが改廢の急務なことは言ふまでもない。が、しかし、我が國のように家族制度を採用し、此の理論を徹底的に貫く時は、又は屆出主義を強制する時、これが改廢は容易なことではない。

尙参考の爲めこれに關する一つの例を擧げて見よう。

これはづつと昔のことであるから、多少事實と差異する點がないとも限らないが、何んでもと言ふ十九の娘が、村の若者Nと呼ぶ青年と、戀に落ち、人眼を忍びあい曳きを續けてゐると、間もなく、それは恰度アイン、スタイン氏の相對性原理のように（一つの小石を投げると、或一定の間空間を飛び、聽て大地に落下する自然界の法則のように）男の投げた小石は、聽て女の腹中に、一つの塊りを生じ、そして、それが不思議に生活資力を有し、聽ては人格を創造することになるのだつた。



處がS女は或晩、Kと言ふ矢張り同じ村の青年と、再び情を通じたのが、重大なる過失となりNはそれを口術に子供の引取方を拒んだのである。

そこで女はKに泣きついて見たが、無論それは駄目だった。

女は遂方に暮れた。Nを憎んでも見た。が、期する處は世界的大原則、「愛引仕多淫」の結果でどうにもしようがなかつた。

遂に子供は安々と生れた。そして、喧々こごう／＼の中に、丁度三月は過ぎた。

處が五月蠅いのは世の中である。人の自分に何んの関係もないことに、カコブを入れ恰度、目の上の敵のように、「誰々さんは私生子産んだつて言ふぢやないか」。などは既に過ぎたことだがSが子供を抱いて往來にでも出ようものなら、恰度珍奇な見世物でも飛び出して来たように、仕事の手を休め穴の開く程見つめた上、それを隣り近じやうへ觸れ廻ると言ふ御親切な人が多かつたのであつた。

殊に甚だしいものになると、そうした痛々しい、全く惱ましい、氣の毒な彼女の身の上など、知らぬ顔の半兵衛で、彼女の兄弟達に向つても、矢張り嘲笑の眼を以て見るのであつた。

それだから彼女の親達兄弟達が、彼女を罵り、罵倒し、中傷し、小言を言ふのは當然なことだった。多くの人から不名譽を負はされる腹いせが、憐れな彼女の上にふれ向けられるのも決して無理ではなかつた。

それに彼女は、行く先きのことも考へたことであらう。不名譽な子供を抱えて、生活に窮する有様など、不快なことの多くを考へたに違ひない。

兎に角、彼女は生後三ヶ月に、着物で嬰兒を壓殺したのであつた。

此の例などは決して珍らしい事件ではない。世間には幾らもある例だが、かうした事件の内幕と、犯人の心理状態を細密に調べると、確かに婦人生活の半面が窺はれることであらう。

## 一二 ヒステリーと犯罪

ヒステリーが婦人特有の精神病であつて、而かも、感覺、知覺、運動、感情等の精神作用を犯す處の精神病であることは言ふまでもない。



即ち身體全部の神経系統を侵す處の精神病であるが、主として感情や、感覺や、性慾等の障害をなすものである。

これに關して澤田氏は、次のような説を立てる。

即ちヒステリーは、腦の作用が病的に異常を呈し、精神に障害を來たすものであるから、腦に感覺運動の刺激が起つても、精神上には弱く現はれ、或は又現はれないことがある。例へば感覺麻痺や、運動不能等の症状はこれである。

だがこれと反對に、腦の刺激に對して、非常に強大な精神反應が起ることがある。即ちこれは感覺過敏や、痙攣等であつて、感情も亢奮性となるから、種々な病的症状を呈し、烈しい感動が起るものであり、又その感動其のものが、身體に影響を及ぼして一層患者の症状を紛叫せしめることがあると言ひ。

尙ヒステリーは、非常に暗示性に富んで居るので、他から暗示を與へるときは、自然に疾病が起ることがあると言ひ。例へば手足などが、麻痺してゐると言ふ觀念によつて、實際麻痺を來たすものであると。

此の説に對する賛否は、暫らく惜くとしても、ヒステリーが暗示によつて、進轉し、疾病等を起すが如き場合は、實際に見てあり得べきことである。

そこで此度は、ヒステリーになる原因であるが、これに關しても亦、一般専門學者の間には、其の主張する處を異にしてゐる。即ち過去の事件、遺傳關係等何れかの事由に因るものとしてゐる。

即ち其の一つは、過去に於ける種々な迫害、例へば猥褻によつて被つた悲哀、憤怒、羞耻と言つたものが、深く精神中にこびりついてゐる爲め、それが烈しい刺激に遭ふと、遂にヒステリーになると言ふのである。

其の二は遺傳的の病素質が、其の原因で、強度なる精神状態や、潜在せる觀念は、寧ろこれを助長するものであると言ふのが、澤田氏一派の説である。

が、しかし、ヒステリーの原因を以上、何れかの一つに局言することは、餘りに狹義な解釋と言はねばならない。何故なれば、過去の迫害に於ける羞耻や、虐待や、憤怒や、その他激烈な感情争闘の念が、深く精神中に潜在してゐる爲めに、ヒステリーとなる場合もあらう。そして、又、遺



傳性による病素質が原因で、而かも、それが強度な精神状態や潜在せる觀念によつて助長される場合もあるであらう。だからこれを區別し、其の何れかによるのは、誤解と言はねばならない。

兎に角、何れの説に従ふも潜在意識が基調となり、遠因となつて現はれることは、何人も争はない處である。そこで潜在意識のことを一言して置かう。

潜在意識は言ふまでもなく、變態心理の一つで、其の文字が示すように、一つの事柄が精神中のどこかに刻み込まれてはゐるものゝ、それを意思に發表することが出来ない場合。例へば甲に會ふことは會つたが、それがどうしても思ひ出せないと言ふ場合に、圖らずも夢で其の事實を知つたと言ふが如きである。

かうした例は、決して少なくないが、殊に甚だしいのになると、晝間どうしても解することの出来ない算術を夢の中で安々と解したと言ふが如き珍らしい例もある。

かうした變態心理が、犯罪と關係があることは言ふまでもないが、餘り脱線の氣味があるのでこれ位ひにして置くが、殊に婦人には潜在意識が、最も多いのである。例へば二十餘年も経過した昔のことを夢の中で、思ひ出しそれを一生、忘れずにあると言ふような實例は、決して少なく

ない。

何時だつたかかう言ふのがあつた。それはMと言ふ婦人が、結婚後五六年も経過した時、すっかり忘れてゐた初戀當時のことをうわごととしたので、離縁になつたと言ふのであつたが、全く不思議な現象である。

處がヒステリーの原因たる潜在せる過去の迫害の如きは、變態心理の潜在意識とは、其の趣きを異にしてゐる。即ち此の場合の潜在せる意識は、はつきり意思によつて、表現し得ざる場合は勿論、明瞭に意識しはつきり記憶を呼び起すことの出来る場合も包含してゐるのである。否、寧ろ當時の迫害を記憶によつて、呼び起すことの出来る場合が多いのである。

それから又、ヒステリーを助長させるものは、生殖器病、月經、妊娠、産褥等である。が、其の中でも月經異常の場合には、最も著しいもので、遺傳的素質による者など、多くは月經の異常によつてヒステリーになる。

それから又、外界の刺激による場合、例へば虐待、營養不良、強度なる精神の過勞、過房、睡眠不足、運動不足等も亦ヒステリーの原因を助長すべきものである。



殊に梅毒の感染が、重大なる影響を與へることは、多言を要しない事實である。

ヒステリーの症状としては、先づ生理的に、身體に痙攣を起すこと、殊に甚だしいものは、運動不能となること、疼痛を感ずること、新陳代謝の機能に障礙を來たす結果、性慾の衝動を害すること等であつて、精神上には感覺を障礙する結果、度量の觀念に異常を來すことがある。そして又、感情の麻痺を生ずることがあるから、暗示にかゝり易く、物事に冷淡になり、若くは一圖に考へ易くなるのである。

これ等のことは、何れ心理編に詳説する機会があるから、これ位ひにして、ヒステリーの責任能力のことを一言して置かう。

要するにヒステリーは、婦人特有の精神病であるから、男子は往々にして、これを曲解してゐる。甚だしいものは、男子の神経衰弱と同一のものゝ如く考へてゐる者がある。即ち男子の神経衰弱に對するものが、婦人のヒステリーの如く誤解してゐるのである。

かう言ふ譯で、ヒステリーの犯罪能力を定めることが、如何に無謀であり、滑稽であるかは、多言を要しないことだが、兎に角、ヒステリーから來る婦人犯罪が、女性犯罪の中可なり上位に

あることは、識者の總計を見ても解ることである。

少くともヒステリーからくる犯罪が、精神障礙の結果であることは、自明の理である。

そこでヒステリーの犯罪が、どう言ふ種類のものかと言ふに、それは一概に言ふことは、無論出來ないことではあるが、これを大別すると、

- (一) 嫉妬から來るもの——殺人、傷害、放火。
- (二) 虚偽から來るもの——偽證、誣告、侮辱。
- (三) 色情から來るもの——猥褻、姦通。
- (四) 朦朧状態から來るもの——萬引、嬰兒殺し。
- (五) 復讐から來るもの——殺人、傷害、放火。

等である。が、これは固より識者の總計から來る普通の順序である。

處で犯人の精神障礙の程度に至つては、各人必ずしも同一とは言へないが、ヒステリーと言ふ特別の精神病者と言ふ點から、觀察すると、必ずそこに共通した障礙がある。其の障礙こそ犯罪能力に重大な影響を及ぼすものである。言ひ換ふれば、ヒステリーが刑法上如何なる地位にあるか。



即ちヒステリーなるものは、刑事無責任者とすべきか。若くは減弱能力者とすべきか。或は又普通人として、正則なる意思能力を有する者かの問題である。

が、しかし、如何に残酷な取扱ひをするとしても、ヒステリーの婦人を正則に、意思を決定し得る完全なる人間として取扱ふことは、何人もこれに反対するであらう。

彼女は精神病者ではないか。ヒステリーと言ふ精神病者である。

少くとも常則な精神を持たない、而かも、正則に意思を決定し得ることの出来ない減弱能力者である。言ひ換ふれば物事を正則に決定し得る能力に欠けて居るのである。そして、それは感覚に於て、知覚運動に於て、感情の激變に於て——。到底常則者の理を以て論ずることが出来ない。

彼女は精神病者ではないか、婦人参政權獲得の提灯持ちも結構だが、かうした精神病者に向ふに、先づ暴力を慎んではどうか。現にモガと稱する婦人などは、日本の男にあいそをつかし「外國の方は人格を尊重して下さるから好きよ」などと自らなぐさみ者を志望する婦人の多いことを退いて考へて見るがよい——。などと書き出すと、飛んでもない方面に脱線するから、先づこゝらでヒステリーに關する實例を擧げて、諸子の御参考に供しよう。



害傷の人婦—リテスヒ



それは大震災直後のことであつた。私は多くの人と同じように、東京から追はれ、大きな柳行李を負つて二里以上の道をあえぎ、新宿驛に着くことは着いたが、構内はわれるような人だかりで、殊に列車が来る度毎、戦争よりも烈しい人間の争闘、それは全く野獸に等しい、そして、淺ましい人間のみの集合であつた。女が、男が、若者が、老人が、眼の色を變え、唇を戦かせ、今にも食ひつきそうな權幕で人を押しつけて雪崩込む様は、とても筆紙に盡しようがない。しかし、それでも何番目かの列車に駆あがつた私は、何時の間にか大きな荷物を惜氣もなく捨て、ることを今更らのように、意識し微笑んでゐた。そして、其の時は別に後悔もしなかつたが、後でよく考へて見ると、其の中には大切な原稿が五六百枚も押込んであることに氣がつくと、遁が青くなつた。

それは兎に角、私は入口の處の板場に腰を降すと、間もなく車中は立すいの餘地もなくなつたので、屋根上によぢ昇るもの、窓にぶらさがるものなどが可なりあつた。

聽て汽車はのろくさと、恰も人間が歩くように、のたくたと動き出した。全くのろさ加減は、言語道斷であつた。甲府まで行くに、丁度一晝夜を要したことによつても、如何にのろ臭かつた



ことが解るであらう。最も途中二三回降ろされては、我れ一にと駈け出したものであるが、それにしては汗くさい人達がお互ひに身動きも出来ないで、びつしりつめ込まれて一晝夜もゐるのは苦しいことに違いなかつた。

かうした苦みの中にも目的とする大阪驛に着いた。が、もう其の時は午前一時を過ぎてゐたので、多くの避難民と共に會根崎署の柔道館に、一夜を明すことになつた。

こゝで二つ小つほけな事件が、突如としてほつ發した。と言ふのは、速ぐ私の傍に寝てゐる青年が、母親連れのせいゝ十五六位ひの小娘に、言ひ寄るのだが、娘は残酷にそれをのける。青年はしつこく絡んで行く。娘は耻かしさの餘り聲も立て得ず蹴る。男の手を挑ねのける。何故か其の騒ぎにも母親は黙々として、一言も小言らしいことも言はなかつた。

聽て女は晝の疲れでスヤ／＼と安らかに眠入つたので、執念深い男は、娘の腰の邊りに手を置いて、彼も亦眠入つて了つた。

かうした處で眠ることが出来ない私は、戯ら心が手傳つて、頭を掻けて見た。だゞ廣い柔道館には縦に、横に、枕を並べ、或は差し違へに凡そ四五十人が正體なく寝入つてゐた。

殊に私のすぐ傍に、若い女と男とが、殆ど絡み合つて寝てゐるのが、際立つて私の眼を惹いた。それも其の筈である。男の頑丈な手が、女のふくよかな丸々とふくれあがつてゐる艶めかしい乳房の上に、そつと置かれてゐるのが、薄暗い光りに、ほやけて浮んでゐるではないか。そして、それが氣の性でもあらうが、時々怪しく動いてゐるのではないか。そんな筈はないと、眼をこすり／＼改めて見直したが、矢張り動いてゐる。見直せば見直す程、微かに動いてゐるのがはつきりと意識されたのであつた。

それから間もなく夜が明けたので、私は目的の友人の家を訪れた。全く私は友人△がまだ獨身でゐると許り思つてゐたのに、極めてハイカラな年頃の婦人がゐて、而かも、それが妹にあらず女中にあらず、喃々蝶々たる寝物語りをやらかす新婚間もない新婦であることが、二人の會話によつて、直ちに發見されたので、聊か面食つた。最も私は生憎問題を起しそこな御面相ではないが、それにしても新婚間もない喃々蝶々たる處の情景を見せつけらるには、まだ少し年が足りない。と言ふ程純な、おほこな人間ではないが、兎に角聊か勝手が違つたことは事實であつた。

處が先方の御夫婦は、幸にしてそうしたことには、一向頓着なく。口を揃へて親切に言つて呉



れたので、兎に角、そこに落ち附くことになり、相變らず原稿紙と睨みつこを始めたのであつた。  
 Aの細君は所謂、モガ式の女で、嘗つては女子大學へ通つてゐたと言ふ新らしい婦人であつた。  
 しかし、性質は決して悪い方ではないが、とてつもない大きなことを平氣で言つたり、イブセン  
 がどうだの、トルストイがどうの、モウバツサンがどうのダンテがどうの、ニイチエがあゝのと  
 誰れでも知つてゐるような説教を始めるので四五日も経つと早くもAと衝突するのを時折見受け  
 るようになった。

Aは洋行までして來たと言ふのに、どうしたものか、細君に對しては、絶對服従を要求した。  
 最もAの言ひ分を聞いて見れば、男なれば最もと肯首くに違いない。と言ふのは、Aは或會社に  
 勤めてゐたのであつた。だから、「晝間上役の機嫌をとつてゐるのに、家へ歸つて又細君の機嫌と  
 りなど出来るもんか」と言ふのが、女房絶對服従の根本理由だつた。

そこで當然起るのが、以上新舊思想の衝突である。女は國權を叫ぶ、男は日本獨特な男の權力  
 を示す。丁度私が世話になつてから、十日目か十一日目だつた。先づ夫婦喧嘩の皮切りが始めら  
 れた。それは三人が食卓について、夕餉をやらうとしてゐる最中、ちよつとしたことが、圖らず

も細君の痛に觸り、どよのつまりが「えッ……」と叫ぶと、茶舞臺の上を掻き廻したので、お  
 汗がひつくり返へる。茶碗が飛ぶ。肉鍋が轉覆する。箸に羽が生える。茶舞臺が宙返へりをする  
 と言ふ、とてつもない大騒動が始まつた。しかし、私はそうした騒動にも決して、口を利かなか  
 つた。私の主義が夫婦喧嘩は、自然に納まるものでもあり、而かも、下手に仲へ遣入ることが、  
 却つて危険になり、どちらに味方をしてもよくないことであり、更らに變つてこな仲裁をするこ  
 とが、誤解をまねくことになるから、其の時も超然と高見の見物をしてゐたのであつた。しかし、  
 先き廻りをして危険な物を取り除けるのは、此の限りでない。

兎に角、第一回の開戦が終ると、それから二日目三日目とかんかつ的に、思ひ出したように  
 時々行はれるものである。A等も矢張りそうした順序で、時折り繰返してゐた。

殊にその中でも激烈であつたのは、愈々寝につかうと言ふ午後十時過ぎに、時ならずも一大開  
 戦がとり行はれた。とりわけAが烈火の如く怒り、「貴様のような奴は出てうせ」と女の行李を玄  
 關先きへ投げ出す。女は齒ぎしりして噛みつきに行く。男が突き飛ばす。女は起きあがつて噛ち  
 り附く。と言ふ頗る物凄い場面であつた。



そうした冒險的な物凄い格闘を見るに忍びずとう／＼、家を飛び出した私は、歩くともなし、ぶら／＼とやつてゐる中に、變んな處に迷ひ込み變んな家に泊つたなどは、悲劇中の悲劇であつた。

それが今一つ物凄かつたのは、女がAのいつちよらいの着物を掴みめり／＼と、裂き始めたので、Aの驚きは言ふまでもなく、通がに私も驚いた。無干渉主義も傍觀主義もあつたものではない。屈竟な男が二人で、漸くのこと、もぎとつたが、そう言ふ場合になると、とても力強く、全く狂人そのもの／＼ように無鐵砲であるから始末に了へない。

丁度一ヶ月で我慢し切れず背水の陣を引くことになり旅館まがえの或高等下宿に移つたが、私が出る間もなく、近隣の人と口論し他に轉居したそして、それからと言ふものは、殆ど一ヶ月毎に轉々してゐるが、とう／＼Aにも見做されたと言ふことである。

今一つの例は私が大阪から歸つて來た時、友人の紹介で、二ヶ月足らず某家に素人下宿をしてゐた時の話であを。

家の細君と言ふのは三十ちよつと過ぎた許りの一見して、ヒステリーを思はせる女であつた。

全く眼が奥深く、口元に痙攣を起し、而かも、顔全體が陰險で、言葉使ひさへも何んとはなしに、陰鬱を感じさせる女であつた。

無論、此の女も可なり激烈なヒステリーの持ち主だつた。と言ふのは、時々夫婦喧嘩がほつ發することゝ、亭主の留守に繼子達をひどく虐待することゝ、そして、時折り險惡な言葉使ひをすることによつて、それが如何に激烈なヒステリックな女であるかを知ることが出來たからである。しかし、かうしたことは、今更らしく書き立てる程のことではないが、其の中でも客人としての私に對する行ひが餘りにも露骨で、無謀で、而かも女としての慎しやかさを失つた狂的な行爲が多かつたことを参考までに書いて置く。

それはかうである。實を言ふと私は、過激な筋肉労働をしない者としては、却々の大食家である。だから口の悪い奴が往々「痩せの大食ひ」などと陰口を叩く程である。と言つた處で、一升飯を食ふ者に比べると、其の半數にも足りない四合内外のけんたん家である。

が、しかし、前記の細君には、可なり手厳しくやつけられたものだ。三ばい四ばい重なる、定まつたように「まだですか、随分いけますね」と先づ顔をしかめるのであつた。意地つ張りの



私は、そう言ふ時に限り無理にもつめ込む、女の手が怪しく慄えほんの一口か二口しかよそはなくなる。意地つ張りはどこまでも意地を張る。遂に泣き出しそうになる。それでも亭主は、黙々と二人の見苦しい争闘を見てゐるのが常だつた。

今日から考へると、全く喜劇としか思はれないが、當時私は妙な處に意地を張り、而かも、大人氣もなく可なり眞剣だつた。何故そんなことに、眞剣であつたかと言ふに、それは事柄が、餘りに見苦しいことであつたこと、相手がひどく露骨であつたこと、常人たる亭主がそれに對し小語一つ言はなかつたこと、更らに契約通りの宿料を拂つてゐたことなどが、意地つ張りの私を一層意地つ張りにした譯である。

けれども、感情を抜きにして、よく考へて見ると相手は正則な決定を爲し得る能力に欠けたヒステリーであり、而かも、彼女は無智文盲の女であつたから、三度の食事を二度にし一度は、外で食へることに譲歩したのであつた。

かうして二ヶ月は過ぎたが、全く大飯食ひが辛いものであることをつくづく感じたと同時に、養子としての要件に欠けてゐることを悟つたのであつた——。は少し大袈裟だが、兎に角、ヒス

テリーの婦人が、時に狂的になることは、以上二つの體驗によつて、泌々と考へさせられたのである。そして、其の心理状態も此の事實によつて、略ぼ察知することが出来た。

そこで此度は、ヒステリーの婦人の犯罪であるが、これに關する變つた例は、決して少くない。が、其の中でも特に最近行はれた「けちなお七、年増女の放火」と題するヒステリーの放火事件は、此の場合の例としては、最も適當なものである。

自分から離縁を迫つて別れながら、再縁を求めて容れられないところから、大正十五年十二月十四日の夫府下平塚町小山四東方清吉(假名)方合カギをもつて運び込み火を起して飯を食へ、その上めぼしいものは質入すべく風呂敷包にして持ち出して放火し、附近數戸を焼いた平塚町戸越二六一谷中すえ(假名)方谷口こと(假名)三十一歳の放火事件公判は三十日午前十時半東京地方裁判所〇〇裁判長、〇〇検事係りで開廷、被告は全部犯行を否定し、検事は犯行の結果は多大の被害を及ぼしたが動機はヒステリックによるもので同情出来るからと懲役五年を求刑した。(昭和二年四月三十日報知新聞所載)

以上の犯罪がヒステリーに近因し、結果に對し重大な影響を與へてゐることは、今更ら言ふまでもないことであるが、要するにヒステリーになると、感覺並に知覺運動を障礙し、ひどく感情